

岩手県文化財調査報告書第七十六集

岩手県「歴史の道」調査報告書

浜
街
道

岩手県教育委員会

岩手県「歴史の道」調査報告書

浜 街 道

序

本県は、日本列島の東奥とよばれる地域に位置し、県では全国一の面積を有しておりますが、山地が多く交通が大変不便でありました。しかし、近年における社会開発の進展は、歴史的に由緒のあるふる里の道にも影響を与え、日々近代的な道路の建設が県内各所で行なわれ、私達の生活を快適にしていますが、その反面、自然と人情に心を通わせることのできた古道に残る道祖神・道標・一里塚や並木道の交通遺跡が急激にその姿を消しております。

こうした現状を重視し、本県では昭和五十三年度から国庫補助を受け、4ヶ年計画でこの歴史の道の調査を実施して参りましたが、本年度は最終年次となりました。

本報告書は、本年度に調査した三街道のうち、仙台領本吉郡気仙沼から岩手県に入り、三陸海岸の釜石・宮古と北上し、八戸藩領の久慈を経て青森県にいたる「浜街道」について、街道の現状と文化財の保存状況など、その周囲の環境を含めて総合的に調査し、その成果を集成したものであります。

本書が、今後の交通関係遺跡の保護及び歴史の道研究の一助となれば幸いです。

なお、調査に御協力いただきました調査員各位並びに関係市町村教育委員会をはじめ、諸資料を提供して下さった方々に対し、衷心より感謝申し上げます。

昭和五十七年三月

岩手県教育委員会

教育長 新里 盈

例言

一、本書は歴史の道「浜街道」に関する報告書である。

二、本調査は主として次にあげるものを収集し、調査を実施した。

(一) 収集したもの

古文書、地誌類、紀行文、古絵図類や明治時代の実測図など。

(二) 調査した事項

(ア) 道及びこれに沿う地域に残る遺跡の分布状況と保存の実態。

(イ) 江戸時代の国界・藩界及び郡名。

三、本調査の調査員は左記のとおりである。

主任専門調査員 草間 俊 一 岩手県立盛岡短期大学学長

専門調査員 細井 計 岩手大学教授

専門調査員 吉田 義昭 盛岡市教委文化財専門員

地区調査員(陸前高田市) 村上 重吉 陸前高田市社会教育委員会議々長

地区調査員(大船渡市) 金野 菊三郎 大船渡市文化財調査員長

地区調査員(三陸町) 熊谷 常孝 三陸町文化財調査員

地区調査員(釜石市) 武山 利一 釜石市文化財保護審議会議々長

地区調査員(大槌町) 沢 錦 栄吉 大槌町文化財審議委員会委員長

地区調査員(山田町) 佐々木 元二 山田町郷土史編さん資料調査員

地区調査員(宮古市) 田村 忠博 宮古市文化財保護審議委員会

地区調査員(田老町) 田 沢 真志 田老町教育委員会教育長

地区調査員(岩手町) 三浦 平一 岩手町文化財調査委員

地区調査員(田野畑村) 佐々木 哲夫 田野畑村史編さん室勤務

地区調査員(菅代村) 北田 博 菅代村文化財保護委員

地区調査員(野田村) 小田 正午 元野田村教育委員会教育長

地区調査員(久慈市) 沢 里 金五郎 久慈市文化財保護調査員

地区調査員(横手町) 野 田 松雄 横手町文化財調査委員

四、調査の方法は、地区調査員が調査カードを作成し、調査カードにもつぎ専門調査員が確認調査を行なった。

五、本書は、北部(宮古市・横手町)を主任専門調査員草間俊一が、南部(陸前高田市・山田町)を専門調査員細井計が執筆し、文化財が編集にあつた。

目次

序

岩手県教育委員会教育長 新里

盈

例言

第一章 まえがき

..... 6

第二章 街道の現況と文化財・その他

..... 8

第一節 陸前高田市・山田町

..... 8

第二節 街道沿いの文化財・その他

..... 29

第三節 宮古市・種市町

..... 50

第四節 街道沿いの文化財・その他

..... 58

第三章 街道沿いの公開施設

..... 95

第四章 むすび

..... 96

写真

地図

第一章 まえがき

(1) 浜街道について、『岩手県史』は、『封内實験記』によって、『大槌街道と浜街道』を作成して、次の如く述べている。

大槌街道と浜街道

(前略)

大槌	山田間 二里三四丁五〇間	山田	豊間根間二里一〇丁
豊間根	津軽間 一里一九丁一〇間	津軽石	宮古間二里一九丁五〇間
宮古	崎山間 一里六丁五十四間	崎山	田老間一里半
田老	乙部間 六丁	乙部	換持間三里
換持	小本間 二七丁一〇間	小本	大芦間二里九丁
大芦	田野畑間 二里二丁	田野畑	普代間二里五丁三〇間
普代	野田間 二里三〇丁		

しかし、浜街道と云う名称がつかわれているわけではないが、岩手県立図書館にある『南部領内行程』には次の如くある。

海邊道は、海原ヨリ北八田郡大槌終点

- 一 平田ヨリ平田坂石塚境目迄廿壹丁仙台領唐二江出ル
- 一 平田ヨリ等石浦迄此処道規本紙二毛無し之
- 一 等石浦ヨリ大槌迄二里此間山坂川有榎野川
- 一 広サ二間深サ 小槌川廣サ貳尺深サ五寸
- 一 大槌ヨリ山田迄四里此内山坂川有
- 一 大槌川廣サ二間深サ壹尺
- 一 磯笠川廣サ一間深サ一尺
- 一 山田ヨリ宮古迄五里此間山坂川有

飯岡川廣サ一間半深サ一尺

津軽石川廣サ四間深サ二尺

間伊川廣サ拾五間深サ二尺

一 宮古ヨリ小本迄五里此間山坂有

一 小本ヨリ普代迄五里此間山坂有

一 小本川廣サ拾六間深サ二尺

一 松崎坂 一里半離所寄中牛馬不遠

一 牧沢山 一里半右同斷

一 普代ヨリ野田迄二里此間川三ツ有

一 普代川廣サ六間深サ一尺

一 安家川廣サ八間深サ一尺五寸

一 玉川廣サ一間半深サ一尺

一 野田ヨリ大川目迄一里此内山坂川有

一 野田川廣サ廿間深サ一尺

一 久慈川廣サ四間深サ二尺

一 大川ヨリ種市迄九里半此間川三ツ山坂有

一 小慈川廣サ四間深サ二尺

一 久慈川廣サ七間深サ二尺

一 閉伊川廣サ一間深サ五寸

一 種市坂六里離処雪中牛馬不遠

一 種市ヨリ八戸迄四里此間川有

(以下略)

① 野田以北が、どの道順になるか不明なところがある。

これによれば、浜街道は『海邊道』と云われていたが、明治時代には『浜街道』と一般にいわれていた。これを『岩手県史』によって見ると、『明治十四年頃の奥國道を見ると、(中略) 國道浜街道は宮城縣下氣仙沼を経て岩

手県に入り、二陸海岸を経過して青森県下に通ずる沿岸線で、之は三等国道であった。浜街道の駅名を明治十四年度の例に見ると、気仙・氷上・盛一・古浜・小白浜・釜石・大槌・船越・山田・津軽石・宮古・田老・小本・田ノ畑・菅代・宇部・久慈等の十七駅が設置されており、これが沿岸郡村の陸上交通線の上軸をなすものであった。これによって、明治十四年の「人馬車軌立所」設置によって「気仙・氷上・盛・吉浜・小白浜・釜石・大槌・船越・山田・津軽石・宮古・山老・小本・田ノ畑・菅代・宇部・久慈・種市」が設置されている。

しかし、この浜街道について、明治の中頃二十年代には「従前二等国道と称せられた浜街道は、その後も国道扱いをうけたかどうか明らかでなく、岡上だけの国道に終った様子である。」そして、「明治二十五年まで、県内の県道と称するものは十五路線あったが、県費支弁が困難であるとして、小本・九戸・津軽・釜石・平和・気仙沼・宮古の八街道を存置して、その他のことごとく廃止したいという要望は県会から出され県道から除外されている。この時気仙沿岸から九戸沿岸に達する浜街道が県道からも除外された。(岩手県史第一十巻)」という状況であったが、しかしながら、翌二十六年の県会で、秋山・釜石・今泉・浜街道の県道組替が可決建議され、県道再編入が論議され、ついで同二十八年の県会で、六路線の県道編入が可決されている。その県道編入も明治二十三年には、また廃止されるという状況であった。

この浜街道も、昭和四十年代になって、国道45号線としての整備完成は、従来の国道と面目を一新した。その際、旧国道を利用して整備したが、一部つけかえられて廃道となった旧国道は県道として残るところもあれば、市町村道になるところもあり、単純ではない。旧国道の方が江戸時代の旧道を利用するところが多かったが、それでも、旧国道も一応自動車を通れるような改修が行なわれているので、歩行を主とした旧道とは相当違っているところも多い。

(2) 二陸海岸は閉伊川を境に、南部は沈降したりアス式海岸線で、出入がけしいので、所により山越の坂はあるが、長根道が多く、急坂は少ない。北部は隆起海岸線で、標高・〇〇m前後の準平原の台地から、断崖をなして海に臨んでいる。この台地を西から東の太平洋に流れる河川が、台地を深く開析して、深い渓谷を作っている。この台地を南北に通ずる道路は、この渓谷の谷底に下りて、また登らなければならないので、難所が多い。この状況を安政年間「三閉伊路程記」によって見ると、「菅代より羅買込 此街道筋坂路曲部多くして至て難道也」

羅買より小本迄 此の街道筋山にて木立打茂り到て難道也、其中にも松前沢・馬木沢坂など類ひなき急なる坂有

田老より宮古迄 此通筋ハ大方山坂にて難道なれども宇部より田老迄とくらふれハ大きによき道也

とあるのに対して、南部については、

「津軽石より豊間根迄 石峠坂より石峠村迄長根道也、石峠より豊間根までハ平地にて右左の山打ひらけたるよき道也」

豊間根より山田迄 此道筋ハ新田・田名部・山口・小沢など里続也。夫より長根道にて山田入口の辺少平地也」とあり、ただ難所と記されているのは次だけである。

「山田より大槌迄 海岸通ハ四拾八坂とて大きな坂いくらとなくつつきて難所也」

(3) 南部領の浜街道の場合、一里塚は最初案かれて以後、補修が良くなかつたらしく、「三閉伊路程記」や「三閉伊道中図」の作製された安政年間に、一里塚の残るものが少なかったのか、記述されているものが少ない。南部惣領図に一里塚が記されているに拘わらず、その場所に記入されていない。ただし今度の調査で、路程記と道中記に記されていなくとも、一里塚の現存しているものも若干あった。

ただ、現地調査員の報告に陸地測量の水準点を、里塚と称しているとして、報告して来たものがあつたが、根拠が不明なので全部削除した。

一里塚は本来平面は方形であつたが、長年のうちに角がまるくなつて円形になつてしまつていたので、円形の直径で表現した。

(4) 「サイノカミ」は「塞ノ神」「妻神」「オノ神」「オサイノカミ」などの表現があつたが、資料の根拠もはっきりとなく、調査員の判断で用いているように認められたので、「サイノカミ」で統一した。「三閉伊路程記」では「妻神」を用いている。

(5) 「三閉伊路程記」「三閉伊道中記」は、盛岡市公民館本であるが、宮古市の田村調査員によれば、道中記は安政四年の「三閉伊海岸分間図」盛岡市公民館本を簡略にしたものであるという。ここでは路程記、道中図共第二巻を引用、抜粋した。なお、海岸通りでは、宮城県は伊達領、岩手県でも、久慈と種古は八戸領であつたので、当時南部領であつた現在の久慈市小袖から平田・唐丹の藩境までの記録である。それも小袖からはじまつて、野田→普代→田野畑の順になつていたので、この報告に併せて、順序をかえて平田→釜石→大畑の順にして抜粋掲載することにした。

(6) 現地調査員の調査資料に基づいて、南部の調査は七月二十九日～七月二十一日の二泊三日、北部の調査は、八月二日～八月六日の三泊四日で現地を調査して、執筆したもので、現地調査の不十分な点も多かったが、一応の江戸時代の道路の状況を推定して、現況を述べたものである。

第二章 街道の現況と文化財・その他

第一節 陸前高田市と山田町

陸前高田市

江戸時代の浜街道は、仙台領本吉郡気仙沼から気仙郡今泉へと通じていた。

安永六年（一七七七）の長部村（陸前高田市）の「風土記御用書出」以下、「安永風土記」という）に、

一 道 老筋

一上八本吉郡気仙沼町、下八当郡今泉町並之道

道法、当村境合（気仙沼町は小袖市三里）

とあるのがそれである。この道筋に沿つて、岩手・宮城の両県境に向う坂が「松ノ坂」で、「長七丁、本吉郡気仙沼之通路」（安永風土記）であつた。そして、県境に位置する松の坂峠地蔵の所が、岩手県分の浜街道（以下、旧道という）の起点である。江戸後期のものと思われるこの地蔵（高さ一三〇cm、花崗岩）は、木造瓦葺の屋根に覆われて山中に鎮座している。ここから北西にゆるやかにカーブしている坂道を約五〇m下ると、旧道から約七m離れた杉林の中に、文化九年（一八一二）の山神碑（高さ一〇五cm、幅六〇cm、厚さ二〇cm、砂岩）があり、それには「石さた、今いすみ、みなみけせんのみ」と刻まれている。地元の人が「水上の道標」と呼んでいるのがそれである。この道標から西南西に約三〇mほど山道を登った岩手・宮城の両県境に、年代不明のサイノカミの道標（高さ四五cm、幅二二cm、厚さ六cm、砂岩）が、山道の斜面に傾斜しており、それには「從足、みぎはやまみら、ひだりはけせんのみ」と刻まれている。このルートは、古い時代に使用されたらしいが、後に、松の坂峠地蔵に通じるルートに切りかえられたという。さて、水上の道標から北進する旧道は、長部川に架かる牧田橋を渡り、月山坂の登り口付近で国道四五号線（以下、国道という）と合流し、その先き左側に、嘉永四年（一八五二）の金毘羅大権現碑（高さ一六〇cm、幅八四cm、砂岩）が松の根元に建っている。この碑は海産物の江戸登せに活躍した村上清之丞が建立したものである。月山坂の登り口には古碑群がある。寛文七年

(一六六七)の梵字供養碑(高さ八〇cm、幅二五cm、砂岩)、享保三年(一七

一八)の西国三下二ヶ所順礼碑(高さ三〇cm、幅七〇cm、砂岩)、同年の庚申・世願成就碑(高さ一〇七cm、幅五〇cm、砂岩)、寛延三年(一七四九)の梵字供養碑(高さ二二〇cm、幅六〇cm)、明和元年(一七六四)の庚申供養碑(高さ一三〇cm、幅八四cm、砂岩)、安永四年(一七七五)の百一万遍供養碑(高さ二二〇cm、幅六〇cm、砂岩)などがそれである。

県境の松の坂峠地蔵から牧田橋付近までの旧道は、保存も良好で、往昔の面影が随所にしのばれる。できれば「歴史の道」として整備を加え、往時の浜街道として復原したい場所である。

さて、月山坂登り口の古碑群から約二〇mほど北東に月山神社があり、そこからさらに二〇mほど北東に真言宗長円寺がある。月山神社については「安永風土記」は、「一月山権現社 一小名 神田、一社地 南北五間、東西二間、一社 南向式間作、一地主、別当 羽黒派源右坊、一祭日 九月十五日」と述べている。長円寺については、安永六年(一七七七)の同寺の「書出」に次のように記されている。

真言宗宝尾山長円寺
一 開山之事 当寺ハ有明法印天正四年開山ニ付、当安永六年庚申百貳年ニ
遷成申候事
一 一小名之事 源太角地
一 本山ニ末寺之事 本山ハ当郡今泉村如意山金剛寺ニ御座候、但末寺無御
座候事
一 古ノ什物之事
一 大日如来 老体(木仏坐像、御長三尺五寸)、右御長等委細之儀ハ御
村書出、御書上仕候事
一 別当所之事 一 冠嶽神社(一社地 南北六間、東西五間、一社 東向三
間作、一 祭日 正月十一日)、神社老ケケ所ニ御座候処、右間敷等委細之儀
ハ御村書出、御書上仕候事 (以下、略、括弧内は「安永風土記」によ

り補足)

この寺の境内には、正徳六年(一七一六)の法界万靈平等利益碑(高さ二七cm、幅六八cm)のほか、年号不明の五輪塔(高さ八七cm)と石地蔵(高さ一三〇cm、高さ一〇cm)などがある。旧道は長円寺の前にわずかに残っており、その付近の国道から、右手に小原木街道(宮城県側では東浜街道という)が分岐している。その分岐点付近に、道標をかねた天保三年(一八三二)の山神碑(高さ一〇cm、幅七六cm、砂岩)があり、それには「右ハきせぬま、左ハこはらき」と刻まれている。日市の道標といわれているものである。そのほか、寛保三年(一七四三)の奉書一字一石碑(高さ二八cm、幅六六cm)、明和元年(一七六四)の奉庚申供養碑(高さ二〇六cm、幅八〇cm)、天明三年(一七八三)の大東妙典日本廻國碑(高さ九〇cm、幅二四cm)、江戸時代のものと思われる行地蔵(高さ七〇cm)などがある。さらに、小原木街道の分岐点から約三〇〇m東方に、日市城跡と八幡社がある。

一方、二日市で国道と重なっている旧道から分岐して、双六ノ要谷ノ福伏と南進する小原木街道は、やがて国道と合流して県境に達している。この県境線上に沿って、国道の東方に垂水明神社がある。「安永風土記」に「一小名 垂水、一社地 南北式間、東西二間、一社 東向式尺五寸作、一地主、別当 法武上屋敷甚之助、一祭日 十二月十五日」と記されているのがそれである。この小原木街道に沿って、垂水明神社から約一・一km北西の福伏には、正徳二年(一七一二)の供養飯会碑(高さ八五cm、幅五三cm、砂岩)、享保三年(一七二八)の庚申塔(高さ八五cm、幅三二cm)、同一四年の庚申碑(高さ一一三cm、幅九〇cm)、同一七年の供養巳符碑(高さ一四四cm、幅九四cm)、宝暦二年(一七五二)の法界万靈塔(高さ五〇cm、幅一六cm)、同一四年の庚申塔(高さ二〇〇cm、幅八四cm)、安永四年(一七七五)の庚申碑(高さ一九五cm、幅七六cm、以上いずれも砂岩)、年代不明の金毘羅大権

現碑(高さ二・五m、幅一・〇m、花崗岩)などの古碑群がある。

この福伏の古碑群から約二・五〇m北の要谷には、要谷館跡(標高〇m、東西約二〇〇m、南北約二〇〇m)と八坂神社がある。同社の境内には文化六年(一八〇九)の金毘羅大権現碑(高さ一・七三m、幅八六cm)、天保三年(一八三二)の三弄万壺塔(高さ一四〇cm、幅六〇cm)、万延元年(一八六〇)の庚申塔(高さ一九三cm、幅九〇cm、いずれも砂岩)などがある。さらに、同社から約六〇〇m北西の双六には、宝永五年(一七〇八)の奉建庚申供養碑(高さ二・一六m、幅七〇cm)、享保七年(一七三二)の梵字供養碑(高さ一〇〇cm、幅三六cm)、宝暦四年(一七六四)の春日供養、奉庚申供養碑(高さ一〇三cm、幅五三cm)、寛政二年(一八〇〇)の庚申七待供養碑(高さ三・三〇cm、幅八〇cm)、天保二年(一八四〇)の早池峰碑(高さ一七〇cm、幅五九cm)、慶応二年(一八六七)の金毘羅大権現碑(高さ一・六五m、幅六八cm)などの古碑群がある。

この双六の古碑群から約七〇〇m北に、建久年間(一七〇一)の勧請と伝える鹿嶋神社がある。「安永風土記」に「鹿嶋社、一小名、湊浜、一勧請、葛西御家臣二日市城主今野助九郎と申御方、建久年中勧請之由、申伝置候事、一社地、南北拾間、東西八間、一社、東向三間作、一地主、別当、龍藏院、祭日、十月廿七日」とあるのがそれである。同社の右段路場に享保四年(一七二九)の梵字供養碑(高さ八六cm、幅三六cm)、天保十四年(一八四三)の金毘羅大権現碑(高さ二・一七m、幅七七cm)、年号不明の金華山碑(高さ三・五m、幅九〇cm)などがある。また、同社から約二〇〇m南西の漆上長部口には天保二年(一八四二)の山ノ神碑(高さ一・五七m、幅六二cm)、年号不明の庚申碑(高さ一・二m、幅五四cm)がある。

さて、前述した二日市の道標付近で国道と合流した旧道は、その先ま、ほぼ国道と重なるが、今泉宿へと向っているが、その間の要石下の龍泉寺付近で、旧道が国道の左手に残っている。この旧道に沿って、二本松には元文五

年(一七四〇)の奉庚申碑(高さ一〇三cm、幅八六cm、砂岩)、安永三年(一七七四)の奉供養同庚六十六部碑(高さ一八〇cm、幅四七cm、砂岩)、寛政九年(一七九七)の不明碑(高さ一八二cm、幅七二cm)、文化五年(一八〇八)の金毘羅大権現碑(高さ三・三〇m、幅九四cm、粘板岩)などがあり、龍泉寺の前方には、延元□年の奉納書写碑(高さ七〇cm、幅五〇cm)をはじめ、享保三年(一七一八、高さ一〇〇cm、幅六〇cm)、同一四年(高さ一・一六m、幅六〇cm)、同七年(高さ一・六六m、幅六五cm)、明和元年(一七六四、高さ一・六三m、幅九〇cm)、文化五年(一八〇八、高さ一・〇八m、幅六〇cm)以上、砂岩)などの庚申供養碑が建てられている。龍泉寺は大正九年(一五八)の開創で、現在地に移ったのは寛文年間(一六六一―一七二)と伝えられている。同寺本堂の天上に描かれている龍は、嘉永二年(一八四九)の銘を有し、さらに、文化年間(一八〇四―一七)のものといえる鐘樓堂が、土蔵造の山門の上に建てられている。そのほかここには、正徳二年(一七一)の鐘、文化年間のものといわれる行地蔵(高さ一・八四m、台座六〇cm、花崗岩)と西前の石橋などがある。

この龍泉寺の前を過ぎると、旧道は国道と重なりつ、北進して今泉宿に入る。安永六年(一七七七)の今泉村(陸前高田市)の「風土記御用書出」(以下「安永風土記」という)によれば、村名の由来を「当村産所と申所々往古泉湧出中饒、付、村名を今泉と唱え申候」と述べ、さらに、「当村今泉と申宿場有之、荒町四拾九間、御免町三拾間、九日町式拾五間、八日町志一五拾五間、上町丁切下町丁切下三三拾九間、御座候」と記して、いずれも寛永一五年(一六四二)の検地以前からの町場であるという。そしてここからは、氣仙沼・高田・世田木・大原への道が分岐しており、とくに、氣仙沼宿と高田宿への里程は、「大道」でそれぞれ「四里四町拾九間」、「拾式丁四拾五間」であった。

今泉宿の西側には、諏訪神社・大庄屋などが園道から約二〇mほど離れて

南から並んでいる。村鎮守であった諏訪神社は、「安永風土記」に次のように記されている。

山王 一諏訪社 一八幡

右ハ御相殿ニ御座候処、諏訪明神を一村鎮守。仕置候事

一小名 伊勢山

一社地 南北八間、東西拾五間、一社 東向五間作、一鳥居 東向

一願 拝殿横額 諏訪宮二字 宮城郡高城郷松嶋村青龍山瑞岩寺御先住天
彌和尚御筆

一地主 別当 羽黒眞貞性院

一祭日 九月廿七日

右御神事之節ハ毎年神輿当所小池と中所ニ御浜下有之、隔年ニ渡り物
數々相出、氏子共先後ニ供奉仕候ニ付、為誓固、当所御足輕向人宛被

附下候事

この諏訪神社の境内には、寛政九年（一七九七）の石燈籠、基（高さ各一
三五cm）と石壇のほかに、無年号の石燈籠三基、象頭山碑（高さ八一cm、幅
六〇cm）、山神碑（高さ一四〇cm、幅七〇cm）などがある。大庄屋と呼ばれ
ているのは、気仙郡の大肝入であった吉田家であり、木造茅葺住宅、土蔵、
大肝入門・庭園などが現存している。同家には、伊達政宗から与えられた次
のような文書がある。

気仙之肝剪預置候事及川相模

本知行五貫文之所下置候、肝剪預候。

付而、為札義砂金式枚四十四匁かけ

納候者也、仍如件

元和六年極月三日 黒野

吉田宇右衛門

右のほか、同家には五代藩主伊達吉村の和歌をはじめ、寛延三年（一七五

〇）から明治元年（一八六八）までの間の御用定留など、膨大な量の大量の
文書が所蔵されており、仙台藩農村史研究の上では見逃すことのできない史
料となっている。

さて、旧道は国道と重なる北進し、今泉宿のはば中央に至る。そこで、
国道四五号線は右折して気仙川に架かる姉齒橋に向っているが、旧道の方は
左に折れてすぐ右折し、国道二四三号線と合流して北進している。代官屋敷
跡は国道三四二号線の右折点付近にあつて、現在も代官門が残っている。南
北約五〇m、東西約三〇mからなる跡地広場は、今泉保育園の遊び場となつ
ているが、昭和三〇年に陸前高山市が市制を施行する以前には、気仙町役場
が置かれていた所である。ここから約二五〇m北に金剛寺がある。貞観一三
年（八七二）、あるいは仁和四年（八八八）の創建と伝える金剛寺は、正式
には「如意山一乗院金剛密寺」と称し、真言宗智山派に属している。気仙風
土記は「この寺むかし浜田村にあり、葛西領の頃、千葉安房守の祈禱所な
り、その寺跡いまにおいて此の寺の特領なり、浜田より高田に移し、その後
今の地に移す」と説明している。「安永風土記」によれば、このの本尊は大日
如来（木仏坐像、長一尺五寸）と如意輪観音（木仏坐像、長一尺）の二体、
仏殿の横額のうち「一乗院」は長倉一平の書、「金剛密寺」と「如意山」は仙
台輪王寺跡居住僧和尙の書であるといふ。気仙郡順礼二番札所の第二番で
あるこの金剛寺から約二〇〇m北東の中井に北野神社がある。同社「安永
風土記」に「天神社」とあり、「小名 上ノ山」・勧請 慶長年中太田道灌七
神社二拾二ヶ国ニ御建立之節、右社御勧請之由中伝候事、一社地 南北拾七
間、東西七間、一社 南向窓間作、一鳥居 東向」と記されている。この境
内には延宝六年（一六七八）の梵字供養碑（高さ一七五cm、幅五〇cm）、宝永
七年（一七一〇）の同碑（高さ二六cm、幅一〇〇cm）、享保一四年（一七
一九）の同碑一基（高さ一七〇cm、幅六〇cm、高さ一四・cm、幅八〇cm）、明和
元年（一七六四）の奉庚申供養碑（高さ一七三cm、幅八七cm）、天明〇年の庚

中塔（高さ一四・〇m、幅八〇cm）、寛政六年（一七九四）の秋葉山碑（高さ二二・〇m、幅一〇〇cm）、文化〇年の巳持塔（高さ三二〇cm、文政九年（一八一六）の馬頭観音碑（高さ一六〇cm、幅四七cm）、年号不明の山神碑（高さ一一〇cm、幅二七cm）などがある。なお、安永六年（一七七七）の「今泉村品替御百姓書出」をみると、今泉町横断三浦身惣衛門に与えられた「南部御領通路駄賃御定書」があるので、次にかかれておこう。

駄賃代定

一 世田米町迄 式里拾三丁四拾五間

此駄賃代五拾九文 内拾式文 壹代

一 あかはね迄 式里五丁

此駄賃代五拾三文 内拾壹文 壹代

一 盛町迄 四里拾式丁二拾八間

此駄賃代百式拾六文 内拾七文 坂のま、

式拾式文、くつ代

右之通駄賃代取可申由、此度被仰付候、以上

（二）通駄賃

承応四年正月十日 日

小川八郎左衛門御書判

ところで旧道は、北野神社の前で国道三、四、号線から右に分岐し、今泉大橋跡を経て高田宿へと向っている。現在の姉齒橋の上流約四〇〇mの地点に、以前あった木製の姉齒橋の橋脚が残っているが、そこが昔の今泉大橋のあった所である（安永風土記）に、「今泉大橋、長四拾八間、幅三間、今泉小橋、長拾間、幅壹間半、右式所共、高田町之通路」と記されているのがそれである。この大橋跡から旧今泉村境までの旧道は、田圃などによって定かではないが、その先には大船渡線の敷地付近から現存している。そして旧道が国道一〇七号線を横断する手前に、大石沖の道標（高さ八〇cm、幅五〇cm、厚さ一二cm）があり、それは「西左 竹駒 横出 上下有住、南（欠損）」と刻まれている。国道一〇七号線を横断した旧道はすぐ右折し、

その先には市道と重なって東進し、五本松から馬場・大町・荒町へと進んでいく。その間の五本松には、享保一四年（一七二九）の供養青面金剛碑二基（高さ二二四cm、幅一八cm、高さ八五cm・幅四〇cm）、ともに砂岩、寛延二年（一七四九）の巳持供養碑（高さ七四cm、幅四〇cm）、明和元年（一七六四）の庚申供養碑（高さ二二八cm、幅五七cm）、寛政二年（一八〇〇）の庚申塔（高一五七cm、幅四二cm）、寛政〇年の節婦布帯之碑（高さ四一cm、幅六〇cm）、文化〇年の巳持碑（高さ一五八cm、幅六六cm）、以上、砂岩、元治元年（一八六四）の種山先生之碑（高さ三三二cm、幅一〇七cm）などのほか、年号不明の庚申塔（高さ二二五cm、幅四四cm、砂岩）、巳持碑（高さ六〇cm、幅三〇cm）、庚申塔（高さ七六cm、幅八四cm）、道徳翁碑（高さ三五・三cm、幅一三三cm）、以上、花崗岩）などが林立している。

この五本松の古碑群から約二五〇m東方に馬場の不動堂があり、その境内には安永五年（一七〇八）の供養碑（高さ七五cm、幅五一cm）、享保二年（一七一八）の大乗妙典一部一石塔（高さ一八四cm、幅二七cm）、同一七年の梵字供養碑（高さ九〇cm、幅六二cm、以上、砂岩）などがある。

馬場の不動堂の東方に高田筋跡があり、その本丸跡の西北の高台に愛宕神社、北に八幡神社、東に天照御祖神社などがある。さらに、八幡神社北方の湖の沢には櫻瀧神社・貴船神社・保呂羽神社が鎮座している。天照御祖神社の境内には安永二年（一七〇五）の庚申塔（高さ三八cm、幅五四cm）、元文五年（一七四〇）の同碑（高さ一〇五cm、幅三六cm、砂岩）、安永四年（一七七五）の梵字供養碑（高さ九四cm、幅六六cm、花崗岩）、同七年の庚申塔（高さ一六〇cm、幅七〇cm）、寛政二年（一八〇〇）の同碑（高さ一四〇cm、幅五六cm）、天保四年（一八四三）の奉庚申巳持碑（高さ八〇cm、幅五九cm、以上、砂岩）などが並んでいる。一方、保呂羽神社の境内には延享八年（一六八〇）の庚申塔（高さ六三cm、幅五〇cm）、貞享二年（一六八五）の一字・石供養碑（高さ七四cm、幅四〇cm）、享保〇年の庚申塔、基

(高さ五〇cm、幅三八cm、高さ四六cm、幅一八cm)、元永五年(一七四〇)の同碑(高さ六七cm、幅五〇cm)、寛延元年(一七四八)の不明碑(高さ五四cm、幅四〇cm)、文化二年(一八〇六)の庚申巳待供養碑(高さ七五cm、幅三七cm、以上いずれも砂岩)などが建っている。

天照御祖神社から約二〇〇m東の洞の沢に、天正二年(一五七四)の開山と伝える浄土寺があり、ここには元禄十二年(一六九九)銘の本堂棟札のほか、元文二年(一七三七)の阿弥陀像(花崗岩)や石地藏(花崗岩)などがある。この浄土寺から約一・二km北東に水上神社があり、ここから約三〇〇m南西の西和野地内には、延宝三年(一六七五)の庚申供養碑(高さ五六cm、幅二七cm)、宝永元年(一七〇四)の庚申塔(高さ一〇・三cm、幅六四cm)、同五年の青面金剛繪像(高さ九〇cm、幅五〇cm)と庚申供養碑(高さ七五cm、幅五〇cm)、享保元年(一七六六)の庚申供養碑(高さ一〇・三cm、幅七六cm)、同一七年の同碑(高さ一一・一cm、幅四三cm)、寛保二年(一七四二)の一字・石供養碑(高さ一四〇cm、幅九〇cm)、宝暦四年(一七五四)の大乗妙典・字一石塔(高さ七六cm、幅七〇cm)、安永四年の庚申塔(高さ九〇cm、幅九〇cm)、寛政二年(一八〇〇)の同碑(高さ一〇七cm、幅五〇cm)、文化二年(一八一四)の同碑(高さ一六〇cm、幅九〇cm)、文政四年(一八二二)の同碑(高さ一一〇cm、幅七七cm、以上いずれも砂岩)、天保一四年(一八四三)の山神講百年記念塔(高さ一八四cm、幅九三cm、粘板岩)などのほかに、年号不明の庚申供養碑(高さ八七cm、幅三六cm、砂岩)、山神碑(高さ八〇cm、幅四〇cm)、風神碑(高さ九二cm、幅四〇cm)、金毘羅塔(高さ一五七cm、幅七〇cm、以上いずれも花崗岩)などの古碑群が市道と野線に面して並んでいる。

さて、市道と重なって大町から荒町へと東進してきた旧道は、本称寺入口の所で右折して南下し、さらに、和野川に架かる川原橋を渡り、そのま、東南に進んで国道四五号線(以下、国道という)と合流している。天正六年(

一五七八)の開山と伝える本称寺には、日頃市(大船渡市)の長安寺から移築した太鼓堂があり、寛保二年(一七四二)以前の建物といわれている。川原橋から約四五〇m北東に無量山光照寺があり、ここには寛延二年(一七四九)の梵鐘(青銅製、直径一〇五cm、重さ約一三〇〇kg)があつて、陸前高田市の文化財に指定されている。

国道と合流して東進する旧道は、浜田川に架かる橋に向つているが、その橋の手前の下宿に八坂神社がある。この境内には嘉永六年(一八五二)の石燈籠(花崗岩)のほかに、宝永五年(一七〇八)の庚申塔(基(高さ八二cm、幅五〇cm)、高さ九七cm、幅六〇cm、ともに粘板岩)、享保二年(一七一八)の巳待供養碑(高さ八五cm、幅三〇cm)、明和元年(一七六四)の奉じ待供養碑(高さ七〇cm、幅四四cm)、寛政四年(一七九二)の庚申供養碑(高さ一〇〇cm、幅五〇cm、粘板岩)、同一年の庚申塔(高さ二二〇cm、幅七五cm)、天保二年(一八四一)の金毘羅大権現碑(高さ一〇〇cm、幅五二cm)、花崗岩、享永元年(一八四八)の金毘羅碑(高さ一四五cm、幅一一〇cm)、花崗岩、同三年の山神碑(高さ九五cm、幅五七cm)などが並んでいる。この古碑群の西方の太田六番地には、享保一七年(一七三二)と寛政一二年(一八〇〇)の奉供養庚申碑、享和三年(一八〇三)の雷神供養碑、無年号の馬頭観音碑などがある。

浜田川橋を渡つてすぐ国道の左手に分岐する旧道は、その先き浜田川沿に北東に進み、佐野地内で国道の下をトンネルで抜ける付近までの区間は、八mと拡幅された市道浜田線と重なっている。往昔の影形はまったくない。国道から分岐して浜田川の右側を走る市道に面して、天保七年(一八三六)の万人施養碑(高さ一一・三cm)と石地藏(高さ一四八cm、幅六〇cm)が並んで建っている。旧道と重なっている市道に沿つて、野沢地内には中山館跡があり、ここに八幡社が建っている。さらに、中世の豪族の系譜を引く金家が、市道をはさんで米崎小学校と対している。この金家から約一km北方に、仁治

二年(一一二四)の開基と伝える海岩山菩提寺があり、この三重塔は文化年間(一八〇四—一七)のもので、岩手県の文化財に指定されている。同寺境内には天保三年(一八三二)の方霊供養塔(花崗岩)のほか、無年号の石地蔵(砂岩)、石燈籠(花崗岩)、唐金の燈籠などがある。普門寺の参道に沿って、糠塚屋敷新沼家・糠塚白山神社・古郡明神社などがあり、新沼家墓地内に元文二年(一七三七)の庚申塔(高さ九〇cm、幅八〇cm、砂岩)、安永四年(一一七五)の同碑(高さ一一〇cm、幅八五cm、花崗岩)、方延元年(一八六〇)の同碑(高さ八五cm、幅五二cm、砂岩)などが建っている。白山神社には享保四年(一七五四)の仁王經二字・石塔(高さ六三cm、幅二四cm、砂岩)があり、明神社には同年の大乗妙典一字・石塔(高さ八〇cm、幅四三cm、幅四二cm、砂岩)がある。

一方、浜田川橋を渡ってすぐ国道の右手に分岐し、同川沿いに南下する道があるが、これが昔の今泉街道である。この街道に沿った松峰地内には天照御祖神社があり、その境内にはたくさんの方霊供養碑が建っている。元禄八年(一七〇五)の庚申供養碑(高さ一〇八cm、幅四二cm)をはじめ、宝永五年(一七〇八)、高さ六五cm、幅三九cm、同年(高さ六五cm、幅五八cm)、享保二年(一七二八)、高さ七三cm、幅四五cm、元文二年(一七三二)、高さ九〇cm、幅四六cm、明和元年(一七六四)、高さ九二cm、幅五二cm、天明元年(高さ六〇cm、幅三〇cm)、寛政二年(一八〇〇)、高さ五〇cm、幅五〇cm、同年(高さ四二cm、幅三二cm)などの碑がそれである。さらに、脇の沢地内を海岸沿いに東進する今泉街道には、とくに米ヶ崎漁協付近に、樹令三〇〇年と推定される黒松の並木があり、デンガン坊坂から勝木田浜までの間に旧道が現存している。

ところで、市道浜田線と重なって進む旧道は、佐野地内で国道の下をトンネルで抜けているが、その手前に保呂羽神社と塚松(佐野の「里塚」)がある。「里塚」には樹令三〇〇年と推定される松が立っており、その前方に方延二年

(一八六一)の馬頭観音碑(高さ一四二cm、幅五二cm)と海殿山碑(高さ一〇〇cm、幅八四cm)、文久二年(一八六二)の早池兼碑(高さ一一二cm、幅九〇cm)の二基が並んでいる。旧道をはきんで塚松の斜対面に、享和二年(一八二二)の秋葉山碑(高さ一一二cm、幅八二cm)、同二年の金毘羅碑(高さ一三二cm、幅六六cm)、無年号の古峰山碑(高さ一一〇cm、幅五〇cm、以上いずれも砂岩)があり、高畑地内には宝永五年(一七〇八)の庚申塔(高さ八〇cm、幅五〇cm)、寛延四年(一七五二)の梵字供養碑(高さ七五cm、幅四〇cm)、宝永四年(一七五五)の奉庚申供養碑(高さ一一〇cm、幅五〇cm)、方延元年(一七五五)の庚申塔(高さ五七cm、幅三二cm)などが建っている。また、佐野の一里塚から約一km南の和方地内には、薬師神社・八坂神社・秋葉神社などが鎮座している。まず薬師神社の境内には、文化三年(一八〇六)の石燈籠(花崗岩)、文政四年(一八二二)の石鳥居(花崗岩)のほか、宝永二年(一七〇五)の庚申供養碑(高さ七〇cm、幅二六cm)、享保四年(一七一九)の同碑(高さ八二cm、幅四四cm)、文政六年(一八三三)の山神碑(高さ八三cm、幅五五cm)などがあり、八坂神社の境内には元禄七年(一六九四)の梵字供養碑(高さ七九cm、幅四〇cm)、正徳三年(一七二二)の南無阿弥陀仏碑と奉供養現世安穩碑(高さ八五cm、幅五二cm)、寛政六年(一七九四)の庚申供養碑などがある。

さて、旧道は国道下のトンネルを抜けると、陸前高田市と大船渡市との境に位置する通開時へと向う。その間は幅二一三mの旧道が現存し、往昔の面影をよく伝えていく。

大船渡市

通開時北側の林を登った所に石地蔵と山神碑(大正一四)がある。もとは同時の頂上路傍にあつたが、新道の開墾にもなつて現在地に移されたものである。頭部の欠損している地蔵は、享保二年(一七二七)猪川村(大船渡市)の鈴木家が時の安全祈願のために建立したものとされている。通開

一寺 志々寺 西光坊

一 小名 高沢山

一 浄土真宗 一仏殿 東向、竪九間、横六間

一本草 阿弥陀如来、木立立像、御長七尺七寸
但作者相知不申候事

一門 東向

一新山権現社

一 小名 地の森

一 社地 南北五拾五間、東西四拾五間、

一 社 東向三尺作

一 地主 水戸國敷清太夫

一 別當 当郡藤川村羽黒派藤主院

西光寺は天正四年（一五七六）室玄和尚の開基と伝えてあり、その境内には樹令四〇〇年といわれる公孫樹（市指定文化財）のほか、明治二〇年の海嘯死者村内二十余名・無縁七十余名碑、昭和九年の津浪記念碑、昭和三十六年の津浪犠牲者供養塔などが建っている。新山神社には古い木彫の権現が伝えられている。

県道と重なっている旧道は、旧道と並行して、盛町内をほぼ南北に走っているが、その旧道の西側には、洞雲寺・八幡神社・愛宕神社・浄願寺・天照御祖神社などが南から北に向って並んでいる。まず、法皇山御斎寺は四五〇年ほど前に開かれたと伝えられているが、その境内には大燈籠のほか、宝永三年（一七〇六）の源依三宝碑、文化五年（一八〇八）の観音像、天保四年（一八三三）の三界万雲供養塔、安政二年（一八五五）の万雲供養塔、同三年の馬頭観世音碑などの古碑が沢山あり、さらに、寺の入口には明治十九年の津波記念碑（高さ一八五cm、幅一四五cm、厚さ二六cm）が建っている。もとは盛町下町にあったものである。浄土真宗弘誓山浄願寺は寛永二年（一

六三四）の開山と伝えられている。境内には文化二年（一八〇六）の先祖代々三界万雲碑、文政元年（一八一八）の南無阿弥陀仏碑、嘉永五年（一八五三）の馬頭観世音碑などがある。浄願寺南西の丘陵地帯が根城跡であり、その一角に敏達天皇の第三子を葬ったという七子陵があり、そこに王子陵碑（高さ一〇〇cm、幅三五cm）が建っている。この碑は愛宕神社境内の畑の中から発掘されたものである。なお、同社の境内には明和八年（一七七二）の奉度申供養碑、安永二年（一七七二）の千手観音碑、同一年の巖釜宮碑、文政七年（一八二四）の金毘羅大権現碑などがある。天照御祖神社は盛町のほぼ中央の丘陵上にあり、その境内には「はるもや、けしきこのふ月と梅はせを」と刻まれた天保五年（一八四四）の芭蕉句碑があったが、昭和十五年の神社火災で焼失してしまった。さらに、同社務所の前庭に天保五年（一八四四）の熊野大権現碑があるが、その裏面には、木の下はけも軽もさくらかな 翁」と刻まれている。

さて、県道と重なって盛町を連ねてきた旧道は、権現堂橋の手前で旧道と合流するが、その合流点には樹令三五〇年と推定される大きな榎の木があり、その根元に宝暦二年（一七六二）の庚申供養宝塔、寛政九年（一七九九）の庚申塔、安政三年（一八五六）の馬頭観世音碑、万延元年（一八六〇）の庚申己塔、年号不明の南無阿弥陀仏の六基が建っている。この榎の木は旧道の目じる的存在であったという。権現堂橋を渡ってすぐ左折する旧道は、昔の盛街道（水沢ノ盛）と重なって盛川の堤防の所を通っていたが、近時の河川改修によって姿を消し、さらに、同橋から約〇〇m北西の堤防付近にあった、里塚も破壊されて今はない。旧道はこの一里塚のあった地点で盛街道から右手に分岐していたが、その分岐点にあった安政二年（一八五五）の道標（高さ一四〇cm、幅一〇〇cm）は、現在、猪川地区公民館の所に移建されている。その道標には次のように刻まれている。

石吉浜音神
石はまなふんふみら
南無阿弥陀仏
左 右 住世出来
左 わかなんふみら

一里塚のあった地点で盛街道から右手に分岐する旧道は、その先き定かではないが、前田の天照大神社の所を經由しながら横口地藏尊の所へと向つていく。この地藏尊は、慶長五年（一六〇〇）、伊達政宗の白石の陣に参加した気仙三六騎の一人、及川上佐が帰還の際に地藏を背負つて帰り、ここに祀つたものと伝えられている。この地藏尊の所で国道を横断した旧道は、国道の右手に分岐する市道と重なって立根川沿を北上し、約八〇〇m進んだ菅生に、文化〇年の秋葉山碑、文政一〇年（一八二七）の馬頭観音碑、文久三年（一八六三）の同碑、慶応二年（一八六六）の山神碑、同三年の早池峯山碑、年号不明の馬頭観音碑の六基が、旧道と立根川にはさまれた地点に南面して並んでいる。この立根川筋の古碑群は、旧立根村（大船渡市）が馬産地と山仕事の多かった土地であつたことを物語る。

立根川筋の古碑群をあとにした旧道は、約一・八kmほど進むと国道と合流する。その合流点付近の国道の左側に五葉神社があり、同社の境内には文化八年（一八一）の馬頭観音碑、文政二年（一八一九）の南無大悲馬頭尊碑、嘉永七年（一八五四）の馬頭観音碑をはじめ山嶽碑・山神碑など一九基が並んでいる。五葉神社から約二〇〇m東進した所で、旧道は国道の左手に分岐し、その先きは部落道と重なって三陸町との境に位置する峠に向つていく。このルートが浜街道と呼ばれているものである。そのほかのルートとしては、ほぼ国道沿に越喜米に至るものと、その途中で分岐して新峠を越えて吉浜に至る道とがあつた。

三陸町

大船渡市との境の銚子の口を越えた旧道は、そのまゝ、東進して河内一里塚に達するが、その間、開田などにより部分的に消滅して定かではない所もある。河内一里塚は「元禄絵図」に記載されているもので、昔からの草刈場である草原の中に、一基現存している。ともに円形の土盛りで、それぞれ高さ二・〇cm、底部径五六〇cmの規模である。昭和五三年三陸町の文化財に指定されている。保存状況は比較的良好である。

河内一里塚から約二〇〇m東進した小出地内に、木造丸井の棟の森神社があり、その境内に山ノ神碑が建っている。この付近の旧道は開拓によつて部分的にとぎれ、田畑あるいは草地となっている所が多い。棟の森神社を過ぎると、その先の平根一里塚付近までは、幅約二mの旧道が夏草におおわれながら現存している。その間、旧道は釣漁峠を越えるが、そこを流れる小川に架けられていた橋の基礎が、ゆるぎない石垣で組まれている。旧道をはさんで左右に現存する塚は、松林の中にあつて、それぞれ高さ二五〇cm、直径五六〇cmの規模である。平根一里塚付近の旧道は往昔の面影を良くとどめている。平根一里塚をあとにした旧道は、吉浜川に架かるはしかみ橋を渡り、約一〇〇mほど進んだ旧道の左側に、年号不明の六地藏（高さ二六cm・幅一八cm、高さ四二cm・幅一五cm、高さ四二cm・幅一九cm、高さ四二cm・幅二九cm、高さ四四cm・幅二九cm、高さ四四cm・幅一九cm）のほかに、嘉永七年（一八五四）の庚申供養塔（高さ九三cm、幅三四cm、厚さ二〇cm）、文久二年（一八六二）の馬頭尊（高さ五七cm、幅二六cm、厚さ二三cm）などの古碑が一列に並んでいる。ここから約七〇〇mほど東進した所で、旧道は県道と合流し、さらに国道を横断して、その先は県道と重なり、北東へと進んでいる。県道との合流点付近の旧道の北側に、木造トタン葺の小さな金毘羅様があり、その境内には金毘羅塔（高さ一五一cm、幅七八cm、厚さ二五cm）、山ノ神碑（高さ一五八cm、幅五二cm、厚さ一七cm）、同碑（高さ一〇五cm、幅八・cm、

厚さ二八cm、石地蔵二体（高さ七二cm・幅四〇cm・厚さ八cm、高さ五二cm・二二cm・厚さ一・cm）などがある。

県道と重なって北東へ進む旧道は、中井地内に入ると、盛線の敷地を横断しているが、その付近のトンネルの上部に木造タン登の神明神社があり、さらに約八〇〇mほど進むと、村の総領守であった新山神社と曹洞宗正寿院がある。寺院の境内には六地藏、二界万靈等碑、馬頭尊佛、一文字一石標などが建っている。正寿院を過ぎると、旧道は県道の左手に分岐し、盛線の敷地を横断して線路の左側を並行して進む、ふたたび県道と合流する。その間、吉浜駅北側の上野に嘉永七年（一八五四）の奉庚申・巳待講塔（高さ九三cm、幅四九cm、厚さ一九cm）が建っている。

県道と合流した旧道は、そのまま、県道土を北西に進み、右にヘアピンカーブしながら白木沢川を渡って、県道の左手に分岐している。その分岐点の近くに、白木沢一里塚が旧道の右側に、基だけ現存している。円形の土盛りで、高さ二〇〇cm、直径三〇cmの規模である（昭和五三年町指定）。左側の塚は開田によって消滅している。旧道はこの一里塚から約四〇〇m進むと県道と合流するが、その間は旧道の面影がわずかにしのばれる。県道と合流した旧道は、そのまま、県道土を約九〇〇m進む、やがて県道が左手に大きくカーブする手前で右手に分岐し、とどろ木川と県道を横断している。そして、ふたたび県道を横断する手前の急坂には、道幅一・二m、長さ約二〇mにわたって石塁が敷かれている。この付近の旧道は往昔の面影がしのばれる。出来れば、観音堂に登るこの石塁の道は、旧道の遺構としてぜひ保存策を講じたいものである。

この石塁の遺構を過ぎると、旧道はほぼ北進して標高四四七mの観音堂へと向うどろろが釜石市との境であるが、その峠の手前にサイノカミ（高さ四五cm、幅三〇cm、厚さ一〇cm）があり、さらに、峠の約六〇m手前に観音一里塚がある。旧道をはさんで左右に塚が現存し、その間隔は一〇・七m、円形の土

盛りでそれぞれ高さ二五〇cm、直径九四〇cmの規模である。昭和五二年に町指定の文化財となっている。観音堂に至る旧道は、夏草の繁茂している中に現存し、とくに峠付近の旧道は往昔の面影を良くとどめている。

釜石市

標高四四七mの観音堂から下荒川に下る旧道は、幅一・二mの急坂がつづき、一部消滅している所もあるが、昭和初期まで使用されていたので、歩行は可能である。観音堂への唐丹（釜石市）側登り口に位置する鈴木武右衛門家は、屋号を「小倉口」と称し、藩政時代には通行人の見張所であったという。同家から鈴木正直家までの約四〇〇mの間の旧道は不明であるが、明治一九年の津波前には、旧道沿に四五軒の家が建ち並んでいたという。

熊野川に架かる熊野川橋の手前の所で、旧道から左手（西）に、赤坂峠を越えて口頭市（大船渡市）へ行く道が分岐しているが、その分岐点に、天保一五年（一八四四）の山神塔（高さ一三八cm、幅五五cm、厚さ四二cm）、明治三年の庚申碑（高さ一五五cm、幅六〇cm、厚さ四四cm）、万延元年（一八六〇）の庚申塔（高さ一三六cm、幅七四cm、厚さ九〇cm）、安政二年（一七九八）の供養塔（高さ八八cm、幅六六cm、厚さ三二cm）、寛政一〇年（一七九八）の庚申塔（高さ八八cm、幅四五cm、厚さ三二cm）、同一一年の五葉山大権現（高さ六七cm、幅三七cm、厚さ二二cm）、無年号の地神（高さ六六cm、幅五〇cm、厚さ二四cm）、慶応元年（一八六五）の馬頭観世音などの古碑がほぼ楕円形に建っている。保存状況は良好である。ほかに道標もあったということであるが、今はない。

鈴木正直家の裏側にある荒川熊野神社は、同家の「由緒書」によると、文治三年（一一八七）の勧請と伝えられている。同家には本尊十二弁玉神像・阿弥陀如来像・不動明土像・役小角像・獅子頭などのほかに、寛政六年（一七九四）の熊野神社棟札、天明二年（一七八二）の句額、修験関係文書などがある。この鈴木家の所から北側の片岸に至る旧道には、熊ノ木峠越えと清水峠

越えの二つのルートがある。前者は本来の浜街道であるが、短距離の割合に急坂が多かったため、天保四年（一八三三）に清水峠越えが開鑿されるに由来で、利用者は減少したという。このルートは、国道の熊ノ木トンネルを出た辺から天照御祖神社の所が宅地化しているため通行できないが、その他の所は通行にあまり支障をきたさない。峠に至る南側の中腹に、一字一石塔（高さ七〇cm、幅二五cm、厚さ二二cm）が、基だけある。天照御祖神社は大同二年（八〇七）坂上山村麻呂の勧請と伝えられている。昭和五年に全面改築された社殿の左側に、文化十一年（一八一四）の常念山碑（高さ一五六cm、幅七九cm、厚さ一〇cm）がある。また、釜石市内で二番目に古いといわれる天和四年（一六一八）の碑（高さ四二cm、幅一八cm、厚さ七五cm）は、社殿内に奉置されている。

一方、清水峠越えは、天保四年に飢饉救済対策事業として開かれた道であるが、ただ、峠北側の県道からの登り口が県道工事の際に削除され、また、そこから片岸へ下る道もほとんど消えているので、この部分を除くと、清水峠越えのルートは、ほぼ昔のまゝの姿をとどめているといつてよい。なお、この清水峠は新道峠の説つたものというが、その峠の頂上には天保五年（一八三四）の庚申塔（高さ一八四cm、幅八四cm、厚さ一八cm）、嘉永三年（一八五〇）の一字、石法華塔（高さ二七cm、幅五二cm、幅三三cm）が建っている。

さて、熊ノ木峠越えと清水峠越えの旧道は、天照御祖神社の東方で合流し、そのまま北上して国道と片岸川を横断し、そこで同川沿に南下して、ふたたび国道を横断して峠道と合流し、その先は、県道の右手に分歧する市道上进行盛岩寺の所まで進む。盛岩寺は慶長二年（一六〇八）に天台から曹洞に改宗されたという。同寺の境内には天明元年（一七八八）の佐々木先生之墓（高さ八七cm、幅二二cm、厚さ四cm、寺子屋跡匠）、文政二年（一八一九）の権鬼之碑（高さ二四七cm、幅八三cm、厚さ四七cm）、明治十九年と昭和八

年の津波記念碑などがある。盛岩寺をあとにした旧道は、標高、〇〇m前後の権峠を越えて本郷地内に入る。小臼浜側からの登り口は、住宅が建てこんで明らかになりにくい所もあるが、本郷側は旧道がはっきり残存し、往昔の面影を伝えている。

本郷地内を東西に走る県道の北側に十九所神社があり、その左手に、伊能忠敬の測量基点となった泉座石（長径七〇cm、短径四四cm、厚さ一八cm）、陸奥州弘前郡丹村測量之碑（高さ一二三cm、幅七六cm、厚さ八cm）、新道翁遺愛碑（高さ一五〇cm、幅六九cm、厚さ二〇cm）などが覆堂の中に保存されている。これらの碑は、もとは現在地から約八〇〇m南の唐丹湾に面した、葛西昌至の隠居屋敷跡とその付近にあったものである。この測量関係古碑群から約四〇〇m西に、葛西昌至の墓碑である天保七年（一八三六）の権聖道母居上（高さ一四三cm、幅六八cm、厚さ二四cm）がある。また、古碑群南の道路端に昭和八年の津波記念碑、さらに、そこから約二五〇m南に明治の海嘯遺難記念之碑（高さ二七〇cm）が建っている。

一方、測量関係古碑群から約二〇〇m東に、仙台藩の本郷御番所跡（釜石市文化財指定）がある。防潮堤の辺から北上する旧道は、御番所跡から石塚峠を越えて平田へと達しているが、その間、御番所跡から約五〇〇m進むと、旧道の左右に七里塚がある。右側の塚（高さ五m、直径六m）はほぼ完全の形で残っているが、左側のものは、部崩れている。なお、七里塚の七里は小道（一里六丁）で表現したもので、四丁にあたる。石塚峠は藩境絵図に「平田坂」と記されているものである。峠頂上の旧道の両側には藩境の印杭があったが、現在は西側のものが、地上一五cmほどの切株のようになって残っている。

石塚峠を越えた旧道が下平田地内に入ると、板木山への道の分歧点に年代不明の道標（高さ六〇cm、幅四六cm、厚さ一cm）があった。現在は板木山道の拡幅のために移してあるが、それには「右ハせんたい」と刻まれている。

る。旧道は下平田川に沿って北進し、県道を横断してから左手に曲り、やがて国道を横断してからその西側に沿って北上し、女坂を越えて嶺行に達している。その間、下平田橋の左前方に盛岡藩の平田御番所跡があり、上平田入口には日蓮上人坐像と乳地蔵のほかに、天明八年（一七八八）の奉供養庚申碑、天保二年（一八四二）の大乗妙典一文字石供養碑、同、四年の塩釜大明神碑、明治二年の天照皇太神宮碑、昭和七年の三浦命助之碑などが建っている。さらに女坂には、「石の証文」といわれる救生祭所碑（高さ一四四cm、幅七三cm、厚き三四cm、市指定文化財）があり、同碑から約三〇m北に白山神社、ここから約四〇m東に毘沙門堂が建っている。三閉伊路程記に記されている両社のほば中間地点には、百方遍供養碑、明治の海嶺記念碑などのほかに、江戸時代のもので推定される遺標（高さ一〇〇cm、幅五六cm、厚き二七cm）がある。遺標の右側部分は欠損しているが、左側には「左ハヤ村道」と刻まれている。この「や村」とは「矢ノ浦」のことである。これらの古碑群は他所から移建されたものと思われる。

さて、姥石から先の旧道には、二つのルートがあった。一つは、大渡川に架かる矢ノ浦橋の上流の渡し場から舟で渡って、現在の港町から浜町へと向う道であるが、このルートは定かではない。もう一つは、釜石製鉄所の敷地内を経て、大渡橋の辺から国道と重なる市街地を東進するルートである。このルートは大渡橋までの間が不明であるが、その沿線の松原には、三閉伊路程記に記された荒神社、その南の端地一角に文化八年（一八一）の流船供養塔（高さ一一三cm、幅一〇〇cm、厚き二八cm）、同年の二段からなる同碑（総高四六cm）などがある。また、大渡橋から約一五〇m北に、明治三〇年代のもので推定される瀬川供養塔（高さ一五九cm、幅七九cm、厚き四二cm）が建っている。明治から昭和初期にかけての大渡川の鮭漁は東北一といわれているが、この碑は当時の鮭漁の盛況を物語る、めずらしい記念碑である。この碑の北方で県道がV字型にカーブしているが、そこには八幡燈

山麓から移建された八幡神社があり、同社には寛文一〇年（一六七〇）の建立銘、元禄六年（一六九二）の鯨口と懸仏、方治四年（一六六一）の山証文などが所蔵されている。八幡神社から約五〇m東南に観音寺（兼師堂）があり、その境内には寛政九年（一七九七）の書面金剛塔（高さ六〇cm、幅五七cm、厚き一五cm）が建っている。なお、この碑の下段に刻まれている「三軒の人達であろう。そのためか、昔は大只越を二三軒村と称したこともあるという。観音寺から約三〇m北方にある曹洞宗石応寺は、明治一六年の釜石大火の後に、門前（浜町三丁目）から移転したものである。同寺は釜石絵図と門前の石応寺絵図（ともに釜石市文化財指定）を所蔵しており、その境内には徳治三年（一一〇八）の板碑（高さ一五三cm、幅五八cm、厚き一八cm）、享保一〇年（一七三五）奉納の聖観音像（総高一八九cm、銅製）、津波供養の仏坐像・体（ともに総高一八四cm、銅製）などがある。

釜石市街を東西に走る国道と重なる東進してきた旧道は、只越町内で国道と分かれてそのまま、東進し、山森屋（割札場）跡であるが、その痕跡は向もない。札場跡の北西に石応寺の墓地在り、その北端が旧石応寺跡である。墓地内には寛政五年（一七九三）の一心中念坊の墓碑のほか、寺子屋師匠の墓碑として、文化二年（一八一五）の学友軒大広梅池居士（佐野柳助）、嘉永元年（一八四八）の法算軒徳山良孝居士（天野歳人）などがある。

一方、札場跡から約二〇〇m北東の高台に浜つ子児童公園があるが、そこが釜石拾分一役所跡である。同跡東方の東前地内には、江戸中期以降、海産物の登せ商人として栄えた佐野家（釣屋）の墓地と、寛政年間（一七八九—一八〇〇）の建立と推定される不動尊神社がある。同社は間口一五間、奥行二間の小堂であるが、四周に幅〇・五間の廻廊をもち、堂内の格天井はな

かなが美事なものである。佐野家の墓地から約三〇〇m北西の旧道の右側に、「三閉伊路程記」に「こんひらの社」と記されている金毘羅神社があり、その境内には文化三年（一八一六）の金毘羅山碑などが並んでいる。そして同社から約二〇〇m北方に加賀屋稲荷が祀られている。「三閉伊路程記」に「いなりの社」とあるのがそれである。加賀屋は安政二年（一八五五）に刊行された「東講商人鑑」の釜石漆之岡の中に、「魚集商人、同所方小間物店加賀屋松次郎」と記されていた豪商である。

ところで旧道は、加賀屋稲荷の前を繞出し、尾崎神社の参道から左折して約三〇mほど登っていくと、左右に分岐しているが、その分岐点を左折した所が鳥谷坂の登り口である。ここを登って、旧道が最初にカーブする所に、文化八年（一八一二）の念仏百万遍碑、寛政二年（一八〇〇）と安政六年（一八五九）の庚申塔などがある。そこから道を三折して登った途中の右側に石段があつて、約五mほど登ると平坦地となり、左手に岩間稲荷の本堂祠がある。その周囲には安政六年（一八五九）の雲山塔、天明六年（一七八六）の庚申塔、明治一二年の紫波稲荷神社碑などが建っている。そしてここから東方へ少し離れた山道の端に、天明五年（一七八五）の宝篋印明塔（高さ、四〇cm）があり、その前を通る道はカーブして鳥谷坂道と合流している。このルートも旧道の一つとして使用されたものかも知れない。

岩間稲荷の所を過ぎて、旧道をさらに北上すると、左手から銭箱沢道が合流している。その合流点から約四〇〇m北進した鳥谷坂の中腹で、鏡への道が分岐している所に、明治三〇年代のものと考えられる加賀鶴サイノカミ祠がある。この祠の左側には、岩館氏（屋号、加賀鶴）が買取った山の四至が刻まれている。ここから旧道道を約六〇〇m西北に進むと、標高約三三〇mの鳥谷坂の頂上に達するが、そこには天明八年（一七八八）の一字一石供養碑（総高一四〇cm、幅五二cm、厚さ二三cm）が山梨の古木を背にして建っている。碑の前はなだかな傾斜をなして芝草が生えており、鳥谷坂越えの人々

の恰好の休み場となつていた。昭和初期まではここを通る人が多かったという。この供養碑から先の旧道はほぼ北上して水海地内に達するが、その間、水海側からの鳥谷坂登り口に無年号の道標（高さ五二cm、幅一八cm、厚さ四cm）が建っていた。現在は釜石市立図書館に移管されているが、それには「右ハ山道、左ハ釜石道」と刻まれている。ここから水海側両石坂登り口までの旧道は、水海の平坦地を通つていだが、現在は公園の広場となつているため、その痕跡すらうかがえない。「三閉伊路程記」には「水海家三軒」とある。また、古老の言によれば、水海地内の鳥谷坂登り口から両石坂登り口に至る旧道は、現在の国道の東側を水海沿岸とほぼ並行して、直線に通じており、その沿道に、〇軒ばかりの家が並んでいたが、明治の津波でみな流されてしまったとのことである。

両石坂の水海側登り口は、国道水海トンネルの手前左側にある地藏（お乳神）の所である。国道を横断した旧道は、ここから右に折れて国道の左側を進み、やがて左折して深沢に達するが、その間の旧道は数草が繁茂して歩行困難である。水海トンネルの真上にある葛西塚は、慶長六年（一六〇一）、狐崎の釜石一揆に敗れた葛西六郎主従がここで死亡したので、これをあわれんだ住民が建てた墓であるという。深沢から先の旧道ははっきり残っており、歩行も容易である。その旧道上の両石坂を進み、山田線両石駅の南で線路を横断し、塚ノ鼻を右手にみやりながら進むと、旧道は国道と合流する。その合流点が両石坂の登り口である。この登り口から約三〇〇m南西の旧道沿に文政一〇年（一八二七）の象頭山碑（高さ一六九cm、幅一五五cm、厚さ二五cm）があり、少し進んだ地点に六一七基の庚申塔が倒れている。そしてこの付近に安政五年（一八五八）の蛸供養碑（高さ一〇五cm、幅八二cm、厚さ三八cm）があつたというが、現在はそれより東方の国道沿の横道に移建されている。

さて、国道と合流した旧道は、そのまま、国道とはほぼ重なつて西北に進み、

恋ノ時の登り口で国道の右手に分岐しているが、その間、国道との合流点から約二〇〇m東南に、「トエビスさん」と呼ばれている思比須崎が両右湾に面して祀られている。一方、両右漁協の菓子の山際に権兵衛稲荷といわれる祠があり、そこから約五〇m東に離れた所で、坂下商店をはさんで約二〇mの間隔で存在する二つの岩は、お石神といわれ、両右の地名の起りとして部落の信仰をあつめている。なお、「閉伊路程記」や「閉伊道中記」にある「海ノ神」は、このお石神のことをいっているものと思われる。お石神から約二五〇m北方に厳島神社と月読神社がある。延享五年（一七四八）の勧請と伝える厳島神社は、「閉伊路程記」に「弁財大之社」と記されているものであり、もとは両右漁協の岩上に祀られていたものである。この神社から約二五〇m西で、国道と山田線にはさまれた地点には、測口家の屋敷神である荒神社があり、同社には元禄三年（一六九〇）、宝暦二年（一七六一）の銘をもつ獅子頭が所蔵されている。荒神社から約五〇m西北に離れた国道南側の山際に、明治一九年の両右海蔵記念碑（高さ一六六cm、幅七四cm、厚さ一二cm）、同年の海蔵記念碑（高さ一九〇cm、幅九二cm、厚さ四二cm）、昭和八年の津浪記念碑（高さ一九〇cm、幅一〇五cm、厚さ五〇cm）の三基が並んで、大津浪に二度も襲われた両石は、釜石市内でも唐丹の本郷に次いで大きな被害を受けた所である。

両右町の北方で、国道の右手に分れて恋ノ時へ向う旧道は、両右側の登り口によって一部分だけ往時の姿をとどめているが、他は山田線の敷設工事や国道工事によって消滅している。その旧道登り口には享保四年（一七二九）の華庚申供養塔（高さ九六cm、幅二六cm、厚さ二五cm）、安永二年（一七七三）の同碑（高さ八九cm、幅七二cm、厚さ一四cm）、弘化三年（一八四六）の五段成就碑（高さ七六cm、幅六二cm、厚さ一六cm）の三基が建っている。これらの碑はもと恋ノ時の中腹（山田線両右トンネル入口付近）にあったものである。恋ノ時の頂上にある年代不明のサイノカミ（石祠）も、もとは旧道の東側に

あったものであるが、国道工事によって西側の高台の上に移されている。

恋ノ時から先の旧道は山田線の敷地沿に進み、やがて左手に分かれて国道と合流しているが、その間の旧道は定かではない。国道と合流した旧道は、長内川に架かる長内橋を渡ると、左手に外山への道が分岐しているが、その分岐点近くの外山道に沿って、稲荷社・山神・産神・大黒などの祠と、奉助請妙法善神・大山厳神・山神・山神社・稲荷神社などの碑群（いずれも昭和の建立）がある。長内橋を過ぎると、旧道はほぼ国道沿に、あるいはそれと重なって進み、常楽寺前の三叉路へと達している。この間、長内橋の北方に観音堂と元禄三年（一六九〇）の勧請と伝える鶴住神社がある。観音堂については、「上閉伊郡志」に「もと鶴住居観音と称し、十一面観音を安置し、伝へて釈阿仁の作といひ、享禄年間の勧請とす。明治維新後鶴住居神社と改む」と記されている。現在は本尊を中心に、十一面観音の坐像と立像を左右に祀り、その左脇に薬師・不動・山神・オシラサマなどを安置している。ここから約七〇〇m北方の新田に、曹洞宗清涼山常楽寺がある。同寺は寛永三年（一六六六）、親恩寺七世慶幸忍悦和尚の開山で、享保三年（一七二八）、雲仲祖明和尚が胸木村（鶴住居のうち）八幡沢に移して清涼山と号し、現在に至っている。文化元年（一八〇四）に再建された本堂を中心にして、七尊伽藍の様式を今に伝えており、その境内には明治一九年の三陸大津浪犠牲者追悼碑などが建っている。

ところで、旧道が新田地内に入ると、ほぼ国道と重なる常楽寺前の三叉路に至る。左は旧道（鶴住居・遊野線）、右は国道（大橋・宮古方面）で、その中央の末舗装の道が旧道である。この旧道を入ったすぐ右側に、享保四年（一七二九）の庚申塔、金羅羅宮神などの古碑群の中に、昭和三年の道標（高さ八〇cm）が土台のコンクリートをつけたまま、倒れている。この道標は鶴住居青年支会が御大典記念として建立したもので、それには次のように刻まれている。

右 片母ヲ屋ノ 六料・〇九米

左 橋野ヲ屋ノ 三九料二七・米

旧道はこの道標の所から約一〇〇m北進した地点で右折し、鶴住居川の岸辺に通じているが、そこが片岸の渡河点であるといわれている。しかし、その痕跡は何もない。鶴住居川を越えようと、旧道はふたたび国道と合流して片岸の町の中央へと進む。そここの国道西側の高台には、稲荷神社が老松に囲まれて鎮座している。境内には明治九年の津浪記念碑（高さ一二〇cm、幅六三cm、厚さ二六cm）と昭和八年の同碑が並んでおり、とくに前者には、「南無妙法蓮華経大龍王鎮座」と刻まれているので、日蓮宗の僧侶によって建立された、めずらしい碑である。

稲荷社の前を国道と重なって進んできた旧道は、やがて国道の右手に分岐している県道上を東進し、山田線の敷地を横断してすぐ左折しているが、そこが古崩坂（大楯町との境）への登り口である。この登り口から古崩坂までは旧道が残っており、その中腹に文化一四年（一一八一）の水槽がある。ここから約八〇〇m東に離れた地点にオカネ塚があり、その老松の根元には宝暦二年（一七六一）の庚申供養塔（高さ八三cm、幅六三cm、厚さ一〇cm）、寛政二年（一八〇〇）の奉庚申供養碑（高さ一〇一cm、幅五〇cm、厚さ一九cm）、文政七年（一八一四）の南無阿弥陀仏碑（高さ九七cm、幅一九cm、厚さ三〇cm）、明治一〇年の同碑（高さ一六cm、幅七二cm、厚さ四〇cm）などが建っている。そのうち、文政七年の碑は道標をかたえており、それには「左ハ山ミチ、右ハ大ツチ」と刻まれている。この道標によって、宝浜部落と大楯との交流が盛んであったことが知られる。

大楯町

釜石市との境になっていく古崩坂の頂上は、堀割（切通し）となっており、高さ約二・五m、幅二・三m、延長約一四mの規模である。この坂は鎌牛和尙の開鑿とも伝えられているが、すでに永享九年（一四二七）ごろには、釜石へ通ずる道として使用されており、南部守行が流れ矢にあたって死亡した所ともいわれている。現在は、国道古崩坂トンネルの開通（昭和四三年）とともに使用されなくなり、雑草が繁茂して往昔の面影はない。

古崩坂の堀割から約一五〇m進んだ所が水呑場であり、そこには安政六年（一八五九）の金比羅碑（高さ七五cm、幅五七cm、厚さ五五cm）が旧道の左側に建っている。ここから約二五〇m進んだ地点で国道を横断し、さらに、旧道上を北東に向って三・〇m行くと、花輪田の古碑群に到達する。安永七年（一七七八）の橋供養碑（高さ七五cm、幅六三cm、厚さ三二cm）、天明二年（一七八三）の突卯飢渴亡者供養塔（高さ二四cm、幅五九cm、厚さ二八cm）、万延元年（一八六〇）の金華山碑（高さ八二cm、幅二五cm、厚さ一五cm）、無年号の不動尊（高さ九九cm、幅七〇cm、厚さ三二cm）などがそれぞれある。橋供養碑には「林家六世」と刻まれているが、これは橋野村の林宗寺六世鎌牛和尙のことである。

この花輪田の古碑群を過ぎると、旧道は右折して田圃の中を進み、小鏡川を渡ってから先は、二つのルートに分かれている。一つは小鏡川の堤防沿に西北に進み、古崩橋の所で国道と合流している。もう一つは定かではないが、小鏡川を渡った地点から北東に進んで本町で国道と合流している。そして国道と合流した旧道は、そのまま、国道と重なって市街地を東進し、やがて左折して本広町を経由し、その先は国道の約二〇〇m左側を国道と並行しながら大楯川を渡っている。その間、古崩橋の北側に、享保七年（一七二二）の奉供養庚申碑（高さ一〇〇cm、幅五一cm、厚さ二八cm）などからなる上町の古碑群がある。これらの古碑群は、もとは古崩橋の東たもとにあつたが、国道

建設の時に移されたものである。

旧道が国道と重なって走っている上町(旧四日町)の左側には、先の古碑群について、神明社・小籠神社・役所稲荷跡・大念寺・大徳代官所跡などがつづいている。まず、神明社には永祿六年(一五六二)の獅子頭(長さ三六cm、幅二六cm、厚さ二cm)が所蔵されており、その境内には、兼前川川善兵衛の寄進なる延享二年(一七四六)の燈籠(総高一五〇cm)が建っている。小籠神社には不動尊石制(総高・〇五cm)、その境内に前川善兵衛寄進の延享五年(一七四八)の燈籠(総高一七〇cm)がある。役所稲荷とは大徳代官所の稲荷社のことだ、その跡地に寛政二年(一八〇〇)の稲荷石制(総高八七cm)、文久元年(一八六一)の同制(総高一二五cm)などがあるが、前者は四日町検断柏崎吉兵衛の寄進、後者は大徳給人後藤堅蔵の寄進によるものである。浄土宗大念寺は、貞享元年(一六八四)、岩城国岩前郡山崎村梅福山専修寺受覚相高の開山と伝えている。同寺の境内には、明暦四年(一六五八)の大念寺開山碑と伝える南無阿弥陀佛(高さ一〇〇cm、幅五〇cm、厚さ一〇cm)、享保一年(一七二六)の同碑(高さ二一〇cm、幅九五cm、厚さ一四cm)、無年号の同碑(高さ二一〇cm、幅一三二cm、厚さ一四cm)などからなる古碑群がある。この大念寺の斜前方に大徳小学校があるが、その校庭の中央部が大徳代官所跡である。ここから約六〇〇m西北に大徳城跡(標高二二〇m)がある。

国道と重なっている旧道が本町(旧八日町)地内に入ると、その左手に大徳町中央公民館があるが、その敷地に隣接した東側の高台に愛宕神社が祀られている。大徳官職記によれば、同社は宝暦三年(一七五二)に代官横浜吉兵衛によって再建されたものという。その境内には、再建当時のものと思われる愛宕神社石制(総高・三四cm)と弘化二年(一八四九)の同制(総高・〇六cm)がある。なお、大徳古今伝代記や大徳古城物語などをみると、寛保二年(一七四二)、四日町と八日町(現在の土町と本町)に防火用水としての中張を通したことが知られる。

旧道が国道の左手に分岐して末広町(旧向川原)に入ると、その右手に東海社がある。同社は古廟山草削の菊池慈泉の弟祖晴が開祖であり、彼は兄と同じく仏門に入り、諸国の霊山霊地を訪ねて修業をつみ、明和元年(一七六四)この地に天神社を建て、池を造って水天宮を祀った。この社は庭園化されて御社地公園とも呼ばれていたが、住宅官公地化が進んだ現在、往昔の面影は失なわれている。その敷地内の一部には、安永四年(一七七五)の明和草削碑(高さ二〇cm、幅六一cm、厚さ三二cm)、文化三年(一八〇六)の閉山菊池祖晴墓碑(高さ・〇・cm、幅六二cm、厚さ六二cm)、寛政二年(一八〇〇)の奉灰申碑(高さ六九cm、幅二〇cm、厚さ二四cm)、明治十九年津浪碑(高さ一五一cm、幅五六cm、厚さ一〇cm)、無年号の水天宮石制(総高九八cm)などが建っている。

さらに、旧道に沿って末広町を進んで行くと、その西側に海龍山江岸寺がある。同寺は宝暦二年(一七六二)、文政八年(一八二五)、明治三四年と大火災にあつて全焼しているが、文政のものと思われる山門だけが残っている。その山門の前には、東海社開祖菊池祖晴の二〇日山龍を記念した安永七年(一七七八)の木製供養塔(高さ二四五cm、幅四〇cm、厚さ二七cm)のほか、享和四年(一八〇四)の大賢字通居士碑(高さ一〇一cm、幅二九cm、厚さ九cm)、寺子屋跡院、文政二年(一八二八)の巖山好字先生墓碑(高さ九〇cm、幅六一cm、厚さ二二cm)、同、明和九年(一七七二)の南無阿弥陀佛(高さ八七cm、幅三〇cm、厚さ二九cm)、安永二年(一七七二)の百方蓮念仏供養碑(高さ八二cm、幅二八cm、厚さ一八cm)、延享三年(一七四六)の石地藏(胸部に欠損)などが並んでいる。同寺境内には、「トナタテモ、わすれない、あとみろ、そわか」と刻まれた無年号の古廟坂歌碑(高さ三九cm、幅二七cm、厚さ一五cm)、寛政五年(一七九三)の古廟山五輪塔(総高四一七cm)が建っている。さらに、寺の北方にある墓地には、文禄元年(一五九二)の当寺開山老和尚御師碑(高さ六六cm)をはじめとする江岸寺住職墓碑、嘉永二年

(一八四九)の蛇口臨書堂墓碑(高さ一〇七cm、幅四一cm、厚さ四cm、寺子屋師匠)、文政三年(一八一〇)の小川孫兵衛墓碑(高さ一六六cm、幅二二cm、厚さ六cm)などが点在している。小川孫兵衛とは「大樋古今伝代記」や「大樋官職記」などを編纂した人物である。

ところで、大樋川を渡ってからの旧道であるが、山田町に至るには、次のような二つのルートがあった。

〔一〕宮沢旧道、江戸幕府の巡見使が通行した道であったという。大正一一年の「町村道路線認定調査」に「郡道路宮ノヨロ分岐シ、下閉郡織笠村界ニ至ル、二十丁」と記されているのがそれである。すなわち、県道大樋小国線の宮口から宮沢に沿って北東に進み、宮沢峠(大樋と山田町との境、県道分岐点から約一・五km)を越え、外山・落合の各部落を経由して織笠に至るルート。

〔二〕辺津ヶ沢旧道、「町村道路線認定調査」に「郡道ヨリ分岐シ、織笠村界ニ至ル、三十丁」と記されている。すなわち、県道大樋小国線の辺津ヶ沢から北東に進み、標高三一九mの鯨峠(山田町との境、県道分岐点から約三・七km)を越え、馬指野・森木の各部落を経由して織笠に至るルート。現在の辺津ヶ沢林道がほぼそれに当る。

〔三〕四十八坂旧道。これは安渡から吉里吉里坂を越え、吉里吉里・浪板の各部落を経由して四十八坂に至るルート。「大樋官職記」天明元年(一七八一)二月三日条をみると、吉里吉里坂の改修に関して、「吉里吉里村肝入頼上候は、吉利々々坂道不宜候一付、同村吉祥寺隠居、橋野村林宗寺隠居、右両僧書依普請仕度旨申上、被仰付」と記されている。この記事は、宝暦元年(一七五二)ごろから約三〇年間にわたり、宮古街道・閉伊海岸諸道などの改修工事を行ない、盛岡藩陸上交通史上不朽の功績を残した林宗寺六世牧庵禪牛が、その師の吉祥寺大判見牛とともに、吉里吉里坂の改修工事に最後の頓着を振ったことを物語っている。

以上の二道のうち、〔一〕のルートが距離的にみても山田へは最短であり、しかも沿線に、里塚が設置されている所をみると、これが浜街道の本線であったとみてよい。しかし、江戸中期以降にみられる陸上交通の発達にもなつて、〔二〕のルートもしだいに利用されるようになったものと考えられる。また、巡見道といわれる〔三〕のルートは、〔一〕の間道的な役割を果たしていたものであろう。そこで本報告では、紙数の制約もあるので、〔二〕のルートについて述べていくことにする。

さて、大樋川を渡った旧道はすぐ左折して、同川沿に走る県道(大樋小国線)上を西北に進み、辺津ヶ沢で県道の右手に分岐しているが、その間、沢山地内の旧大樋高校の北側に天明二年(一七八二)の宝篋印陀羅尼経碑(高さ一八cm、幅八〇cm、厚さ一一cm)があり、そこから約五〇〇m北東に、縄文の中・後・晩期の遺物を出土する沢山遺跡(約四〇〇〇m²の畑地)がある。また、辺津ヶ沢の旧道分岐点の手前に駒形神社があり、その境内には文政五年(一八二二)の有縁無縁塔(高さ一〇三cm、幅六五cm、厚さ二二cm)、同年の馬頭観世音碑(高さ六〇cm、幅七〇cm、厚さ一四cm)、嘉永四年(一八三二)の同碑(高さ一〇四cm、幅六二cm、厚さ一七cm)などが建っている。

さらに、旧道分岐点から約七五〇m北西の県道北側に、天正七年(一五七七)の勧請と伝える(「邦内郷村誌」)八幡神社があり、「大樋御代官所社堂書上」は、「三尺四方板葺、老間半、式間、拝殿日本社入込三仕候而無損、別当宝庫坊」と記されている。同社の境内には宝永二年(一七〇六)の帝釈天庚申奉勸行碑(高さ六〇cm、幅三七cm、厚さ一四cm)、寛政一〇年(一七九九)の念仏供養碑(高さ一〇七cm、幅五〇cm、厚さ三三cm)、天保四年(一八三三)の石段塔(高さ六七cm、幅六四cm、厚さ二二cm)、嘉永元年(一八四八)の金毘羅碑(高さ九七cm、幅三三cm、厚さ一一cm)、同年の山神碑(高さ八七cm、幅四六cm、厚さ一六cm)などのほかに、明治、大正の行碑が数基ある。

ところで、辺津ヶ沢で県道の右手に分岐する旧道は、大楠宮林書で開発した林道と重なっているが、その林道上を約一・二km北上した地点に辺津ヶ沢の一里塚があり、幅約一・mの旧道をはきんで東西に二基現存している。西側の塚は高さ六m、底部径四・四mあり、東側のそれは高さ四m、底部径九mの規模である。貴重な街道関係の文化財として保存を講じたいものである。

この一里塚から約一・二〇m進むと、林道の左側に大正九年の山神碑（高さ四六cm、幅二五cm、厚六一六cm）がある。林道はこの辺まで旧道に沿って開発されている。山神碑から約四〇〇m進むと、旧道は急なつり折りの坂道となり、さらに、約五〇〇mほど登ると辺津ヶ沢村に至る。この時から鯨崎までの間は約五〇〇mである。県道との分岐点から計測すると、約三・六八kmで鯨崎の頂上到達する。そこが山田町との境界である。

山田町

雑木に囲まれた鯨崎を越えると、幅一mほどの旧道が残っており、現在は林道として使用されているが、随所に往昔の面影をとめていている。その旧道に沿って約四〇〇m北進した右側に、天明年間（一七八一―一七八八）の剣富子没神定門碑（高さ四〇cm）が建っている。この碑は通りがかりの旅人を殺害した村人たちが、供養のために建立したものと伝えられている。同碑から約九〇〇m林道上を北進すると、その左手の松の植林地帯の中に、萩野原一里塚が東西に並んで現存している。西側の塚は高さ一・一m、底部径六mであり、東側の塚は高さ一・二m、底部径六mの規模であるが、夏草が繁茂しているために判然としない。また、この辺の旧道は両塚の間を通っていたわけであるが、植木などによって変貌しているため、その痕跡すらうかがうことができない。なお、ここでいう一里とは小道で表現したもので、四町にあたる。旧道は、この一里塚から約四〇〇m北に離れた地点から現存し、織笠川の支流に沿って、約一・二kmの間、幅約一・mの砂利道がづいている。その先は幅二・四mの舗装道となって、織笠川に架かる馬指野橋へと向っているが、

その間、馬指野地内の舗装された旧道の左右に、八百万神と七流大明神の祠堂がある。八百万神祠堂の鳥居の奥には、昭和一三年の天照皇大神・八幡大神・春日大神を中央にして、無年号の古峯山碑と不動尊碑が左右に並んでいる。この付近には文化九年（一八二二）の山神塚碑、安政二年（一八五五）の岩峯山・早池峯山・志和稲荷碑（高さ二二五cm）、同年の金毘羅山・三峯山碑（高さ二二〇cm）、無年号の庚申塔などのほかに、近代のもものが多く建っている。これらの古碑群の北方の山腹には、源氏の落人といわれる小林源次忠願が、伊豆権現から十一面観音を勧請して、この地に祀ったと伝える伊豆権現がある。

さて、馬指野橋を渡った旧道は、やがて左手から来る白石・田子ノ木道と合流して北東に進み、霊堂一里塚へと達している。旧道の合流点から約五〇〇m東南の山腹に桂清水観音があり、その鳥居の傍に享和三年（一八〇三）の庚申供養塔（高さ一一二cm）、明治二〇年の山神社碑（高さ一一〇cm）の二基が建っている。さらに、旧道の合流点と織笠八幡神社のほぼ中間で、旧道北側の丘陵尾根の末端に鯨神城跡がある。これは一六世紀後半の永享から文禄にかけて、福士氏が居城とした平山城で、その本丸跡に鯨神神社が祀られている。この城跡から約二五〇m東方にある霊堂八幡は、福士氏一〇代の墓所とも伝えられている。

霊堂一里塚は、霊堂八幡から約七〇〇m北東にあつて、舗装された旧道をはきんで南北に二基現存しているが、いずれも、道路の拡幅工事によって縁辺が削除されており、残存する底部は径三・八mである。南側の塚も道路に面した北と西の部分が削除されており、高さ二・二m、残存する底部は径四・四mの規模である。なお、この一里塚は今後の道路改修や拡幅工事などに伴い、さらに削られる危険を孕んでいるので、将来にわたって長く保存するために、管理を十全にする必要が痛感される。この一里塚の西方に、永享

一年（一四二九）、福土保定の開削と伝える曹洞宗龍泉寺があり、そこから約二〇〇m北東に、寛政二年（一七九一）の開削と伝える機堂八幡宮がある。八幡宮の本殿は昭和五六年二月に全焼して今はない。

ところで旧道であるが、霊堂一里塚を過ぎ、舗装された道を北東に進むとやがて国道と合流する。その合流点の手前約二五〇mの地点に、無年分の絵入道標（高さ五・五cm）、寛政九年（一七九七）の庚申供養塔（高さ一四〇cm）、無年分の庚申供養塔（高さ一・五cm）の三基が一列に並んでいる。道標の右側には大槌の絵が描かれ、その下に「石八木橋」とあり、左側には舟こぎ人と、その下に「左ハ船越」と刻まれている。文字の読めない人でも、描かれている絵をみれば、行先がわかったわけである。まことに珍らしい道標といつてよい。この道標付近の旧道は定かではないが、大体、現在の道路の右手にある杉林の縁辺を通っていたらしい。そして、道標の手前部分に若干道らしい所もあるが、その先は不明である。

一方、この絵入道標付近から山田線織笠駅に向つて南下し、同駅の北側で、今度は東進して国道に合流する道があるが、これも大槌に通ずる街道である。このルートは船越・四十八坂・浪板・吉里吉里などを経出して安渡へと達するものであるが、数紙の制約により割愛せざるをえなかった。ただ、織笠駅と織笠川とはさまれた所の道の南側には、次の一基が右から一列に並んでいる。弘化三年（一八四六）の岩峯山・早池峯山・志和稲荷碑（高さ・八五cm）、無年分の湯殿山碑（高さ二二八cm）、明治の金毘羅神社碑（高さ・四〇cm）、弘化二年（一八四五）の金毘羅供養塔（高さ一四〇cm）、同三年の念仏供養塔（高さ・三〇cm）、元文二年（一七三七）の南無阿弥陀仏碑（高さ二〇cm）、明和四年（一七六七）の橋供養塔（高さ一一五cm）、同年の流船供養塔（高さ一一五cm）、無年分の金刀比羅神社碑（高さ・〇〇cm）、寛延四年（一七五二）の奉書妙典・字一石一札供養塔（高さ一一〇cm）、明治の奉納四国西国神社仏閣拜礼塔（高さ一一七cm）など、一一基からなる織笠川古碑群

がそれである。

さて、国道と合流した旧道は、そのまゝ、国道と重なつて北進している。合流点から約二〇〇m進んだ地点が、「三閉伊路程記」に「板坂」と記され、俗称で「二本小松」といわれている所であるが、その国道右側には、鞭牛和尚の道供養碑として注目される、明和二年（一七六五）の道供養林宗六世碑（高さ六〇cm）がある。そのほか、無年分の曹洞宗金剛碑（高さ九五cm）、本寸龍神塔（高さ八〇cm）、根井沢境陀尊などが一列に並んでいる。この板坂古碑群を過ぎると、旧道は国道と重なつて山田町の市街地を北進しているが、その間、町のほぼ中央にある図書館と公民館の敷地は、盛岡藩直轄の倉庫が置かれ、御蔵山と称されていた所である。

旧御蔵山から約三〇〇m西方に八幡神社があり、社殿北側の丘上に、文政四年（一八二二）の卯子西大明神・清水観世音碑（高さ・二三cm）が杉の根元建っている。また、社殿の東南側には祠堂群がある。武内宿禰、豊玉姫命、武内宿禰像、飯岡稲荷、稲荷神社、稲荷社、龍神などがそれである。

一方、旧御蔵山から約三〇〇m離れた北方に、延宝年間（一六七二～一八〇）の開削と伝える曹洞宗龍泉寺がある。境内には六地藏のほかに、享和四年（一八〇四）の流船供養碑、文化五年（一八〇八）の奉納大乗妙典日本拜礼塔、嘉永四年（一八五二）の輪廻供養塔をはじめ、無年分の奉納大乗妙典六十六部日本廻国供養塔、書写法華経一字、石集納諸国霊山上石碑、流船供養塔、流船塔などが林立している。

さて、国道と重なつて進んできた旧道は、北浜町で国道の左手に分岐し、そのまゝ、沢田・間木戸への町道に沿つて北進している。その北浜町地内には、天明年間（一七八一～一七八）の開削と伝える大杉神社があり、さらに同社の北方で、柳沢・大沢への道が右手に分岐しているが、その角地に、安永七年（一七七八）の奉供養庚申塔、文化五年（一八〇八）の庚申供養碑、文政三年（一八一〇）の湯殿山鉄門上人碑、同七年の庚申塔、嘉永四年（一八五二）

の梵字供養碑、同六年の岩鷲山・早池峯山・志相稲荷碑、明治一〇年の湯殿山・月山・羽黒山碑、無年号の庚申供養碑などが、列に並んでいる。釜谷河古碑群といわれるものがそれである。ここから町道と重なっている旧道を約五〇〇mほど進むと、沢田・柳沢の低地に丘陵の先端部が突出しているが、そこが沢田八幡館跡であり、安倍九郎勝任の因館のあった所と伝えている。館跡には沢田八幡神社が祀られており、その南麓に寛政元年（一七八九）の庚申供養塔（高さ九五五cm）と不明碑（高さ六六四cm）の二基が並んでいる。

沢田八幡館跡の南付近から間木戸一里塚までの間は、幅約一mの旧道が現存し、往昔の面影を伝えている。そして一里塚に至る旧道の右側に、寛政九年（一七九七）の馬頭観世音碑（高さ八五五cm）、嘉永六年（一八五二）の岩鷲山・早池峯山・志相稲荷碑（高さ一〇五cm）、明治一六年の馬頭観世音碑（高さ四五五cm）、無年号の同碑（高さ一〇〇cm）などが並んでいる。間木戸一里塚は旧道の右側に二基現存しているが、その付近の旧道は定かではない。西側の塚（高さ〇・九m、底部径三m）は、町道の改修工事に伴って西半分が削り取られているが、東側の塚はほぼ完全であり、高さ一・二m、底部径六・二mの規模である。この一里塚から旧道と重なっている町道道を約一km北進した地点に、窠坂道祖神が祀られており、そこには慶応元年（一八六五）の道祖神碑（高さ四八四cm）が建っている。

窠坂道祖神から先の旧道は定かではないが、ほぼ北上して、山谷から山名部へ行く道と合流している。その合流点に、享和（一八一〇―一八一三）と文化年代（一八〇四―一八一七）の墓碑が六基並んでいる。この上山谷葛碑群から山名部に向って約四〇〇m進んだ所に、元文五年（一七四〇）の奉信敬虔申供養塔（高さ一九五cm）、天保二年（一八三二）の馬頭観世音碑（高さ一五四cm）、大正の同碑、水神塔などがある。この奥山谷古碑群を過ぎると、旧道はほぼ北上して国道と合流しているが、その合流点付近の湿地帯の中に、嘉永六年（一八五二）の水神塔、同七年の、十六夜爰采明上碑の二基が建っている。

しかし、この付近の旧道は明らかではない。

国道と合流した旧道は、すぐ国道の左手に分かれ、そのまま、国道の左側を走る県道（幅二丁四m、砂利道）と重なって、新田地内へと向っている。その間、国道との分岐点から約五〇〇m進んだ所に山名部一里塚がある。旧道をはさんで左右に現存する塚は、それぞれ道に面した部分が一部削り取られてはいるものの、左側の塚は高さ一・二m、底部径五・二mあり、右側の塚は高さ一・二m、底部径五・三mの規模である。

この一里塚から約八〇〇m進むと、旧道右側の崖上に文化四年（一八〇七）の馬頭観世音碑（高さ八五五cm）、慶応元年（一八六五）の同碑（高さ三二五cm）、牛供養碑、牛馬頭観世音碑などが一列に並んでいる。その後方には、宝永七年（一七一〇）の不明碑（高さ三五五cm）、立派な祠堂の中に鎮座している享保四年（一七一九）の地藏尊（総高九〇cm）、無年号の西国順礼塔（高さ二四八cm）と天照皇大神宮碑（高さ一九三cm）などが国道を背にして並んでいる。これらが田名部古碑群といわれているものであるが、ここからさらに七五〇mほど進むと、新田地内の旧道の右側に寛政一〇年（一七九八）の庚申塔（高さ二二〇cm）、文政三年（一八二〇）の西国順礼塔（高さ二二五cm）の二基が建っている。なお、この新田の古碑群から約一・八km西北に、無年号の上野道標（高さ五二五cm）があり、それには「右ハ宮古道、左ハ甲子道」と刻まれている。この道標のあるルートも、山田から津軽石（宮古市）へ向う街道の一つであるが、紙数の制約もあるため割愛した。

さて、新田の古碑をあとにした旧道は、新田部落を通過し、豊間根川に架かる橋の手前で国道と合流して橋を渡り、国道が右にカーブした所で左手に分岐している。そして豊間根架の所から山田線の右側に並行し北上し、さらに、山田線の敷地を縦断して北進すると、羽々の下への道が左手に分岐しているが、その分岐点に文政六年（一八三二）の馬頭観世音碑（高さ六〇〇cm）、無年号の四国西国順礼供養塔（高さ二二〇cm）、南無阿弥陀佛供養塔（高さ

四五〇）、明治・大正・昭和の馬頭観世音碑五基など、全部で、〇基の石碑が一列に並んでいる。この石神古碑群から約二〇〇m西南に、安倍頼時の末裔といわれる豊間根家がある（豊間根系図）。

一方、石神古碑群からさらに二〇〇mほど北進すると、往昔の面影をとどめている旧道をはさんで、東西に円形の一里塚が現存している。東側の塚は高さ一・三m、底部径六m、西側の塚は高さ一・二m、底部径六mの規模であり、ほぼ完全な形で残っている。この浜街道沿に残っている一里塚は数少ないが、それも、道路の改修・拡幅工事などによって崩され、あるいは消滅したりしている現状をみると、このように、ほぼ完全な形で対をなして残っている一里塚は、まことに貴重な文化財といつてよい。願わくば、関係当事者の細心の管理のもとに、長く将来にわたって保存していきたいものである。この石神一里塚をあとにして、約五〇〇mほど旧道を北上すると、そこが津軽石（宮古市）との境界である。

第二節 街道筋に残る主な文化財

(1) 道標と一里塚

○サイノカミ道標（陸前高田市気仙町字水上）

年代不詳。従是 みぎはやまみち、ひだりはけせんのみ」と記されている。

○水上の道標（陸前高田市気仙町字水上）

文化九年建立。山神碑に「右きた今いすみ、みなみけせんのみ」と記されている。

○二日市の道標（陸前高田市気仙町字二日市）

天保三年建立。山神碑に「右ハきせんぬま、左ハこはらき」と記されている。

○大石沖の道標（陸前高田市高田町字大石沖）

年代不詳。西左 竹駒横田上下右主、南（以下欠）と記されている。

○丸森の道標（大船渡市大船渡町字丸森）

年代不詳。右ハやまみち、左ハたかたみち、芸州行者、施主新蔵、須市太良」と記されている。

○前田の道標（大船渡市猪川字前田）

安政二年建立。「塚の道分け」といわれている。「右 はまなんふみち、右浜唐丹、左 おかなんふみち、右住世田米」と記されている。

○平田の道標（釜石市平田町字下平田）

年代不詳。「右ハせんだい」と記されている。

○嘘石の道標（釜石市嘘石）

江戸時代前半のものと思われる。「右側欠損」、左ハや村道」と記されている。

○鳥谷坂の道標（釜石市両石町字水海）

年代不詳。右ハ山道、左ハ釜石道」と記されている。現在は釜石市立図書館に移管されている。

○常楽寺前二又路の道標（釜石市鶴住居町字新田）

昭和二年建立。「右 片岸ヲ経テ大楯二至ル、六杵一〇九米、左 橋野ヲ経テ遠野二至ル、二九杵二七二米」と記されている。

○絵入道標（山田町織笠）

年代不詳。右に大楯、左に舟こぐ人の絵が描かれており、その下に「右ハ大楯、左ハ船越」と記されている。文盲でも絵をみればわかる、まことに珍らしい道標である。

○上野の道標（山田町豊間根字上野）

年代不詳。「右ハ宮古道、左ハ甲子道」と記されている。

○佐野一里塚（陸前高田市米崎字佐野）

旧道の左側に一基、その痕跡をとどめている。

○丸森一里塚（大船渡市大船渡町字丸森）

旧道をはさんで東西に、基現存しているが、管理がまことに不十分である。左側の塚の頂上には、樹令三〇〇年と推定される老松がそびえている。

○河内一里塚（陸町越喜米字小出）

「元禄絵図」に記載されているもので、草原の中に、基現存している。保存状況は良好である。

○平根一里塚（三陸町吉浜字平根）

旧道をはさんで左右に、基現存している。

○白木沢一里塚（三陸町吉浜字白木沢）

旧道の右側に一基だけ現存している。

○鎌台一里塚（三陸町吉浜字鎌台）

旧道をはさんで左右に二基現存している。

○辺津ヶ沢一里塚（大槌町大槌字辺津ヶ沢）

旧道をはさんで左右に二基現存している。

○萩野原一里塚（山田町織笠萩野原）

松の植林地帯に二基現存している。

○雲堂一里塚（山田町織笠雲堂）

舗装された道をはさんで南北に二基現存している。

○間木戸一里塚（山田町山田一地割）

旧道の右側に、基現存しているが、西側の塚は西半分が削り取られてい

る。

○山名部一里塚（山田町豊間根田名部）

旧道をはさんで左右に、基現存している。

○石崎一里塚（山田町石崎字一地割）

旧道をはさんで東西に二基、ほぼ完全な形で現存している。

(2) 神社と寺院

○北野神社（陸前高田市気仙町字中井）

「安永風土記」にいう「天神社」で、慶長年中に勧請されたという。元治元年再建。

○龍泉寺（陸前高田市気仙町字堂下）

曹洞宗。今風山。天正九年開創。寛文年間到现在地に移転。山門と鐘樓堂は文化年間のものという。本堂の天井に描かれた龍の絵に、「嘉永二年」の銘がある。

○金剛寺（陸前高田市気仙町字町裏）

真言宗。如意山。仁和四年の創建と伝える。「安永風土記」によれば、本尊は大日如来と如意輪観音の二体で、気仙郡願礼三番札所の第一番である。

○喜門寺（陸前高田市米崎字地竹沢）

曹洞宗。海岩山。仁治二年の開創、永正元年再興開山と伝える。文化年間の三重塔は県指定。

○常楽寺（釜石市鶴住居町字新田）

曹洞宗。清涼山。寛永三年の開山、享保三年現在地に移転。文化元年に再建された本堂を中心に七堂伽藍の様式を伝える。

○江岸寺（大槌町末広町）

日蓮宗。海龍山。近世初頭の開山と伝える。文政期のものと思われる山門がある。

(3) 古碑

○月山坂登り口の古碑群（陸前高田市気仙町字牧田）

寛文七年の梵字供養碑をはじめ享保・寛延・天明・安永などの古碑七基がある。

○二日市の古碑群（陸前高田市気仙町字二日市）

寛保二年の奉書「一石碑をはじめ明和・天明・天保などの古碑六基がある。

○福伏の古碑群（陸前高田市気仙町字福伏）

正徳二年の供養飯合碑をはじめ享保・宝暦・安永などの古碑八基がある。

○龍泉寺前古碑群（陸前高田市気仙町字愛宕下）

延元年間の奉納書写碑をはじめ享保・明和・文化などの古碑六基がある。

○北野神社の古碑群（陸前高田市気仙町字中井）

延宝六年の梵字供養碑をはじめ宝水・享保・明和・天明・寛政・文化などの古碑一〇基がある。

○五本松の古碑群（陸前高田市高田町字森の前）

享保・四年の供養吉面金剛碑をはじめ寛延・明和・寛政・文化・文政・元治などの古碑一四基がある。

○天照御祖神社の古碑群（陸前高田市高田町字本丸）

宝水・年の庚申塔をはじめ元文・安永・寛政・天保などの古碑八基がある。

○保呂羽神社の古碑群（陸前高田市高田町字洞ノ沢）

延宝八年の庚申塔をはじめ貞享・享保・元文・寛延・寛政・文化などの古碑九基がある。

○和野の古碑群（陸前高田市高田町字西和野）

延宝三年の庚申供養碑をはじめ宝水・享保・寛保・宝暦・寛政・文化・文政・天保などの古碑・七基がある。

○八坂神社の古碑群（陸前高田市高田町字下宿）

宝永五年の庚申碑をはじめ享保・明和・寛政・天保・新永・安政などの古碑一四基がある。

○松峰天照御祖神社の古碑群（陸前高田市米崎町字松峰）

宝永五年の庚申供養碑をはじめ享保・元文・明和・天明・寛政・天保・

方延などの古碑二基がある。

○船河原の古碑群（大船渡市米崎町字船河原）

寛政九年の六地藏のほかに、安永四年の庚申塔など七基がある。

○月山神社の古碑群（大船渡市大船渡町字宮ノ前）

元文四年の大衆妙典・字一石塔をはじめ文化・文政・文久などの古碑七基がある。

○洞雲寺境内の古碑群（大船渡市盛町字津野沢）

宝永二年の飯依三玉碑をはじめ文化・天保・安政などの古碑が沢山ある。

○楓の木古碑群（大船渡市盛町字権現堂）

宝暦二・三年の庚申供養塔をはじめ寛政・安政・方延などの古碑六基がある。

○苗苙句碑（大船渡市盛町字本町）

天保一五年の熊野大権現碑の裏面に、「木の下は汁も顔もさくらかな」と記されている。

○立根川筋の古碑群（大船渡市立根町字書生）

文化「」年の秋葉山碑をはじめ文政・文久・慶応などの古碑六基がある。

○五葉神社の古碑群（大船渡市立根町字沼田）

文化八年の馬頭観世音碑をはじめ文政・文久・嘉永などの古碑・九基がある。

○大野の六地藏（三陸町古浜字大野）

六体の地藏尊が庚申塔・馬頭尊などと並んでいる。

○荒川の古碑群（多石市唐丹町字下荒川）

寛政一〇年の庚申塔をはじめ天保・安政・方延・慶応などの古碑八基がある。

○伊能忠敬測量記念碑（釜石市唐丹町本郷）

星座石、陸奥州気仙郡唐丹村測量の碑などがある。

○上平田入口の古碑群（釜石市平田字下平田）

天明八年の奉供養庚申碑など八基がある。

○常楽寺前二又路の古碑群（釜石市鶴住町字新田）

享保一四年の庚申塔など六基がある。

○オカネ塚古碑群（釜石市片岸町字玉浜）

宝暦一一年の南無阿弥陀仏碑など四基がある。

○花輪山の古碑群（大槌町小鏡字花輪山）

安永七年の橋供養林宗六世碑など四基がある。

○上町の古碑群（大槌町小鏡字上町）

享保七年の奉供養庚申碑など一〇基がある。

○大念寺境内の古碑群（大槌町小鏡字上町）

明暦四年の南無阿弥陀仏碑など一〇数基がある。

○江岸寺山門前の古碑群（大槌町水広町）

明和九年の南無阿弥陀仏碑をはじめ安永・享和・文化などの古碑が数基

ある。このほか、同寺境内には安永七年の木製供養塔、寛政五年の古瀬山

五輪塔などの古碑類が沢山ある。

○八幡神社境内の古碑群（大槌町大槌字八幡）

宝永三年の帝釈天庚申奉勤行碑をはじめ寛政・天保・嘉永・明治・大正

・昭和などの古碑一〇数基がある。

○駒形神社境内の古碑群（大槌町大槌字追田）

文政五年の馬頭観世音碑など数基がある。

○馬指野古碑群（山田町織笠馬指野）

文化九年の山神碑、安政二年の岩城山神のほか、近代のものも多くあ

る。

○織笠川古碑群、山田町織笠字・地割）

元文二年の南無阿弥陀仏碑をはじめ寛延・明和・弘化などの古碑一一基がある。

○板坂の古碑群（山田町織笠板坂）

明和二年の道供養林宗六世碑など六基がある。

○龍昌寺境内の古碑群（山田町後楽町）

享和四年の流船供養碑をはじめ文化・嘉永などの古碑一〇数基がある。

○釜谷洞古碑群（山田町山田字五地割）

安永七年の奉供養庚申塔をはじめ文化・文政・嘉永などの古碑九基があ

る。

○間木戸古碑群（山田町山田字・地割）

寛政九年の馬頭観世音碑など五基がある。

○田名部古碑群（山田町豊間根字八地割）

宝永七年の不明碑をはじめ享保・文化・慶応などの古碑九基がある。

○石峠古碑群（山田町石峠字一地割）

文政六年の馬頭観世音碑など一〇基がある。



1 陸前高田市 松の坂峠の地藏



2 陸前高田市 サイノ神の道標



3 陸前高田市 水上の道標



4 陸前高田市 松の坂峠付近の旧道



5 陸前高田市 牧田橋付近の旧道



6 陸前高田市 牧田の金毘羅大権現碑



7 陸前高田市 月山坡登口の古碑群



8 陸前高田市 二日市の道標



9 陸前高田市 二日市の古碑群(中央の山神碑が道標)



10 陸前高田市 双穴の古碑群(小原木街道)



11 陸前高田市 福伏の古碑群(小原木街道)



12 陸前高田市 龍泉寺鐘樓堂



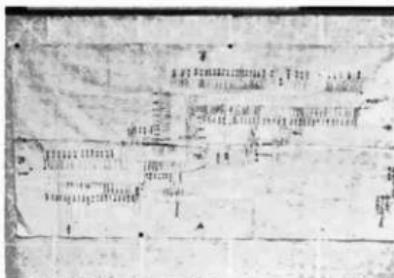
13 陸前高田市 諏訪神社の石壇
(寛政九年の銘あり)



14 陸前高田市 大肝入門(大庄屋・吉田家)



15 陸前高田市 大肝入屋敷見取図



16 陸前高田市 今泉宿町割図



17 陸前高田市 代宮屋敷門



18 陸前高田市 金剛寺



19 陸前高田市 北野神社



20 陸前高田市 大石沖の道標



21 陸前高田市 五本松の古碑群



22 陸前高田市 天照御祖神社の古碑群



23 陸前高田市 保島神社の古碑



24 陸前高田市 浄土寺の阿弥陀坐像



26 陸前高田市 光無寺の梵鐘(市指定)



25 陸前高田市 和野の古碑群



27 陸前高田市 八坂神社の古碑群



28 陸前高田市 太田の古碑群



29 陸前高田市 浜田川橋付近の古碑



30 陸前高田市 中世豪族の系譜をひく金家



31 陸前高田市 普門寺三重塔(県指定)



32 陸前高田市 塚松の古碑



33 陸前高田市 薬師神社の石燈籠



34 陸前高田市 通岡峠へ向う旧道(右へ入る道)



35 大船渡市 丸森の古碑群(右端の古碑が道標)



36 大船渡市 瑠城島(国指定・名勝)



37 大船渡市 月山神社の古碑群



38 大船渡市 西光寺・樹令400年のイチヨウ(市指定)



39 大船渡市 洞窟寺



40 大船渡市 洞雲寺入口に建つ津波記念碑



42 大船渡市 前田の遺徳



44 大船渡市 五葉神社の古碑群



41 大船渡市 王子権碑(受岩神社境内から発掘)



43 大船渡市 立根川筋の古碑群



45 三陸町 河内の一里塚(町指定)



46 三陸町 釣漁時の小川の石垣



47 三陸町 平根善所跡



48 三陸町 平根一里塚(町指定)



49 三陸町 平根一里塚付近の旧道



50 三陸町 大野の六地藏



51 三陸町 正寿院の六地藏



52 三陸町 白木沢の一里塚(町指定)



53 三陸町 巖台峠に向う石畳の旧道



54 三陸町 巖台の一里塚(町指定)



55 三陸町 巖台峠の旧道



56 三陸町 嶽台峠の墓ノ神



57 釜石市 嶽台峠・廣丹側登り口



58 釜石市 荒川の古碑群



59 釜石市 黒ノ木峠・片岸側登り口



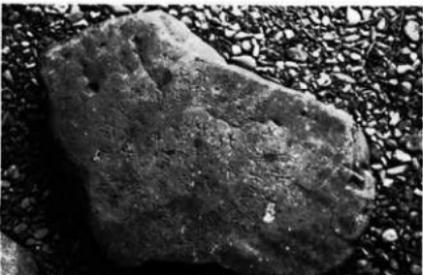
60 釜石市 盛岩寺境内の狸亀の碑



61 釜石市 盛岩寺境内の津波記念碑



62 釜石市 桜峠の旧道



63 釜石市 測量基点の星座石(市指定)



64 笠石市 陸奥州気仙郡唐丹村測量之碑(市指定)



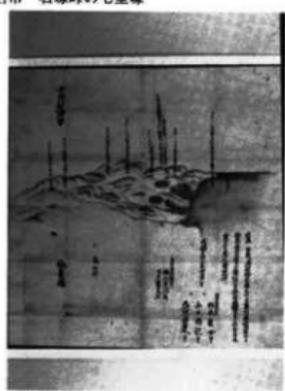
65 笠石市 本郷御番所跡(市指定)



66 笠石市 石塚峠の七里塚



67 笠石市 平田の道標



68 笠石市 藩境絵図



69 笠石市 殺生禁断碑=石の証文(市指定)



70 笠石市 女坂・礪石側登り口



71 釜石市 鑄石の道標



72 釜石市 流船供養塔



73 釜石市 瀬川供養塔



74 釜石市 青面金剛塔



75 釜石市 文政十三年石応寺境内園(市指定)



76 釜石市 徳治三年銘の板碑



77 釜石市 鳥谷坂の登り口



78 釜石市 不動尊神社



79 釜石市 鳥谷坂の宝篋印明塔



80 釜石市 一字一石供養碑



81 釜石市 鳥谷坂の道標



82 釜石市 船供養碑



83 釜石市 両石坂・両石側登り口



84 釜石市 トエビスさま=恵比須祠



85 釜石市 荒神社の獅子頭



86 釜石市 恋の峠の古碑群



87 釜石市 常楽寺



88 釜石市 常楽寺前の三叉路
(ガソリンスタンド左側の未舗装道が旧道)



89 釜石市 片岸の津波記念碑



90 釜石市 古廟坂・片岸側の登り口(左に入る)



91 大槌町 古廟坂頂上付近の堀割道



92 大槌町 天明三年の飢饉供養碑



93 大槌町 鞭牛和尚の橋供養碑



94 大槌町 花輪田付近の旧道



95 大槌町 上町の古碑群



96 大槌町 大念寺の古碑群



97 大槌町 大槌代官所跡(大槌小学校校庭)



98 大槌町 東梅社と古碑群



99 大槌町 明和草創碑



100 大槌町 江岸寺山門



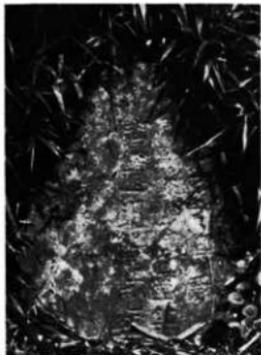
101 大槌町 菊池祖噴供養塔



102 大槌町 古廟山五輪塔



103 大槌町 江岸寺山門前の古碑群



104 大槌町 宝篋印陀羅尼経碑



105 大槌町 駒形神社の古碑群



106 大槌町 八幡神社の古碑群



107 大槌町 八幡神社の石段塔



108 大槌町 辺津ヶ沢入口



109 大槌町 辺津ヶ沢一里塚(西塚)



110 大槌町 山神碑付近の旧道



111 大館町 鯉峠頂上付近の旧道



112 山田町 鯉峠を下りる旧道



113 山田町 萩野原一里塚付近の旧道



114 山田町 馬指野の古碑群



115 山田町 霊堂一里塚(南塚)



116 山田町 絵入道標



117 山田町 織笠川古碑群



118 山田町 龍牛和尚の遺供雙碑



119 山田町 龍昌寺の古碑群



120 山田町 釜谷洞古碑群



121 山田町 間木戸一里塚(東塚)



122 山田町 憲坂道祖神



123 山田町 奥山谷の古碑



124 山田町 田名部一里塚付近の旧道



125 山田町 新田の古碑群



126 山田町 上野の道標



127 山田町 石峠の古碑群



128 山田町 石峠一里塚(東塚)

第三節 宮古市種市町

宮古市

山田町と宮古市との浜街道の境に石神のサイノカミがある。この石神の山田町分の登り道は途中に一里塚もあり、旧道は良く残っているが、峠の頂上近くなると通る人もないので雑草が丈高く生い茂っていて、夏期は歩行も困難である。峠の頂上から、宮古市への下り道は頂上近くが良く残っているが、中腹から麓にかけては牧草地に造成されて旧道は完全に破壊されている。

峠を下りると、山麓に大判川が流れていたが、現在は水田となつて、地名にその名残りを留めている。大判川を渡ると津軽石川氾濫原の川原の中を旧道が通っていたが、現在は一帯が水田となつて旧道の名残はないが、もとこの川原の旧道沿いに茶店があつたところに民家が軒あり、それによつて旧道の位置を推定することが出来る。この川原道を通つて現在の津軽石川の堤防に出る。そこから対岸の藤畑に渡るが、その部分に旧道が僅か残っている。

藤畑への渡しの西方1kmのところの山腹に瑞雲寺と拂川館がある。瑞雲寺の境内及び参道に多くの石碑がある。藤畑へ渡ると、その北北東に駒形神社や藤畑の地名に因む藤大明神がある。藤畑の渡しから、再び津軽石川を渡つて新町に渡るまでの旧道は、現在改修舗装されてむかしの面影は全くない。

津軽石川には、むかしは現在のような兩岸の堤防もなく、相当広い川幅であつたので、平時はその一部20m位の幅で水が流れていたものであろう。その流れを渡つたところが、現在の津軽石新町南端、古い楓の木と石碑群あるところである。石碑のあるところから北に進むと新町の家並となるが、その南端近くの東側に高札場（一般に制札場と云われた）までであるが、路程記に高札場とあるので、それによつた。以下同じ）があつた。新町につづいて本町になるが、本町の方が昔の家並を残しているように見える。殊に地元の豪商盛合家があり、その屋敷の傍に高札場があつた。本町の盛合家の手前を通りが鐘形に曲つているところもあり、旧道の名残を留めている。津軽石の東側の丘陵には沼里館がある。この津

軽石本町に近い津軽石川には蛙留場があり、藩政時代から蛙が大量に水揚げされた。

本町の家並みすぎると馬越峠の坂道になるが、このところでは旧道が殆ど手が加えられず幅狭い山道として残つていられる。山道にかかつて少し行くと左手に石碑群があり、更に進むと一里塚がある。旧道が昔より掘り下げられているらしく、道の両側のノリのために塚は大平破壊されているが、まだ土盛り残つて金浜へ下りる。金浜の平坦地になると旧道は改修舗装されているが残つていて、現国道45号線と交わる。この国道と交差したところに享保二年の一字一石の経塚があつた。このところは八木沢峠を越える旧本道と海岸を通る高浜峠道との分れとなつていた。八木沢峠道について述べる。

金浜より八木沢に出る八木沢峠道は旧道をそのまま残しているように見えるが、国鉄山田線が、この旧道に沿つて通つていられる。その鉄道工事で旧道は若干変更しているのは間違なく、それに道路の幅も狭まっている。従つて峠の頂上に「サイノカミ堂」があつたと伝えられるが、その跡も失なわれていられる。八木沢峠を下りて道は山田線を横切るが、このところは、細越坂と云つて小丘陵を越えたが、現在鉄道工事によつて切通しとなつて、平坦地に削平され、道路も線路の平坦な道となつていられる。坂を越えた旧道の名残は細越坂の頂上に現存する石碑によつて知ることが出来る。

八木沢に下りた旧道は大体北西側にのびる丘陵の麓を東北方に通じている。この旧道は現在は市道として改修利用されている。八木沢部落に入ると右手に石佛の地藏尊が立っている。その地藏尊のところより左手に少し入った山腹に白山神社、また東北方の丘陵には八木沢館がある。道が八木沢川を渡るところに水神石祠があり、それより少し行つた民家のところに館崎の高札場があつた。高札場すぎた附近で、旧道は現在の道路より山際を通つていたことは、館崎の石碑群の所在で明らかである。

館崎を過ぎて道は磯鶏に向つて進むが、左手の丘陵に八木沢神社がある。

江戸時代は「栗師さま」と呼ばれていた。そこより少し行くと左手に小山田へ通ずる山道があるが、これが宮古へ行く古い道ではなかったかと考えられる。その分れから少し行くとむかし八木沢村と磯鶏村との境であったが、その境の附近に一里塚のあったことが古図に記されているが、現在道路の拡張で完全に失なわれてしまっている。この一里塚は「三閉伊道中図」「三閉伊路程記」いずれにも記入されていない。磯鶏に入った旧道は、上村の丘陵の鼻に当る高台に登るが、この附近の道路は改修整備が進み、旧道の面影は全くない。道路わきに集められた石碑群にむかしの名残をとどめている。旧道は高台より磯鶏の海岸に向って東北方に進むと、旧国道と一緒になる。

金浜の一字一石塚のあったところから、海岸に沿って、高浜峠を越えて高浜道はここで、浜街道と一緒になる。この高浜道沿いには、金浜では江山寺、稲荷神社がある。高浜峠を越えて神林の金浜の稲荷神社、飛鳥湯の熊野神社、櫻崎の砲台跡などがある。

旧道は藤原の石崎で国道45号線と重なるので、大幅に改修されて、井しの面影は全くないが、この石崎という地名が物語るように、岩が海岸に突出して、その上を旧道が通っていたが、現在は削平されて、そこにあった石碑群が一カ所にまとめられている。藤原に入ると道の左手に地藏堂があり、その向いの港湾施設に通ずる道路となつているところには藤原の処刑場があった。

旧道は閉伊川岸に出る。そこに渡船場があった。宮古橋の少し下手に出ると云われている。宮古へ渡ると藩船の船頭と御水主の屋敷のあった御水主町である。御水主町のはずれの橋ぎわに一里塚があった。橋を渡って真直ぐ北上する本町が浜街道の本道であるが、橋を渡って河沿いに行くくと代官所があり、更に鍛ヶ崎を通って、処払場で本道に合する鍛ヶ崎道である。先づ、本道について述べる。

本町を北上して、東西に通ずる横町に突当ったところに高丸場があった。

ここは左盛岡への道と右野田への道との分れであった。右に折れた旧道は常安寺の前を通り、その東側の坂道を越えて崎山に向う峠道となっている。現在は良く舗装された道となっている。峠を越えた旧道は国道45号線を横切つて、崎山に向うが、この旧道の途中に佐原住宅圃地が造成されて一部破壊されてしまったが、佐原圃地の手前と、北側の山中に旧道が良く残っている。その旧道は旧国道（現在の県道）を横切つて大沢の沢の山林の中には、県道沿いに通じている。その山林中で、鍛ヶ崎からの道と一緒になる。

鍛ヶ崎道は高橋を渡って、直ぐ右に折れ、川沿いの下町を東に進むと、左手に宮古代官所があった。現在市役所分庁舎となっている。代官所時代の土塁跡が残っている。代官所の前を通って東に進むと、宮古と久郷との間に愛宕山から突出した険しい岩場があつて、七灰りの岩といわれ、難所とされた。現在この岩場も切り崩されている。愛宕山には愛宕神社がある。岩場の坂を下りると、左手に石勝寺跡がある。藩政時代の初めに創建されたが、末期に廃寺となつた。真言宗の寺であつたが、今はその跡もない。

道は山ぎわを通過して、夏保峠を越え、上の山から鍛ヶ崎に出た。上の山の左手の丘陵には金毘羅神社と筆塚があり、右手に地藏堂がある。鍛ヶ崎は宮古の漁港で、「漁物拾分一の役所あり」（「三閉伊路程記」とあつて、漁港として人家も相当密集していた。鍛ヶ崎のはずれに熊野神社があり、その近くに暦応二年七月十五日の板碑がある。熊野神社の下を通り、心公院の前を通つて山道に入り、大沢で旧道の本道と合した。

鍛ヶ崎道と一緒になつた旧道は岩の穴前を通り、若宮八幡と不動サマの前で曲つて、沢沿いに下在家に向つている。下在家の一里塚のところまで、道は簡易舗装されているが、旧道の面影を残している。

下在家の一里塚は、「三閉伊路程記」に「塚場に一里塚のよき塚ざつ道のかたはらに有」とあるもので、江戸時代末期よりちつか残つていなかったものである。現在塚の上に石碑があり、道を隔てた向いに地藏堂がある。塚場

からの旧道は県道と国道と一部重なり、また旧道のなくなったところもあるが、国道から左に崎山部落に通ずる道となつて、旧道は良く残つている。旧崎山小学校のところで曲つて、再び旧道を横切るところで旧道は一部通行不能であるが、国道を横切つてからの旧道は、部道路も改修舗装されて良く残つているが、中ノ浜に出る山越え道となつて、旧道は通行人もなく山林の中にかくれてしまつている。旧道が中の浜の部落に下りて来た所で、谷川の岸に石垣まで築いた道になつているが、現在は通る人もなく樹木や雑草のため通行困難な状態である。

中の浜からは女遊戸峠に向つて急坂を登る旧道は峠の頂上附近に旧道の面影を残しているが全く失なわれている。女遊戸峠よりの旧道は県道とほぼ併行して通つていたが、県道の改修で失なわれている。旧道は女遊戸の地藏堂をすぎたところで、再び右手の山林中に通じているが、この道も、現在利用する人が全くないので雑木や雑草に覆われて廃道となつている。旧道はゴルフ場の入口に出て、再び山林の中に入つて行く。山林に入る手前の運動場造成地のはずれに赤宇田の一里塚が、基最近まで残つていたが、完全に破壊されてしまつた。

赤宇田の一里塚のところから山林に入つた旧道は雑草に覆われているが残存し、松月で県道に出る。その部分で、旧道は県道と重なつてはいるが、再び左手の山林の中に入り、国道45号線で一部切斷されるが石名沢へと向つて北上している。その途中で田老町との境界があるが、今は通る人もないので、はっきりした標石もない。

田老町

松月から石名沢への山林に入つた旧道は、道のわきにある一二五・〇の水俵点のところを通つて古田に出る。その水俵点のところに、元治元年の「神社佛閣拝礼塔」がある。古田に出た旧道は農道として民家の傍を通り、古田の駒止板の名所を過ぎて、一部林道となつている道を通つて旧国道に出る。

この旧国道に出た附近を「まはせ長根」と称し、一里塚があり、暮末藩主南部利剛の領内巡視の際、休憩したところと云われるが、現在一里塚の痕跡もなく、その場所は明らかでない。

「まはせ長根」を過ぎて、再び旧道より左手の山林の中に入つて栃ノ木坂を越える。峠の頂上には安政二年の道祖神をはじめ、石碑が二二ある。この道も現在通る人が殆どなく、雑草に覆われている。栃ノ木坂を下りた旧道は田老川、神田川の河口近い平出地に出る。ここでは旧国道と旧道は重なつているが、田老町内を通る道は、しばしの津波により、道路が作り変えられているので、旧道には沿つているものの、全く新しい道となつている。二閉伊道中国」によると、田老町の街道筋には中塚があり、町続きで乙部と分れていた。『路程記』には「田老ハ乙部と続町屋作にてよき村也」とある。両町の背後の山手にかけて神社・佛寺などがある。

田老町の家並をはずれると、長内川を渡るが、荒谷の石碑群の付近で、対岸の越田に渡つたものである。越田に渡ると国道45号線を横切つて、真直ぐ北上する山道が旧道である。この坂道を登りつめた、小港への分れ道に道標が立つている。「右ハこみなと、左ハきたみち」と記されている。道標の位置は若干移動しているといわれるが、少し手前の坂道を登つて丁字形になつているところにあつたものであろう。

越田の道標からは農道となつて民家の傍を通り、小港への新しい道に出て、国道45号線と重なつて北上している。新田で、旧道は再び国道45号線から左にそれて山林の中に入る。このところ僅かな間は殆んど廃道となつて全く通行出来る状態でないが、山林樹木の中にある「牛馬供養碑」が旧道の存在を物語る。この碑から北への旧道は現在も利用されて歩行可能で塚の峠近くの旧国道に出る。

塚の峠は『路程記』に「大瀬内沢橋を渡少行て大平道あり、此所を塚の峠と云う一里塚」とあるもので、ここに一里塚のあつたことを述べている。こ

の一里塚のところ、昭和初年まで茶店があったといわれ、藩主利剛の巡視の際休んだところといわれる。その位置は、○・○・○の水準点附近と考えられている。塚の峰をすぎた旧道は、再び旧国道が大きく左に迂回するところ、真高く北上して山林の中を通っている。この旧道は、現在通る人もなく、廢道となつて通行困難である。小堀内の台地に来て現国道45号線の左側に若干現在も利用されて残っているところもあるが、土地の造成で消滅しているところもある。

石畑附近で、旧道は国道45号線に沿つて通っているが、廢道となつて、石畑で国道が東の方水沢の方に迂回しているところ、旧道はほぼ真高北上して、山林の中を通っている。現在雑木林となつて、電水記念碑は旧道わきに建られたものである。その北へ進むと水沢の遺標がある。「石みつさわ左をも」とある。その道標わきの雑木林の中への道を撰侍に向つて旧道があり、一部利用されている部分もあるが大半は廢道となつて通る人もない。撰侍で国道45号線を横切つて、撰侍部落の中を通るのが旧道で、撰侍部落をすぎ、北大岳を越える山道になる。この北大岳越えの山道は「邦内郷村志」に「九折險峻峻坂升降不易」とある山道は現在利用する人もなく廢道となつているが、平坦地に降りると現在も部落の道として利用されているので、門の沢まで、一応旧道のあとをたどることが出来る。

岩泉町

岩泉町に入るところで、旧道は現国道の南側に出て、小成川をはきんで、国道にはほぼ平行して進む、その途中の道路際に石碑群がある。明治・大正期のものが殆んどある。旧道は、その石碑群のはずれで、小成川を渡り、国道45号線を横切つて、山林の中に入る山道に入つて、小本に山越えして出る。この旧道は「路程記」に小本の方からであるが、「小本村はつれ神明坂とて急なる坂あり、登り詰て妻の神有」とあるもので、現在も時々歩行者に利用されているので、良く残っている。

小本に出たところで、旧道は一部人家のために破壊、消滅しているが、八幡神社の前に出て、小本の家並の並木町筋を通つて、小本川の河岸に出た。小本川は旧国道に架つた橋の少し下手に橋があったらしが、これから対岸の中野に渡つてからの旧道は、野田道と岩泉から盛岡への道の分岐点附近まで、開田その他で消滅して全く失なわれている。

小本川について「邦内郷村志」に「以此川之蛙、為名産、然以五戸界市川産、稱三最上、小本産次之、邦内之良魚也、年々人、貢獻之一品、故商賈求而得不能一販賣、焉」とある。従つて、「三閉伊路程記」に「町入口に御献上蛙塩引御指の役所有」とある。

中野部落になつて、辻堂の手前の民家の附近からは、旧道が残っている。辻堂の傍には石碑もあり、それから少し行つた、岩泉への道と野田への道の分岐点に石碑群が、道路ぎわにある。その石碑群のうち、享和二年の「庚申塔」は横倒しになつてうが、「石ハのだ道 左ハいわ泉道」と刻まれた道標となつている。

この石碑群のある分岐点は、現在の県道より少し南側になつている。そこから、野田への旧道は県道を横切つて山坂にかかるが、この道は良く保存されている。しかしそれも現在の国道45号線を横断する前後のところまで、国道45号道を横切つて美に入つて行くと、山林の中に雑木や雑草に覆われて明らかでなくなる。現地調査員も充分踏査出来ない状態である。とにかく現国道沿いの山林が牧草地に造成されるところ、または国道になつているところもあるらしい。しかし野田畑村に入る部分からは相当良く残っている。

田野畑村

国道45号線を岩泉町大牛内から左にそれて山林の中に入つて行くと、弥生沢に架けられた弥生沢橋を渡る。古い上橋であるが、現在も歩行が可能である。これが岩泉町と田野畑村との境界である。現在通る人は殆どないが、良好に保存されている。橋を渡つて少し行くと「サイノカミ」の小石の盛り上げたところ

ろが、道の右手にある。「サイノカミ」を過ぎて、国道45号線の二〇〇mほど手前に「樺木沢の一里塚」が道の両側にある。「路程記」にも「一里塚」と記されているもので、若干崩壊されているものの良く残っている「一里塚」である。

「一里塚を過ぎたところから国道まで、旧道の両側は開墾された畑地で、道路は現在も農道として利用され、自動車の通行も可能である。旧道は樺木沢橋に通ずる国道45号線を横切つて、樺木沢の溪谷の下り口に向つて、林の中に入つて行く。現在、この溪谷の谷底に一軒の人家があるので、歩行可能であるが九十九折に屈折した道となつている。「路程記」によれば、浜岩集の方から「下り九丁程：登り五丁三拾間程」とあるもので、浜街道最大の難所であった。荷駄をのせた牛の歩行も相当困難であつたと推察される。従つて野田から岩泉を経て盛岡に出るには、藩政の中頃から、安家の元村・高須賀・江川を通る難路が開け、一般にそれを利用するようになった。「三閉伊道中図」並びに「三閉伊路程記」にもこの道路のことが記されていることによつて明らかである。

樺木沢溪谷を上つた旧道は山林の間を通つて、大戸で現国道45号線となつてゐる。国道改修の際、旧道のかたわらにあつた石碑が、か所に集められてゐるが、大戸の石碑群である。旧道をとり込んだ国道45号線は浜岩泉を過ぎて、松前沢にかかるところで、大きく左に迂回するところで、旧道は真直ぐ北上して松前沢溪谷に下りる道となる。この道も溪谷の下り口近くの平坦地は途中に畑もあつて、現在も利用されているが、畑地を過ぎて、溪谷の下り口近くになると、旧道は樹木の中にかくれて、廃道となつてゐる。雑草や樹木を切り拂えば旧道ははっきりする。その旧道の溪谷に下りる手前に「松前沢のサイノカミ」がある。小石を盛つた小さい塚が山林の中に認められる。松前沢の溪谷道について、「路程記」には「松前沢坂此坂ハ此辺にての難所也。七十程下りて松前沢橋有、……橋より六十丁計の登坂あり」とある。この谷底の橋は現在ないが、橋のあつたと見られる手前に天保七年建立の「

橋供養塔」がある。松前沢を登つた旧道は、国道45号線と接する近くに「菅窪の「一里塚」がある。現在東塚のみ残つてゐるが、一部崩壊しているが、良く保存されている方である。塚の一端に、嘉永五年の供養碑が立つてゐる。

菅窪の一里塚を過ぎての旧道は菅窪の中心地まで、ほぼ旧道に沿ひ進みながら左に、平波沢への道に入る。平波沢の平地に出る手前の山手にかかる道が二つに分れてゐるところに道標がある。これは他から持つて来たものと云われるが、この附近の十字路にあつても差支えないように思われる。この道標より少し行つて、平井賀川を渡る橋の手前に橋供養塔がある。安永の庚申塔と一緒に墓むらの中に横たおしになつてゐる。

平井賀川を渡つて、平波沢はむかし高礼場のあつた村の中心で、現在役場もあり、田野畑村の中心地である。平波沢から羅賀への旧道は良く残つてゐる。現在も利用されている。途中「路程記」や「道中図」に「早坂峠」と書いてあるキリブセ峠を越して羅賀に出るが、途中「一里塚」がある。道の左側の北塚のみ一基残つてゐる。樹木の中にかくれてゐるが、保存状態は良好である。その「一里塚」から少し行くと左手に二本の赤松の大本が生えており、その根元に「サイノカミ」の小石の盛つたところがある。

羅賀からの旧道は大宮神社の左側を通つて、山林の中に入つて行く。この旧道は現在余り通る人もないので、道一杯雑草が生い茂つてゐるが、良く残つてゐる。山林を抜け出た旧道は、明戸川の流域で、平坦地に出て旧国道と重なるが、再び机の方に向つて、山林の中に入つて北上して行く。この道は羅賀からの道より通る人もないので、雑草や樹木に覆われて、通行困難である。この旧道は机の「あみださま」近くの細狭道路に出て、その舗装道を机の保育園のところまで行く。

机の保育園の東側に残る旧道を舗装した道から分れて入つて、北山に進んで行く。この旧道は時々利用されるのか比較的良好に保存されて残つてゐる。

殊に北山の「サイノカミ」附近の旧道は民家もあり、農道として利用されている。

北山で旧国道を横切るあたりで、旧道は旧国道にほぼ併行して山林の中に旧道が通じている状態で、善代村へ入って行く。

善代村

善代に入った旧道は、田野畑村から引続いた県道として改修舗装されて北上している。黒崎小学校の北側で、「まじない場」を迂回して、小学校の前に出て、西南に県道を進み五〇〇mほど行って、北に入る道をとる。その角に一里塚があったと云われるが、水準点を一里塚としているのか真偽のほどは明らかでない。北に入った途中までは現在も利用されているが、山坂にかかるところは、現在通る人も全くなく、樹木の中にかくれてしまっている。この山坂について「路程記」は「ふさまの坂と云……此坂ハ太田名部坂よりもなを急にて拾五曲ほど有登り詰て夫より長根道也此処を和野山と云」と述べている。

山坂を下りて太田名部に出ると、大沢川を渡って太田名部の部落に出た。太田名部について、「路程記」は「平地有て、家は軒をならべていとおもしろき処也、塩かまあり塩くみあくる処のさまハ絵に似たる計」とある。

太田名部から善代へは、最近海岸沿いに有料県道が開通しているが、旧道はまた太田名部坂と云われた山越えの道をとった。この道は歩行者に現在も利用されているので、道は良好に保存されている。坂の頂上に山の神が祭られている。山坂を下りて、善代川を渡り、善代の部落に入る。「路程記」は善代より田野畑に行くのに「古ハこ、より沼袋、田の畑など本道と見えて路程記などにハしかあるれと、いつれのころよりか海岸通のみのやふなりて、沼袋道は歩行人の通ひのみ残り」とある。ここでは、海岸通りのみについて述べた。

善代の中心街は善代川を渡って、北上する旧道の手前で、左に折れところにある。そこが現国道45号線沿いの町道になって発展しているのである。旧

道は北上して、宗得寺や北ノ股神社の前を通り、山坂を越えて力持に出る。この力持に出る手前の峠を現在国道45号線はトンネルで通じているが、旧道はこのトンネルの上を越して向う側に出た。その旧道の存在を物語る、旧道の傍の石碑群がトンネルを出た国道わきの叢の中に並んで立っている。それが力持の石碑群である。

峠を越えた旧道は国道45号線を横切って、国道の東に出て部落内を通る村道となっているが、道は立派に舗装されている。力持をすぎると旧道は国道を横切って西側に出て、県道となっている道路となる。その県道は、白井部落で、国道の東側に出るなど、国道にほぼ平行するような関係で北上している。白井の道路ぎわには庚申塔もある。

県道となっている旧道も、沢向いから堀内・馬場野までの道は、昔のまま、所により、樹木の中にかくれてしまっているところもある。堀内部落の八坂神社のある峠より見渡せるところの旧道は比較的良好に保存され、現在も部落の道として利用されている。堀内は此堀内ハ到って里せハく家居ハ軒を合する計也、村中に御高札有、村はつれに天王社あり、「路程記」とある。堀内から馬場野を通過した旧道は、一部国道45号線の中に織込まれているが、野田村との境界近くなると、国道の上の丘陵に、農作業に歩行する程度の農道として残っている。その旧道は村境の亀割石の傍を通る。亀割石については、「道の右脇に亀割石とていと珍らしき石有、是より東に当りて海の中にも亀割石と云石あり、此亀割石下安家堀内との村境なり」、「路程記」とあるもので、この丘の上の亀割石から海岸にある亀割石が見通せることになっているが、夏期で樹木の葉の多い季節であったので、見通すことは出来なかった。

野田村

亀割石から少し行くと、下安家に下りる山坂になるが、現在海岸の岩壁を削って国道45号線を通したので、削り取られてなくなっている。安家川の川岸に下りた旧道は旧国道の下安家橋の少し上流に橋があつて、中洲に渡った。

その橋のあったところに橋脚が現在も残っている。中洲に渡って、中洲を少し上に進んで、対岸に渡った。前者を大橋、後者を小橋と称している。小橋は現在も渡って中洲への波り橋となつてゐる。

北岸に架つた旧道は、標高一〇〇mある丘陵の急坂を登る。この坂については「いとかしこき坂にて到つて驛所なり」、「路程記」とある急坂であるが、現在村では遊歩道として手入れをされているので、良好に保存されている。登り口に庚申塔があり、登り詰めたところに「サイノカミ」がある。センとブナの二本の神木のもとに小石を盛り上げた石積がある。一つの根本から二本の木が生えているように見えるので縁結びの神とされている。ここは現在良い展望台となつて、国民宿舎「えびし荘」の散歩地となつてゐる。

サイノカミからの旧道は新しい道の造成によつて、全く利用されなくなり、藪の中にかくれてしまつてゐる。その旧道を少し北に行くとい錢神の「里塚」がある。この「里塚」は「道中図」にも「路程記」にも記されているものであるが、現在東塚だけが残つてゐるだけであるが、比較的良好に保存されている。「里塚」からはなだらかな錢神坂を下り、国道45号線を横切つて海岸側に出る。道は雑草に覆われながらも良く残つてゐる。旧道の残つてゐるところはそれだけで、それから上川まで間は現在の国道45号線の中にとり込まれて、旧道のあとは失われてゐる。

上川へ来ると国道45号線は大きく西側に迂回しているが、旧道は西の方の正川部落を通る道に入る。旧道は上川城跡の麓を通り、上川の川岸に出て、橋を渡り、西行屋敷や上川神社のある丘陵の下から、海岸の浪打ぎわを通る道を野山の十府が通まで行つたのが旧道である。この旧道は大正のはじめ、内陸部に都道が開けるまで利用されてきたといわれるが、今では到底考えられない状態である。なお、現地調査員小田正年氏の報告で、明治七年調査の図面に上川の河口で海岸に出た図となつてゐるとの報告があつたが、「閉伊道中図」によつて、西行屋敷の下で海岸に出たとした。

海岸の浪打ぎわの道は十府が浦の綿津海神社の附近で内陸に入り、海岸の松林の中に残る旧道を通つて野山村の中心地に向う。旧道は国道45号線を横切るところから、旧国道として旧道を改修されての舗装された良い道路となつてゐる。旧国道は曲液橋を渡つて五日町（現在本町）と云われた中塚のある中心地を通り、役場前で右折して久慈の方に向う。その曲り角に天保三年の金毘羅山の石碑があつたが、現在は移動してゐる。町並の西方に出張つた丘陵上には海蔵院や愛宕神社がある。それらについて第四節を参照されたい。

久慈への道は本町の角を曲つた道を進んで、宇部川を渡ると、右に折れて少し行き、左に折れるのが旧道で、現在一般に利用されている県道の裏通りのようになつてゐる。この旧道は国道を横断して北西に進み、国鉄久慈線の一部途切れてゐるが、その前後の道は残つて、小松の辻に向つてゐる。小松の辻には庚申塔が二基あつたが、そのうちの、基は城内に移動させられてゐるが、それは遺標となつて、「右八くじ八戸 左八字べ」とある。現在二基立つてゐる庚申塔も位置が反対側になつてゐる。

小松の辻から旧道は北上するが、約二〇〇mほど行くと、道の両側に上新山と谷地中（久慈市）の一里塚が残つてゐる。この道が野田村と久慈市の境界となつてゐるので、西塚は久慈市に属し、東塚が野田村に属してゐる。東塚はほぼ完全に残つてゐるが、西塚は道路と周りが畑である関係で、相当崩れて小さくなつてゐる。

一里塚から五〇mほど行つて、左手に入る農道が久慈市との境になつてゐるが、それが旧道でド工坂に出る。農道の左手の畑の帯に土師器の甕穴住居跡がある。その坂の畑の上手に庚申塔が遺標になつてゐる石碑がある。右八みやこ道 左ハはま道」とある。この道標から少し行くと久慈市に入る。

久慈市

野田と久慈との境界附近の旧道は現在も良く利用され、自動車も通れる道

幅になっている。少し行くと谷地中の舗装された道路となるが、川原屋敷でその道路と分れて右に入る。未舗装の道路となって、山林の中に入って行く。1 kmほど行くと小袖との分岐点がある。そこに道標が立っている。文政十三年の庚申塔に「右小袖で、左八日町」とある。その左に行く山道は長内町に出るまでの途中、NHKのテレビ塔のある西側で、現在通る人もないので、雑木や雑草に覆われて通行出来なくなっているところがあるが、林道となつて通行出来る場所も相当ある。現在利用されている林道は旧道に沿っているか、若干変つているところもある。

林道となつている旧道は、下長内の「庚申塔」のあるところで県道を横切つて、北側の市役所前の道路に出るが、この付近の旧道は道路の改修もあつてはつきりしない。旧道は再び、県道を横切つて、長内川の河岸に出るが、この県道を横切つて、河岸までの旧道沿には古い家並が残っている。旧道はアレン短大付近で、長内川を渡り、柏崎の山際、熊野神社前の道を通つて、栗山公園から長福寺の前をすぎ、大神宮の前で右に折れ、また左に折れて荒町を通り、対岸の久慈中学校の東側のところを通る旧道の位置で、久慈川を渡つた。現在の上の橋の少し上流に当っている。

久慈中学敷地の東側を通つた旧道は、吉田の庚申塔のあるところで、右に折れ、東北の山際にある長泉寺の前に出る水田の中を通る道をとる。旧道は長泉寺の前から、門前―源道と山際の道で、現在も良く利用され舗装されている。その旧道は漆町の金刀比羅神社のある丘陵の端を通つて、大きく曲り、大崎に向つて、山際の道として残っているが、金刀比羅神社付近からは未舗装の道である。

大崎からは、真直ぐ北上して、夏井川を渡り、平山小学のわきを通る道をとつて、山を越え、国道45号線に合する。平山小学校の手前の丘陵の登り口に、天保三年の庚申塔がある。

国道と一緒に上つた旧道は、板橋で国道をそれて、水田の中を通っている。

それは宇津目で、再び国道と交差して、北上している。鳥谷にくると旧道は国道と重なるが、再び、国道が丘陵をきけて、大きく東に迂回するところで、真直ぐ北へ向つて山林の中の道となり、北野の高原で、また国道と重なる。北野をすぎた旧道は、侍浜の本町を通らず、手前で丘陵部を通つて高家の踏切のところを種市町となる。この間の道路は道幅も広く舗装されているが、高家の種市町に入る手前で、少し山林の中に入る山道が旧道である。

種市町

高家の久慈線の踏切を越し、高家川の橋を渡つて種市町に入ると、旧国道は丘陵を大きく左に迂回して粒米に出るが、旧道は橋を渡ると直ぐ右に折れて山林の中に入る。この道は現在通る人もなく雑草に覆われて歩行も困難な状態であるが、少し行くと左手に一里塚らしい土盛状のものが見られる地元調査員はこれを、里塚として報告しているが、塚らしい周辺を精細に調べて見ると、張り出た来た土盛状のものの鼻に当るので、塚として盛土したものと認められなかった。

この旧道が粒米で県道（旧国道）と交差するところに番所があつた。侍浜は盛岡南部領で、種市は八戸南部領で、盛岡南部領からの入口に当るので、ここに番所をおいて取締つた。番所附近は人家もあるので、旧道は現在も利用されて、良く残っている。

番所のところから北上した旧道は、国道45号線を横切つて東側に出るが、国道と県道との間の県道沿いの民家の裏を通つていたらしい。この道は現在も歩行者に利用されている狭い道である。この旧道は中野の熊野神社の近くまで行き、右に折れ、県道を横切つて、県道の東側に出て北上している。この道は最近修理されて立派な道として利用されている。その道の途中国道から分れて来る東へ向う道との交差点に「庚申塔」が建っている。

旧道は中野の小学校付近で、国道を横切り、有家川を渡るが、その附近の旧道は現在消滅している。そこから右家に入ると旧道は旧国道に改修されて

残っているが、現国道45号線とあるところで重なり、または平行して北に進んで行く。原子内のあるところで、旧国道となった旧道は、国道45号線の東側の海岸近く通る道となつて、原子内―小子内―八木―小田沢へと進んで行く。それから旧道は鹿塚まで旧国道となつて、国道45号線と一部重なり、一部平行しながら進んで行っているが、宿戸から戸類家へ出るところが、旧国道と大きくそれて、東側を迂回している。また、鹿塚のところで、旧道は旧小森街道と称するものとなつて、屈折しているが、果して、それを旧道としてよいが疑問である。

鹿塚の道標のある分岐点から、旧道は左に入ることになるが、道標には「右ハ八戸道 左ハ山道」となつていて山道をとることになる。これは種市の中心地はもと城内であるので、城内への道を主道と考へてのことであるが、浜街道と云つた場合、海岸沿いに八戸へ行く道があつたことを考へると、海岸沿いの道を主とした方が良くはないかと考へたが、現地調査員の報告によつて、城内道を述べることにした。

鹿塚の道標のところ、旧道は県道から左にそれて板橋―館野―城内を通つて、青森県階上村に行くことになるが、旧道が国道を横切るところで、国道の西側で道路側の上手のため通行出来なくなつて、道が切断しているところはそこだけで、大久保の方に旧道が残つていて板橋に通じている。板橋から城内までは、製の木―古手野沢―荒屋敷―館野―北向―城内となつて、製の木―荒屋敷は県道種市―軽米線として修理舗装されているが、一部旧道を利用しないところもあり、その部分の旧道は山林の間に樹木に覆われて、歩行も出来ない状態である。板橋―製の木間は地図に道路の記人もないが、農道として通じている現在の道路がほぼ旧道に沿うものと見なす以外ない。荒屋敷から館野を経て北向への道は、現在も部落の道として利用されている。北向から県道を横切つて城内の東側の道路となつて、北に階上村の方に進むが、城内のずれの庚申塔のところで、現在の道の左手山林に入つて

北上することになつてゐる。

第四節 街道沿いの文化財・その他

宮古市

- 1 石師のサイノカミ（石佛）高さ七五cm
- 2 藤畑への渡し場
- 3 瑞雲寺 曹洞宗。龍谷山瑞雲寺。應永年間創建と伝えられる。もと津軽石巻道にあつたが、大永二年（一五二二）に現在のところに移つた云われ。参道の人口や山門附近に供養石佛や石佛など多くある。即ち、参道には天保四巳年（六十六部供養塔）高さ三七cm、宝曆六年八月十七日「有無縁萬靈塔」高さ三六cm、明和二年八月初日「念佛供養塔」があり、境内には享保十六年のもの（高さ一四〇cm）、元文元年「縁石供養塔」高さ、六七cmなどある。その外六体の石佛がサヤ堂の中に納められており、その一体に延享元年甲子の年号が記されている。
- 4 拂川館と諏訪神社 拂川館は戦国時代に津軽石氏（東奥一戸氏）の居城であつたと云われる。主部をはじめ、一部―四部、大手口など良く保存されている。現在館跡に諏訪神社の小祠が祭られている。
- 5 駒形神社と石碑群 駒形神社は中世間伊地方の豪族間伊氏の一族赤前氏がこの地方を牧野にした頃に資前社として建てられたと伝えられる。境内に杉や楓の古木多い。参道や境内に石碑が多くある。

6 藤大明神

7 配水口と水神石祠

8 津軽石新町の渡し場と石碑群

藤畑から新町へと津軽石川の渡し場がこの石碑のところにあつたものと思われる。文化二十二年二月、念佛供養塔（高さ一八〇cm）、安政二年七月、庚申

- 中塔(高さ九八cm)、「金毘羅」(高さ一一二六cm)などである。
- 9 沼里館と判官社 土地の豪族沼里氏の居城で、館跡は良く保存されている。館の大手口に判官社が祭られている。
- 10 津軽石本町と高礼場 土地の豪商盛合家の土蔵や門の左右の石垣に、井の面影をしのぼせる。
- 11 稲荷神社と石碑(津軽石字法の脇) 高台に稲荷神社があるが、その丘陵の下に年号はないが石の地蔵尊(本体の高さ六六cm)の外、文政十一年八月の「馬頭觀世音」(高さ一九〇cm)、「西国願礼塔」(高さ一六〇cm)がある。
- 12 馬越坂の石碑 文政六年「南無阿彌陀佛」(高さ六五cm)などあり。
- 13 馬越の「里塚と石碑」
旧道が往時にくらべると二mほど掘り下げられているため、その下げられた分だけノリが掘られ、一里塚が削り取られているが、道の左右に塚の痕跡の土盛りが一部残っている。里塚のうしろに、明和元年秋の「庚申猿彦命」(高さ一九五cm)、「文政二年」(「猿口」) (高さ一五五cm)がある。
- 14 津軽石川口御ヶ崎と龍神小祠(金浜)
- 15 金浜の「一字一石碑」 浜街道から高浜部落への道との分れにあったが、現在江川寺門前に移されている。享保二年「奉書写、字一石供養塔」(高さ九五cm)とある。
- 16 江山寺 曹洞宗。神峯江山山寺。舟越氏によって慶長のはじめに創建されたと伝えられる。正徳六年七月の年号のある「念佛供養塔」の台石に薬師如来立像の石佛(本尊の高さ一一四cm)外、享保八年「三界萬」(以下地下、現高一一〇cm)、「寛政」年「西国供養」(以下地下、現高一四〇cm)などがある。
- 17 金浜の稲荷神社 藩政時代「観音堂」であった。
- 18 八木沢時のサイノカミ堂跡
- 19 細越坂の石碑「有無縁萬靈供養塔」(高さ二一〇cm)、「奉納西国三十三番願礼供養塔」(高一一五二cm)とある。
- 20 白山神社 慶長二十年春、修葺の棟札あり。明和九年の年号の石燈籠あり。
- 21 八木沢の地蔵石佛など 地蔵は本体の高さ七十八cmで、「享保四年九月中旬」の年号あり。
- 22 八木沢館と館崎八幡宮 八木沢氏の居城と云われ、本丸をはじめ、の丸・三の丸など良く保存されている。館跡の一角に館崎八幡を祭つてある。文化二年六月十三日奉獻の手洗鉢あり。
- 23 館崎の石碑群 明和九年七月「念佛供養塔」(高さ一四四cm)、「寛政六年七月」(念佛供養塔) (高さ一七五cm)、文化六年「念佛供養塔」(高さ一四〇cm)、「文政五年八月」(庚申塔) (高さ一一五cm)、「嘉永四年二月西国巡礼塔」(一四五cm)などあり。
- 24 八木沢神社(元薬師堂) 八木沢部落の古くからのお堂で、薬師堂であった。明治の神佛分離の際、八木沢神社と称した。正徳二年十月の「庚申塔」(上部欠、現高九〇cm)がある。
- 25 太田沢口の「里塚」 古い地図、古絵図によって、ここに当ると推定されるが、その痕跡は全くない。
- 26 上村の石碑群
寛政八年七月「人水萬靈塔」(高さ一〇九cm)、「文化十四年十月」(大般若經奉納供養塔) (高さ一〇六cm)、「嘉永の念佛供養碑」などあり。
- 27 樺揚館砲台跡(磯鶴町字沖)
- 28 能野神社(磯鶴町神林)
- 29 稲荷神社(磯鶴町神林) 明和九年の石燈籠、寛政十一年の手洗石などあり、近くに刻像の石佛六体(高さ六八cm)あり。文化八年七月「念佛供養塔」(高一二八cm)あり。

30 石崎の石佛群 安永二年五月「山神」(高さ七二cm)や天明六年七月「西國願札塔」(高さ一六七cm)・享永二年七月「八大龍王供養塔」(高さ一〇三cm)外に、明治と昭和の津波の記念碑がある。

31 藤原の地藏堂と刑場跡 国道45号線によって境内の一角は削られたと思われるように道路に直向しているが、正徳三年七月「庚申供養」(高さ一〇七cm)や宝暦三年三月「南無三尊萬靈」(高さ六八cm)など江戸時代の年号のあるもの多数あり。本堂は八体の石佛あり、うち一体は延享年間の年号のであり、他の七体は文政一年のものである。なお地藏堂の向いの、現在櫻浜への道路になっているところに、刑場があった。

32 閉伊川の渡し場 旧宮古橋に沿うてやや下手が渡し場になっていた。船渡しであった。

33 横山八幡宮 閉伊川畔の丘陵上にあり、藩政時代は宮古代官所が主宰して祭礼を行った由緒ある神社である。

34 高橋の一里塚 御水主町をすぎ、川を渡って本町に入る手前の橋ぎわに一里塚があった。元禄五年の「御町屋鋪表目改換」によると、御水主町橋前に「御伝馬陣敷作之尉、此の屋敷の内老里塚有、上に横の木あり。御伝馬やしき、三五郎、此屋敷の内に老里塚有、上に松木あり」(田村忠博氏報告による)とある。

35 横町の高礼場跡 本町を北上して横町に突当たったところに高礼場があった。ここが盛岡への道と田老・野田方面への道の分岐点であった。

36 常安寺 曹洞宗。富古山常安寺。慶長十六年津波で流失して、現在の地に寛永年間に建立されたと伝えられる。「邦内郷村志」によれば、もとは天台宗であったが、後に曹洞宗に改宗と云われる。境内には次の石碑がある。享保五年秋「百川衆水流納海潮」(高さ一〇九cm)・明和六年十月「庚申塔」(高さ一〇〇cm)・明和七年六月「庚申塔」(高さ七六cm)・安永九年四月「首面金剛塔」(高さ七九cm)・享和二年八月「数石供養塔」・文化四年「佛舍利

供養塔」(高さ八五cm)・文化七年二月「庚申塔」(高さ一一三cm)などがある。

37 佐原の不動さまと稲荷神社

38 宮古代官所跡 現在の市役所分庁舎のところ。

39 愛宕神社と石勝寺跡 愛宕山の丘陵上にあり、現在の参道の登り口に「石勝寺」があった。石勝寺は現地報告によれば真言宗の寺であったが、明治になって廃寺となった。この附近の旧道は七戻りの岩場と云われた険しい道であった。なお、石勝寺は「邦内郷村志」には「盛岡大勝寺末羽黒派」とあり天台宗であることをつけ加えておく。

40 鏡岩台場と網場さま 閉伊川河口に突出した鏡岩に砲台場が築かれていた。その鏡岩の先端に網場さまが祭られていた。

41 金毘羅さまと筆塚 歌ヶ崎の背後の上の山の丘陵にある。筆塚(高さ八六cm)は嘉永五年二月の年号がある。筆軸五万本の外佛句・句が刻まれている。

42 十分一役所跡(歌ヶ崎町)

漁港であった歌ヶ崎で魚獲物から税をとった役所である。

43 熊野神社と暦應の碑 歌ヶ崎町のはずれの丘陵にある。神社の境内に文化二年の「庚申塔」(高さ四五cm)・文政十年十月「中国巡礼塔」(高さ一八五cm)・天保十一年正月と嘉永二年正月の「金毘羅大権現、天照皇太神宮塔、西国巡礼」(高さ前者八五cm、後者九五cm)がある外、文化二年正月寄進された「永代燈籠」がある。

熊野神社の一の鳥居の脇を行った遊園地の奥に暦應の碑がある。山口にある文和年間の「一字石経塚」の碑と共に、この地方の古碑の一つである。

七月

(先子) 群應一 (現高さ九五cm)

上五

44 心公院(鎌ヶ崎町船の浜)

門前に明和四年の石佛(高さ六〇cm)、年号はないが、六体の石佛(高さ四七cm)の外、文久三年八月の「庚申塔」(高さ七四cm)に馬の浮彫りがある。寺に安置されている木造の聖観音像、延命地藏は宮古市の文化財に指定されている。心公院脇の道路ぎわに、文化三年一月「西国巡礼塔」(高さ、五二cm)がある。

45 浄土ヶ浜御台場跡(鎌ヶ崎町船か崎)

46 岩の穴石群 宝暦十二年十月「念佛供養塔」(高さ七〇cm)、寛政九年十月「念佛供養塔」(高さ一三五cm)、文化七年二月「庚申塔」(高さ一四五cm)、文政四年の「上拜塔」(高さ一四五cm)、二十一夜「普賢延命拜塔」(高さ九六cm)などである。

47 若宮八幡と不動さま(崎山町大沢)

48 下在家の「里塚跡」二箇位の土盛りで、里人は塚場呼んでいる。そこに享保二十年正月「奉庚申塔」(高さ五〇cm)、寛政七年「庚申塔」(高さ九七cm)、寛政十二年十月「念佛供養塔」(高さ一〇五cm)など石碑が立っている。その東側に地藏堂がある。

49 崎山の石佛 文政六年の「有縁無縁：界萬靈塔」(高さ、一五cm)外二つの石佛

50 箱石口の碑 寛政十二年の「庚申塔」(高さ七五cm)

51 崎山の地藏堂跡石群 地藏堂に石佛が八体あり、うち七体は一組で、高さ蓮台共で五〇cmある。残る一体はやや大きく、高さ本体が七、cmある。

52 崎山神社 良好コマ大あり。文化七年十月「念佛供養塔」(高さ、四〇cm)

その他明和の年号の「奉供養念佛塔」(高さ、一〇cm)

53 女遊戸跡(本文参照)

54 貴船神社(崎山町女遊戸)

55 女遊戸地藏堂と石群 天明二年の「念佛供養塔」(高さ一六五cm)、寛政九年十月「庚申塔」(高さ一〇〇cm)、文政六年十二月「庚申塔」(高さ一〇cm)などある。

56 赤字山の「里塚跡」最近グラウンド建設によって破壊されてしまった。

57 松月稲荷神社 寛政十二年三月「庚申塔」(高さ九七cm)、文化十二年「庚申塔」(高さ八六cm)がある。

田老町

1 石名沢の古碑 元治元年八月吉日「神社佛閣拜礼塔」(高さ、一五〇cm)

2 古田の駒止腰と古碑群 古田家の女おせりが、恋人を待ちわびて病死した。遺体を路傍の山櫻の根元に埋葬した。数年後恋人の若者がこの櫻の下を乗馬で通った所、馬は止まって動かさず、悲しげにいなないたので、おせりの死を知り、若者はこの地に留まって、おせりの霊をなぐさめたといわれる。そのところに享保六年十月十一日、元文五年、文政五年八月五日の年号のある庚申塔が立っている。

3 まはせ長根(御立場跡) 一里塚があったと伝えられる。

4 柳ノ木坂の古碑群 安政二年の「道祖神」、安政二年の「神社佛閣拜礼塔」などある。

5 中倉の八幡宮 文化八年の鯛口、文化十年の銅鐘がある。

6 大平の日枝神社と古碑群 宝暦十年十月十五日の「念佛供養塔」、元文六年の七月の「庚申供養塔」、文化六年九月「心経千巻・字・石塔」などある。

7 小林の竜明神社

8 常連寺 曹洞宗。清延山常連寺。享保八年宮古常安寺の七世を開祖とする。元禄十年四月八日、享保八年十月の「南無阿陀佛」などあり。

9 赤沢山館跡 空濠などあり館跡を残している。

10 荒谷の熊野神社

11 荒谷の古碑群 安政五年八月「神社佛閣拜礼塔」が最も古く、明治・大

正期の石碑が多く立っている。

12 越田の道標

右ハこみなと

左ハきたみち

13 新山の牛馬供養塔、弘化四年二月吉日の年月のある「牛馬供養塔」高さ

一五〇cmがある。

14 塚の峠の一里塚跡 『三閉伊路程記』に「此所を塚の峠と云う一里塚」と

あるもので、「道中」にも一つだけ一里塚らしい印がついている。南部利

剛の領内巡視の際、休憩した場所である。

15 小栗内の石碑群 旧国道筋と旧道筋の二か所に三基つづの石碑が立っ

ている。旧国道筋のものは他から移動して集められたものと云われる。旧国

道筋のものが古く、享和三年十一月「西国順礼塔」高さ一〇〇cm、寛政十

一年一月「庚申塔」、安政四年七月十六日「有無向縁塔」で、旧道筋のも

のは天保十五年二月「西国塔」、嘉永五年七月「牛馬塔」と大正のもの

二基である。

16 水沢の霊水記念碑 元治元年藩主利剛巡視の際、この湧水で喫茶した際、

美味と賞賛されたのを記念して、大正六年になって地元の高山氏が記念碑

を建立したものである。

17 水沢の道標 花崗岩の自然石に、中央に道祖神とあり、右に「右みつ

さわ」左に「左をもと」とある。

右みつさわ

左をもと

道祖神 (高さ一〇〇cm)

18 水沢の熊野神社、稲荷神社と石碑群 熊野神社は大正十一年創建、寛永

年間再建、稲荷神社は寛永年間建立と伝えられる。

19 撰侍の小沼神社 文明十七年創建で、寛永年間再建と伝えられる。

20 撰侍の石碑群 国道45号線を横切る手前と横切った北の方の二か所に

分られている。南の方は文化七年六月、十二日「西国順礼塔」、天保六年

十月「西国塔」、天保十二年「牛馬供養塔」、嘉永四年九月「西国塔」など

あり。北の方は文化五年七月「庚申供養塔」である。

21 門沢附近の旧道筋 北大岳越えの難路であった。

岩 泉 町

1 小成の石碑群 年月のあるものは全部明治・大正期のものである。

2 カモイカ山の遠見番所「路程記」に「南の山の上に遠見番所」とある。

3 小本の石碑群 享和五年の「庚申塔」(高さ五〇cm)外、明治・大正期の

ものである。

4 八幡神社 寛永十一年の勧請と伝えられる。

5 宗得寺 曹洞宗 生蓮山宗得寺。正保四年創建といわれる。寛延三年の

「二界萬霊塔」(高さ一三五cm)、安政二年の「庚申塔」(高さ五五cm)、安政六

年「庚申塔」(高さ五五cm)、安政九年「石壇供養塔」(高さ一五〇cm)などの

供養碑あり。

6 白山神社

7 辻堂と石碑群 昨五十五年度小本街道(岩手県文化財調査報告書第六十

六年)に「辻堂」は「辻堂」の誤り。天保五年の「庚申塔」(高さ六〇cm)

嘉永七年の「因西国狭父坂東順礼塔」(高さ二二〇cm)などある。

8 中野の道標と石碑群 野田道と岩泉道の分岐点に一群の石碑が集められ

ている。寛政十二年の「念佛供養塔」(高さ九〇cm)、享和二年の「庚申塔」

(高さ一五〇cm)、文化二年の「西国順礼塔」(高さ八〇cm)などあるが、その

中の享和二年の「庚申塔」には「石ハのだ道 左ハいり泉道」と刻まれた

道標となっている。

田野畑村

- 1 弥生沢橋 岩泉町との境界にかかる土橋である。現在のものは戦前からのものである。
- 2 横木沢のサイノカミ 小石が盛つてある。
- 3 横木沢の一里塚 若くずれてはいるが、東西の二基とも存在する。東塚(横木沢三七番地)は高さ・m、径五mほどで、西塚(南大芦八七番地)は高さ〇・八m、径五mほどである。
- 4 横木沢V字谷の道「路程記」に「松前沢・馬木沢坂など類ひ少き急なる坂有」とあるもので、浜街道最大の難所である。
- 5 横木沢橋(南大芦地内) 国道45号線に昭和四十年八月横木沢橋が完成した。延長、四〇m、幅員六m、高さ一〇・五mである。この橋の完成によって、田野畑村の交通事情は一変した。
- 6 切半弥五兵衛の墓 弘化三年の三閉伊、揆の中心人物と云われている弥五兵衛の墓。
- 7 島山神社(大芦地内) もと八坂神社といわれてた。
- 8 大芦の石碑群 道路の改修工事の際、一カ所に集められたものである。寛政元年の「庚申供養」、享和三年の「大念佛供養(現高一八〇cm)」、文政五年の「牛馬供養」などがある。
- 9 館石野塚状石群(田野畑村島越) 縄文時代のストーン・サークルの一種であろうと見られている。未だ発掘調査はされていない。
- 10 浜岩泉のサイノカミ 小石が盛つてある。
- 11 松前沢の橋供養塔、天保七丙申年四月、「奉寄進橋供養塔 卯子西大明神」(高さ二二〇cm)とある。卯子西大明神は舊代村の古い由緒ある鶴島神社の祭神である。
- 12 菅窪の「里塚(松前沢の十文字地区) 若下こわれているが、径六m、高さ二・五mの東塚のみ現存する。塚の端に北に面して、嘉永五年七月十五

日の「大念佛供養塔」が立っている。

- 13 菅窪の西国巡礼塔 元治元年七月吉日「西国巡礼塔」(台石共高さ一六〇cm)とある角柱で、右側面に「弘法大師」、左側面に「金比羅大権現」とある。
- 14 平波沢の道標 明治の年号のある供養碑にまじって、小形の道標が一つ立っている。
 名無阿みたふつ
 ひかしはまへ
 北八八戸道 みなみはみやこ
 にしはもりわか
- 15 平波沢と沼袋の中間の板橋にあつたものであるが、「力くらべ」をする石として平波沢にもつて来たものといわれている。真偽は明らかでない。
- 16 キリブセ峠の「庚申塔」が共に畦畔の斜面に倒れている。
- 17 キリブセ峠の二木松(川平二一番地) 日通り周囲三m、高さ・八mある二本の赤松の大本が並んで生えている。その松の根元にサイノカミがある。径六m、高さ二mくらいと報告されている。
- 18 あみださま「文政七甲申大二月廿六日庚申塔」(高さ一〇〇cm)と平塚の石碑一つあり、土地の人は「あみださま」と呼んでいる。
- 19 大宮神社 北島顯家の女宮姫が、顯家戦死後難をのがれてここに住み、父母のために、祠を建てたのがはじまりと伝えられる。
- 20 若宮神社(机地内)
- 21 北山のサイノカミ

- 22 山王神社 こんげん(獅子頭)が奉納されている。
- 23 北山崎のシロシヤクナゲ 県指定文化財
- 普代村
- 黒崎のサイノカミ
 - まじない場 南北朝の頃、祖先供養、戦没者供養のため経塚が建てられたところと伝えられる。享和三年七月、〇日の西国願札塔、安政七年甲子一月一日の「金毘羅大権現供養塔」、高さ六・一cm」と年号がない地蔵の石佛(高さ六・九cm)がある。くぬ木の大木二本を中心に木立のある一区域がまじない場として保存されている。
 - 仏閣神社拝礼塔(高さ八五cm)
 - 合祀社 万延元年の「庚申塔」(高さ八〇cm)などあり。
 - 山の神(高さ六、cm)
 - 妙相寺 曹洞宗、汎善山妙相寺宮古中千徳善勝寺の本寺、嘉吉元年創建と伝えられる。境内に文化八年の「有無両様」(界萬霊)、高さ一七五cm、嘉永二年「奉納建山門」、高さ九四cm)の碑などあり。
 - 北ノ殿神社
 - 力持の石碑群 安政二年の「秋葉大権現」(高さ、五、cm)、安政三年の「鹿島大明神」(高さ、〇七cm)、同年「春日大明神」(高さ、五、cm)、嘉永六年「黒森神社」(高さ五六cm)、文久元年「金花山」(高さ、一一〇cm)などあり。
 - 白井の庚申塔(高さ九二cm) 文政元年のもの。
 - 八坂神社
 - 堀内の西国願札塔(高さ、一一〇cm) 天保二年のものである。その外年ははないが、月山の碑と地蔵の石佛(高さ、〇〇cm)が、錯ちてある。
 - 亀淵岩 普代村と野田村の境で、下閉伊郡と九戸郡の境でもある。
- 野田村
- 西行屋敷と玉川神社 文治二年、西行が訪れたところと伝えられる名所
 - 西行屋敷下の念佛供養塔 文政五年十月のもの。下半部は上に埋まっている。現高八〇cmである。
 - 石角の念佛供養塔 享和元年七月十六日の「念佛供養塔」(高さ一二五cm)で、ここに明治初年玉川小学校があった。
 - 玉川の川口岩塊 玉川の玉石とて、高さ三丈計なる白石に黒き七処々に出たる岩ほの上に玉川明神有(「路程記」とあるが、現在自然に風化して次第に崩れて小さくなって、明神もなくなっている。
 - 西行屋敷下の念佛供養塔 文政五年十月のもの。下半部は上に埋まっている。現高八〇cmである。
 - 下安家の大橋跡 「橋を渡り中洲を行き、安家川の橋なから三拾間渡り登る処を下安家坂と云(「路程記」とあるもので、中洲をはきんで西方に橋がかかっていた。南の大橋の跡には現在も河の中に橋脚が残っている。
 - 下安家の諸神社 安家川の北岸、丘陵と川との間の狭く長い平地に建ちならぶ下安家の部落に次の諸神がまつられている。おえへさま、やまの神さま、本宮大明神、金毘羅神社、天神様などである。
 - 下安家坂と庚申塔、下安家に南から下りる坂も、北へ登る坂も、路程記には下安家坂と云っている。坂を上った途中に嘉永元年六月十八日「庚申塔」(高さ、一〇cm)がある。
 - 下安家のサイノカミ、セン(根元の周り二m)とブナ(根元周り二m)の二本の神木の下に小石を積みあげた塚となっている。なお二本の神木は縁結びの神とされている。
 - 銭神の・里塚 東塚のみ現存する。径六mの円形で、高さ、m(低い方からは、m)で、良好に保存されている。
 - 玉川城跡と頰公園 玉川城跡は東西南の半分と北側が断崖となった、海に臨む要害の地である。東西、五〇m・南北、一〇〇m位の広さがある。その一角、海岸の臨む部分が公園となっている。公園の中に館稲荷神社の小祠がある。

で、小高い台地の上に平らなところがある。その一角に玉川神社が祭られている。

11 海岸通りの現況(野田字米田浜)

玉川の西行塚敷の下から、十府ヶ浦(現在の綿津海神社の北側)までの海岸が道路として利用された。大正期の都制の頃、内陸部にはじめて郡道が郡内の村役場を結ぶ道路として開通するまで利用された。

12 元地の綿津海神社(野田字米田浜)

13 曲渡橋 西行法師の歌詞に關係した地名で、轟橋と共に知られている。轟橋は今はない。

14 五日町

文化三年に五日市を開設したことより、五日町と称せられるようになった。「道中図」によると通りに中塚があった。現在は本町と云われている。

15 五日町金毘羅山の碑(高さ一五五cm)

五日町の曲り角にあったが現在移動している。天保二年二月十日。

16 愛宕神社

海蔵院の守護神であったが、明治の神佛分離で、海蔵院から分離し、愛宕神社と称するようになった。見晴しのよい高台に位置する。

17 海蔵院

曹洞宗。無量山海蔵院。文治二年中国から渡来した瑞光国師によって開山、證空国師によって開基された臨濟宗の寺であったが、寛永年間野田領主野田則武によって、曹洞宗に改められたと伝えられる。境内に文政四年七月十六日に建立した六地藏石佛(高さ六一cm)、の外、明和六年(順礼供養塔(高さ七三cm)、明和年間の? 笠雲塔(高さ一八〇cm) 宝曆八年二月吉日前川善兵衛寄進の不動明土像(高さ六六cm)、薬師像(高さ六一cm)の石佛がある。そのほか参道には、文化十二年十一月二十一日「庚申塔(高さ一〇cm)、安政三年八月吉日「石垣供養塔(高さ一八〇cm)、文化五年十一月二十九日「首金剛尊(高さ一三〇cm)などがある。

18 領主野田氏の墓碑群と海蔵院歴代和尚の墓碑

19 小松の辻の道標と庚申供養塔(三間伊路程記、「三間伊道中図」共に「小町屋」として、宇部より来たる道と八戸久慈道と行達て城内へ行道なり)また「此所ハ久喜小袖より来たる道と八戸の久慈よりの道と三方行達て城内の方へ行道なり」とある。現地調査員の報告に「小松の辻」がこれに当たると思われるが、現地の報告によって小松の辻とした。道標は現在、野田の城内愛宕神社近くの辻に移動しているが、もとはここにあった。今は、寛政十一年九月十五日の「庚申供養塔(高さ八五cm)が一基立っている。位置は反対側になっている。

道標は

明和四年八月

とある側面は

庚申供養塔

右ハ八戸

左ハ宇部

とある。

20 上新山の一里塚(野田三、地割六番地上新山)

宇部谷地中) 道路をはさんで、東・西の両方に残っている。西塚は久慈市分で宇部町谷地中である。西塚は道路の拡張と、畑の耕作によって若干崩れているが、南北、〇・七m、東西六m高さ一・九mである。東塚はほぼ完全で、径一〇m、高さが、mほどある。

21 ミエ坂の道標(野田、中新山)

分岐点に当る畑の土手の斜面に倒れている。立てると奥垣がある云うので、そのままにしてあるとのことである。文政十一年七月十五日「庚申塔(高さ二二七cm)に「右ハみやこ道 左ハはま道」と刻まれている。

22 毘沙門天

文化元年(歳七月元日) 施主甚助の棟札がある。

23 軒上りの駒形神社(野田字野里)

境内に神木のオコシの太木(根回り五六〇cm)、とケヤキの太木(根回り

四〇〇cm)がある。

久慈市

- 1 大日如來神社(宇部町谷地中)
- 2 川原尾敷の遺標

文政十二年

石 小そで

庚申塔

宇部立仙(高さ六七cm)

左 八日町

三月廿日

平 正行

- 3 下長内の庚申塔(高さ八八cm) 文政六年の年号がある。
- 4 諏訪神社(長内町諏訪下) 寛保二年の手洗鉢、天保四年唐獅子、天保十一年七月廿五日の御神燈などあり。享保二年に勧請と伝えられる。
- 5 稲荷神社(長内町下長内) 享保十五年社殿造営の棟札あり。
- 6 上長内の宝篋院塔(長内町上長内) 高さ七・cm
- 7 蛭子神社(長内町上長内) 寛永二年の創建と伝えられる。
- 8 熊野神社(柏崎町) 喜永四年の御神燈、弘化四年の「庚申塔」(高さ七七cm)あり。
- 9 巽山稲荷神社(中町) 正徳元年創建と伝えられる。巽山公園の中に鎮座する。
- 10 長福寺(中町) 曹洞宗。松寿山長福寺。寛永六年創建。
- 11 大神宮(八日町) 寛永二年創建と伝えられる。
- 12 高館(荒町下大川目)
- 13 寺里の道標(寺里町) 浜街道沿いのものではないが、庚申塔(高さ六八cm)が道標になっている。弘化二年のもの、右八日町「左みなと」とある。
- 14 天満天神社(久慈市三五地割八番地) 天正十二年創建と伝えられる。
- 15 吉田の庚申塔(高さ七七cm) 表面がいたんで文字不明なところあり

- 16 長泉寺(門前町) 曹洞宗。銀岳山長泉寺。寛永六年開基といわれるが、境内にある大銀杏は、根元幹圍一・五m、日通幹圍一四・五mで、わが国最大の大木である。樹齡約一〇〇年と云われながら、今なお樹勢は旺盛で、枝張り東西二四m、南北二五mである。境内には文化二年の「庚申塔」(高さ六〇cm)、文政五年の「庚申塔」(高さ七七cm)がある。

17 新城館(湊町源道)

- 18 金刀比羅神社(湊町) 享保二年創建と云われる。天保二年の唐獅子。天保十二年の御神燈あり。

19 平山の庚申塔(夏井町平山) 天保三年の年号あり。(高さ六〇cm)

- 20 若宮八幡宮(夏井町閉伊口) もと毘沙門天であったのが、明治維新の際、若宮八幡と合せて若宮八幡宮と称すようになった。

21 閉伊口館(夏井町閉伊口)

- 22 胸形神社と宝篋院塔(夏井町馬谷) 境内に安政二年の庚申塔と喜永五年の金比羅大権現の碑あり。少し離れて宝篋院塔(高さ八〇cm)あり。

23 鳥谷館(夏井町鳥谷) 鳥谷大炊の居城

- 24 休み場(高とう) (夏井町鳥谷) 通行人の休み場があったと伝えられる。

25 北野牧場跡(侍浜町) 南部藩の九牧の一つと云われている。

- 26 本町の庚申塔(侍浜町本町) 喜永元年の庚申塔(高さ一四五cm)あり。

27 北侍浜の八幡宮(侍浜町北侍浜) 境内に大杉あり。

種市町

- 1 白滝神社(中野字粒米) 高家川の川口近くに大滝のある景勝の地で、そこに神社が祭られている。

2 御番所跡

3 熊野神社

4 中野の庚申塔(中野字北区) 高さ六〇cm

- 5 御陳屋跡(有家) 寛政五年に建てられた陣屋跡と云われる。海岸の松林

の中に、当時造られたと思われる土器や土盛が残っている。

- 6 黒板の庚申塔 天保十二年九月九日「庚申塔」(高さ一六〇cm)
- 7 有家神社(有家)
- 8 有家の庚申塔 文化十五年三月□二日「庚申塔」(高さ六〇cm)
- 9 堀釜神社(小子内)
- 10 天摩神社(小子内)
- 11 金山神社(八木)
- 12 沼戸海岸の石碑
- 13 宿戸の石碑 天保十亥年七月二日「庚申塔」(高さ・八〇cm)
- 14 秋葉神社(戸類家) 寛政十二天五月七日「庚申供養・地藏菩薩」(高さ一二〇cm)あり。
- 15 玉川の大榎 根元圓一〇mの大木で、その榎の下に庚申塔がある。
鹿糠の道標
高さ四歳 右ハ、八ノ道
庚申塔
廿二夜 左ハ、山道 (高さ一二〇m)
年亥十月吉日
- 16 板橋の庚申塔(高さ五八cm)年号なし
- 17 ジャクトリの一里塚(城内) 道路をはさんで両側にあつたと云われるが、城内に向つて右側のものは開田のため破壊されてしまった。左側のものも道路拡張のため半分ほど削りとられてゐる。高さ一・五m位、径一〇m位である。
- 18 種市城跡 城内の館跡で、山城である。丘陵台地を穴澤を周らしてある。
- 19 東長寺 寛永七年の創建と伝えられる。天明・天保飢饉の餓死者の記録などある。
- 20 熊野神社 この地の豪族竹林氏の氏神であつたと伝えられるが、現在東

長寺が管理している。

- 21 八幡宮 享保十七年勧請したものと伝えられる。
- 22 山種市街道の庚申塔(高さ六三cm) 文政元年の年号が刻まれている。



1 宮古市 石時のサイノカミ



2 宮古市 石時の旧蓮



3 宮古市 瑞雲寺の参道



4 宮古市 瑞雲寺門前の石仏



5 宮古市 藤大明神



6 宮古市 駒形神社



7 宮古市 津軽石新町の渡し場の石碑群



8 宮古市 津軽石新町の家並(自動車の向うが高札場跡)



9 宮古市 沼里館遺景



10 宮古市 盛合家の門横 石垣と土蔵(商店のところが高札場跡)



11 宮古市 馬越峠への登り口(石垣に沿って登る)



12 宮古市 馬越の一里塚と旧道



13 宮古市 金浜の一字一石経塚の碑(江山寺境内)



14 宮古市 金浜の分岐点の現状(左の方が八木沢道)



15 宮古市 江山寺本堂前の石仏



16 宮古市 八木沢峠サイノカミ付近の旧道



17 宮古市 八木沢の石仏



18 宮古市 八木沢の石仏付近の旧道



19 宮古市 八木沢神社



21 宮古市 神林の稲荷神社の石仏



20 宮古市 太田沢口の一里塚付近の旧道



22 宮古市 藤原の地蔵堂



23 宮古市 横山八幡宮本殿



24 宮古市 御水主町の現状



25 宮古市 横町の高札場より常安寺への道



26 宮古市 常安寺山門



27 宮古市 常安寺裏の峠道



28 宮古市 佐原団地より下りて来た旧道



29 宮古市 再び大沢の谷間に下りて行く旧道



30 宮古市 宮古代官所跡(市役所分庁舎)



31 宮古市 筆塚



32 宮古市 履応の碑



33 宮古市 岩の穴の石碑群と旧道



34 宮古市 下在家(塚場)の一里塚



35 宮古市 崎山部落への旧道



36 宮古市 籍石口の石碑と付近の旧道



37 宮古市 崎山の地震堂跡の石碑群



38 宮古市 中の浜の谷川沿いの旧道に
埋まれた石垣



39 宮古市 女遊戸神の旧道



40 宮古市 女遊戸地震堂の石碑群



41 宮古市 赤宇田の一里塚
(昭和50年6月撮影)



42 宮古市 一里塚跡を過って県道へ出る旧道



43 田老町 石名沢の石碑



44 田老町 古田の旧道



45 田老町 駒止塚と石碑群



46 田老町 橋ノ木坂からの出口



47 田老町 神田川橋よりの田老町



48 田老町 日枝神社参道入口



49 田老町 常蓮寺の石碑群



50 田老町 越田の山道への入口



51 田老町 越田の道標のある付近
(旧道は人家の間の裏のところ)



52 田老町 越田の道標



53 田老町 新田の牛馬供養碑



54 田老町 牛馬供養碑を
すぎたところの旧道



55 田老町 新田の旧道が旧国道に出るところ



56 田老町 塚の峠の一里塚のあったと思われる付近



57 田老町 塚の峠より山林の中に入る旧道



58 田老町 小堀内の石碑群



59 田老町 小堀内の石碑のところの旧道



60 田老町 水沢の道標



61 田老町 水沢の熊野神社



62 田老町 摂侍の小沼神社



63 田老町 摂侍に下りて来た旧道



65 田老町 国道を横切る旧道



64 田老町 摂侍部落内の旧道



66 田老町 摺待より北大岳への登り口(旧道)



67 田老町 門の次に出て来た旧道



68 岩泉町 小成の石碑群と旧道



69 岩泉町 小成峠への入口(旧道)



71 岩泉町 小本の八幡神社



70 岩泉町 小成峠を越えて小本に下りて来たところ



72 岩泉町 小本の家並



73 岩泉町 小本の石碑群



74 岩泉町 宗徳寺



75 岩泉町 中野の辻堂付近の旧道



76 岩泉町 中野の石碑群



77 岩泉町 中野の道標の庚申塔



78 岩泉町 中野よりの登り口(旧道)



79 岩泉町 国道を横切っての旧道



80 岩泉町 大牛内より田野畑への旧道入口



81 田野畑村 横木沢サイノカミ付近の旧道



82 田野畑村 横木沢一里塚之旧道



83 田野畑村 横木沢の一里塚



84 田野畑村 横木沢付近の旧道



86 田野畑村 現在の横木沢橋



88 田野畑村 国道より松前沢への旧道入口



85 田野畑村 横木沢谷産の旧道



87 田野畑村 切牛・弥五兵衛の墓



89 田野畑村 松前沢の谷道(旧道)



90 田野畑村 松前沢の機供養塔



91 田野畑村 釜石野環状列石群



92 田野畑村 菅窪の一里塚と旧道(右の方)



93 田野畑村 平波沢の道標のある分れ



94 田野畑村 平波沢の道標



95 田野畑村 平波沢の機供養塔と庚申塔



96 田野畑村 キリブセ崎の一里峠



97 田野畑村 キリブセ峠の二本松



99 田野畑村 明戸への旧道出口



101 田野畑村 あみださま付近に出る旧道



103 田野畑村 北山サイノカミ付近の旧道



98 田野畑村 大宮神社とそのわきの旧道



100 田野畑村 明戸で再び山林に入る旧道



102 田野畑村 保青園わきからの旧道



104 田野畑村 北山の旧道の出口



105 田野畑村 北山崎のシロバナシャクナゲ



106 菅代村 黒崎のサイノカミ



107 菅代村 まじない場の地藏尊



108 菅代村 黒崎より太田名部へ入る旧道



109 菅代村 太田名部への旧道出口



110 菅代村 太田名部峠への旧道入口



111 菅代村 太田名部峠の山の神



112 普代村 太田名郡峠より普代への出口



113 普代村 普代の家並(旧道沿)



114 普代村 妙相寺



115 普代村 力持の石碑群



116 普代村 力持部落内の旧道



117 普代村 白井の庚申塔



118 普代村 白井の庚申塔付近の旧道



119 普代村 沢向での旧道



120 普代村 八坂神社のところへ登ってくる旧道(堀内)



121 普代村 堀内部落内の旧道



122 普代村 亀割石へ行く旧道



123 普代村 亀割石



124 普代村 亀割石(海岸のもの)



126 野田村 下安家大橋跡



125 野田村 下安家サイノカミより見た
対岸下安家坂の断崖



127 野田村 下安家坂の旧道
(遊歩道として手入されている)



128 野田村 下安家のサインノカミ



129 野田村 鉄神の一里塚



130 野田村 鉄神一里塚と旧道



131 野田村 鉄神坂より国道への出口



132 野田村 野田玉川の旧道



133 野田村 石角の念仏供養塔と玉川学校発祥の碑



134 野田村 玉川川口の岩塊



135 野田村 西行屋敷跡



136 野田村 海岸海道の現況



137 野田村 元地の綿津海神社



138 野田村 十府が浦の松林の中の旧道



139 野田村 五日町(現本町)の家並



140 野田村 愛宕神社



141 野田村 海蔵院



142 野田村 海蔵院の六地藏



143 野田村 海蔵院の不動明像と薬師像



144 野田村 宇部川を渡っての旧道



145 野田村 小松の辻から城内の方を見た旧道



146 野田村 小松の辻の道標(現在は城内にあり)



147 久慈市 谷地中の一里塚と旧道



148 野田村 上新山の一里塚



149 野田村 中新山の旧道



150 野田村 丁ノ坂の道標



151 野田村 駆け上がりの駒形神社



152 久慈市 谷地中の大日如来神社



154 久慈市 川原屋敷の道標



156 久慈市 下長内に入る付近の旧道



158 久慈市 長内町の諏訪神社



153 久慈市 川原屋敷の旧道



155 久慈市 川原屋敷の旧道



157 久慈市 下長内の庚申塔



159 久慈市 長内町の稲荷神社



160 久慈市 長内町の旧道と家並



161 久慈市 上長内の宝慶院塔



162 久慈市 長内町の姫子神社



163 久慈市 柏崎町の熊野神社



164 久慈市 箕山付近の旧道



165 久慈市 箕山の稲荷神社



166 久慈市 長福寺



167 久慈市 八日町の大神宮



168 久慈市 久慈川を渡ったところの旧道



169 久慈市 寺里の道標



170 久慈市 吉田の庚申塔付近の旧道



172 久慈市 長泉寺付近の旧道



174 久慈市 金刀比羅神社



171 久慈市 長泉寺



173 久慈市 源運付近の旧道



175 久慈市 金刀比羅神社付近の旧道



176 久慈市 大崎部落への旧道



177 久慈市 平山の庚申塔付近の旧道



178 久慈市 板橋付近の旧道



179 久慈市 宇津目から鳥谷への旧道



180 久慈市 旧道の鳥谷への出口



181 久慈市 北野付近の旧道



183 久慈市 高家の種市町との境付近



182 久慈市 高家の山林の中の旧道



184 種市町 高家より粒来への旧道



185 種市町 粒来の番所付近の旧道



186 種市町 粒来の番所跡



187 種市町 中野熊野神社への旧道



188 種市町 中野の熊野神社



189 種市町 中野の庚申塔



190 種市町 中野の庚申塔付近の旧道



191 種市町 原子内部落の旧道



192 種市町 八木の旧道



193 種市町 宿戸の庚申塔付近の旧道(左)



194 種市町 戸須家の秋葉神社



195 種市町 種市町玉川の大樹



196 種市町 大櫓付近の旧道



197 種市町 鹿の道標



198 種市町 道標付近の旧道(左)



199 種市町 鹿野より旧道が国道と交差するところ



200 種市町 大久保の旧道



201 種市町 板橋の旧道



202 種市町 梨の木-荒屋敷内の旧道



203 種市町 じゃくどりの一里塚



204 種市町 一里塚より北向に向う旧道



205 種市町 北向部落内の旧道



206 種市町 城内に出て来た旧道



207 種市町 城内より山林の中に入る旧道



208 種市町 県境に向う旧道



209 種市町 県境の塚



210 種市町 種市城跡

第三章 街道筋の文化財公開施設・その他

一、陸前高田市立博物館

所在地 陸前高田市高田町字鈔畑

規模 鉄筋コンクリート造、階建

貝類の標本約六〇〇点をはじめとする自然系資料のほかに、海岸遺跡特有の漁具や中沢浜貝塚などから出土した考古資料約二〇〇点、有形民俗資料約一八〇〇点を収蔵展示している。

二、大船渡市立博物館

所在地 大船渡市大船渡町笹崎

規模 木造、階建

大船渡市域に関する人文・自然系の総合博物館であり、とくに、大船渡市周辺の古生代・中世代などの化石約八〇〇点、大洞貝塚（県史跡）・蛸の浦貝塚（国史跡）などの出土品を含む縄文前期から後期にかけての考古資料約一万二〇〇〇点、動植物標本約二八〇〇点を保管。ほかに市域の近世文書を若干収蔵している。

なお、同博物館は現在のところ旧大船渡町役場庁舎を使用しているが、市制施行三〇年を記念して、碁石海岸に新築開館が進められている。

三、大船渡市文化財収蔵庫

所在地 大船渡市大船渡町字赤沢

規模 鉄筋コンクリート造、平屋建

国・県・市など指定の丸太舟をはじめ、縄文土器や古文書などを収蔵している。

四、田野畑村歴史民俗資料館

所在地 田野畑村平波沢

規模 プレハブ 一五五㎡

山村の民具を中心に蒐集につとめている。

五、野田村歴史民俗資料館

所在地 野田村城内

規模 村立の総合文化センターの中に、室を設けている。

山村の民具をはじめ、村内出土の縄文式土器や土師器など蒐集陳列している。

六、種市町歴史民俗資料館

所在地 種市町城内

規模 コンクリート・ブロック建 四室 三四七㎡

昭和五十五年四月、もと城内中学校の校舎としてつかったもので、五十五年四月から歴史民俗資料館としてつかうことにしたが現在、資料蒐集中で殆ど集まっていない。

第四章 むすび

岩手県の内陸部の北上川流域から奥中山の峠を越えて馬淵川流域へ通ずる幹線道路奥州道中（奥州街道）に対して、海岸部を南北に通ずる浜街道は若手県を南北につなぐ二大幹線道路である。従って、明治のはじめに、岩手県が出現した段階で、この二つが二大幹線道路として、国道となつてその改修整備が考えられた。

しかし、浜街道の通る三陸の海岸線は、南部はリアス海岸線で出入が多い複雑な海岸線であり、北部は隆起海岸線で海岸は百メートルの高い断崖を形成し、その台地を東に流れる河川が深い峡谷を形成している。そこを通ずる南北の道路は河川の流域に沿つて通ずる平坦な道路と違つて、山あり谷ある難路で、車の通行は勿論、馬の歩行も困難で、漸く牛が利用される程度で、それも冬期雪のある時は通行困難な状態で、道路自体も不完全なものであつたから、間もなく国道から外され、県道に格下げされたが、その県道からも外された。その後再び県道となり、戦後の国土開発が叫ばれるに伴つて、昭和二十八年に再び国道となつて、その整備が行なわれ、一部自動車の通行が可能なる工事が進められた。最近土木技術の発達により国道四十五号線として整備が行なわれ完全舗装道路として、南北に通ずる道路として完成した。

このような新しい道路の開通に伴つて、昔の人間の歩行を主とした道路は一部新しい道路にとり込まれたところもあるが、殆んど忘れ去られ、一部農道などや、林業用の道路として利用されているところは兎も角、大半は雑草に覆われた廃道となつているところが殊に北部に多い。それらの道は現在踏査することは困難な状況にある。

今度の調査で気が付いたことは、南部では一里塚の残るものが比較的多かつたが、北部には少なかつた。即ち、次の表の通りである。

1 佐野一里塚（陸前高田市米崎字佐野）	左側一基
2 丸森一里塚（大船渡町丸森）	二基
3 河内一里塚（三陸町越喜米字小出）	二基
4 平根一里塚（三陸町吉浜字平根）	二基
5 白木沢一里塚（三陸町白木沢）	右側一基
6 鍛台一里塚（三陸町鍛台）	二基
7 辺津ヶ沢一里塚（大槌町辺津ヶ沢）	二基
8 萩野原一里塚（山田町織笠萩野原）	二基
9 霊堂一里塚（山田町織笠霊堂）	二基
10 間木戸一里塚（山田町山田一地割）（西側は半分だけ）	二基
11 田名部一里塚（山田町豊間根田名部）	二基
12 石峠一里塚（山田町石峠字一地割）	二基
13 馬越峠一里塚（宮古市津軽石字馬越）	二基の痕跡
14 下在家の一里塚（宮古市崎山字下在家）	一基
15 横木沢の一里塚（田野畑村横木沢）	二基
16 菅窪の一里塚（田野畑村松前沢）	一基
17 キリブセ峠の一里塚（田野畑村川平）	一基
18 銭神の一里塚（日野畑村大字玉川字銭神）	一基
20 新山（谷地中）の一里塚（野田村・久慈市）	二基

宮古市から北では二基そろつているのは二カ所だけで、その上一里塚であつたと伝えられる所も少ない。このように一里塚がなくなつていゝのは、道路の拡幅修理や耕地によつて破壊されているところもあろうが、開発のおくれている北部で、領内の惣領絵図に一里塚が記入されているが、その痕跡さえもないというのは、果して旧道と伝えられるところが、江戸時代の正式の浜街道であつたのかどうか疑問さえもたれる。現在のところ、その精細を現

地に当って調査する時間もないので、一応現地調査員の報告によったが、今後また旧浜街道は調査検討する必要があると考えられる。なお大正末の一里塚の調査の際に下閉伊郡は報告されていない。

この浜街道に沿う村落は、海岸の狭い平地にかじりついて形成されているので、一たび地震などによる津波の被害は大きく、その惨状が伝えられている。特に明治二十九年と昭和八年の津波の被害は新しいことで、人々の記憶に残っている。それを物語る記念碑は各村落に建設されている。津波記念碑の中で、宮古市常安寺にある享保五年（一七二〇）の「百川兼水流納海潮」は津波の記念碑と見られ興味のあるものである。

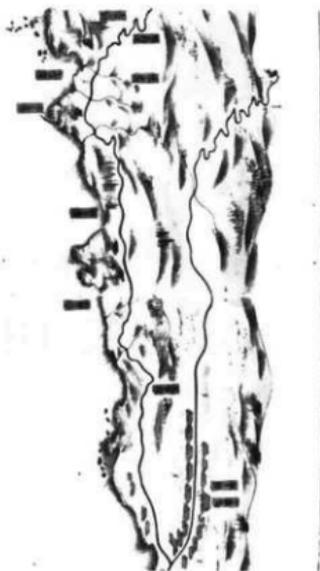
以上、浜街道の報告は終るが、専門調査員の調査は短い日時であつて、主として現地調査員の調査の内容によつて、左右されるところが多く、調査に当つては雑草の生い茂つた藪などの多いところも多く、一年中を調査期間として、良い時期に、充分現地調査を行う必要があることが痛感された。一応與えられた期日の間に現地調査員の報告をもとに現状を報告した。

三 閉 伊 道 中 図 抄

(盛岡市中央公民館所蔵)

(種市→釜石に編集を変えている)

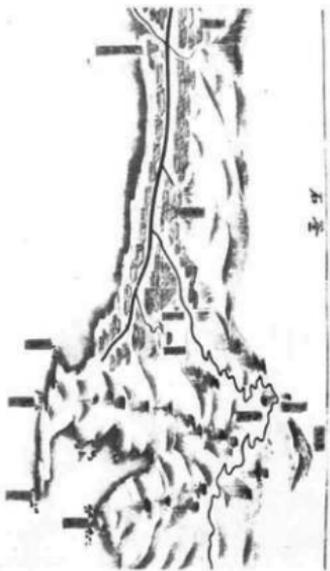
幕末文化文政頃の作と考えられ、三巻もののうち
二巻の63図のうちから36図を抜粋した。



1 桜江市 平田の集所



2 桜江市 瀬野への分れ瀬



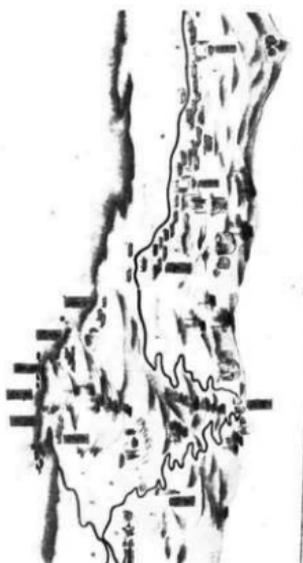
3 桜江市 桜江市街



4 桜江市 岡石附近

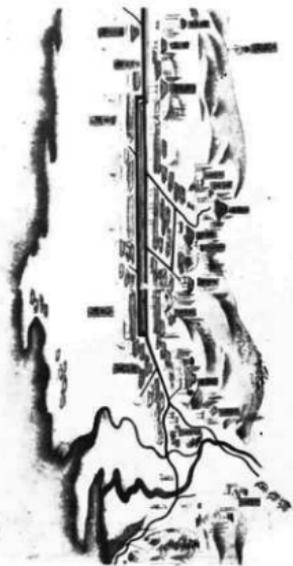


5 釜石市 鶴住郡附近



6 大館町 片摩—古瀬原—大館

町地大



7 大館町 大館町の中心(山の真中に中塚あり)

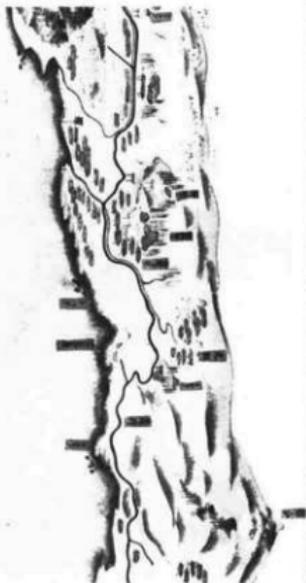


8 大館町 大館と吉里吉里の境

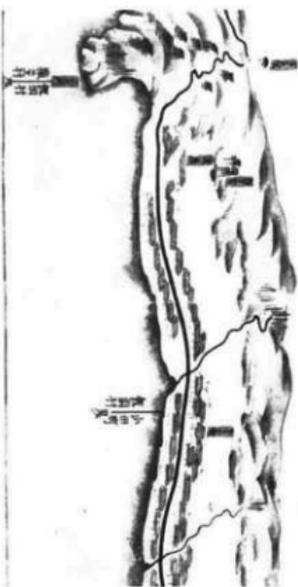
11 山田町 船室附近



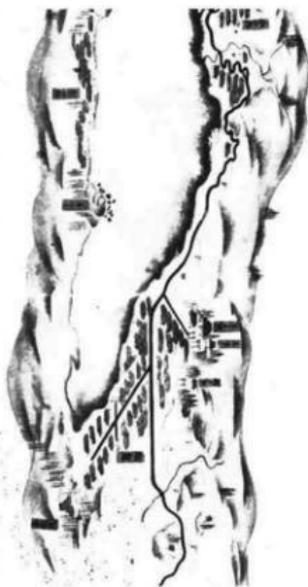
9 大槌町 吉里吉里附近

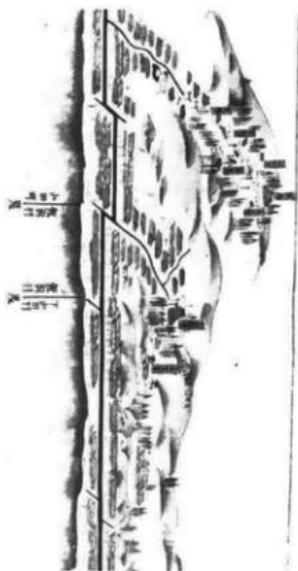


12 山田町 船岡附近



10 山田町 船越附近





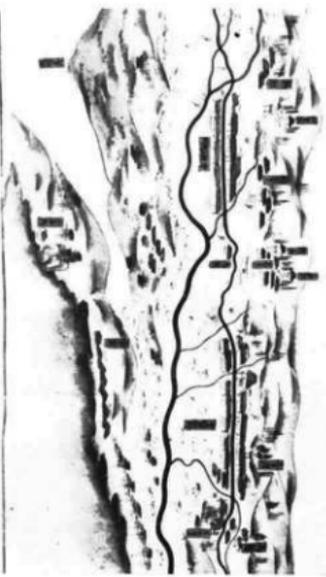
13 山田町 山田町の中心



14 山田町 ナノの本陣附近



15 宮古市 石峰附近



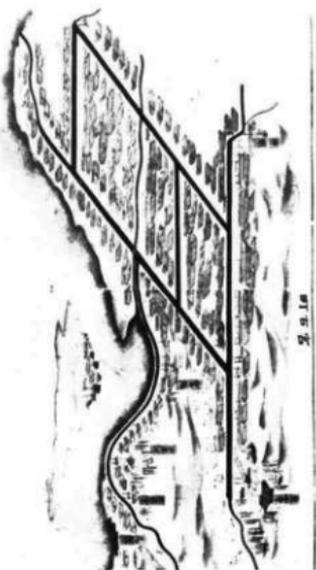
16 宮古市 津軽石町附近



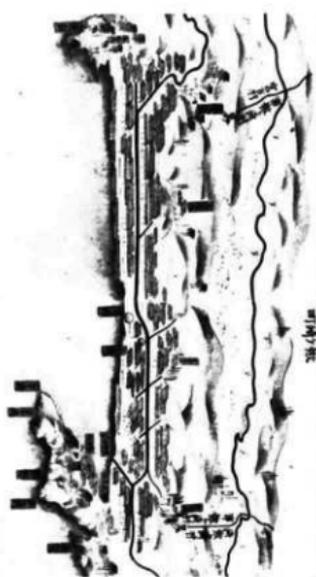
17 宮古市 馬坂峠から金床へ



18 宮古市 磯崎から黒原へ



19 宮古市 富古市街



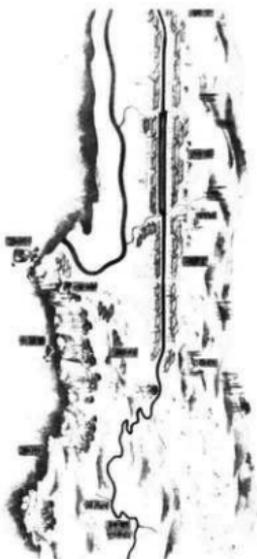
20 宮古市 磯ヶ崎町



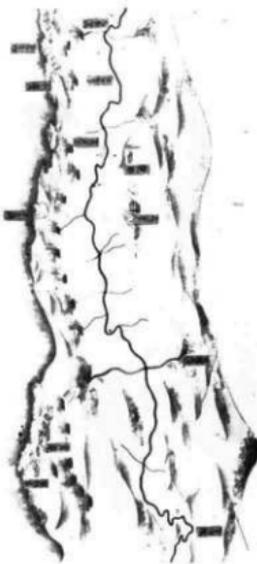
21 宮古市 (まの穴から築城(一里塚の印あり))



22 田老町 栃木坂附近



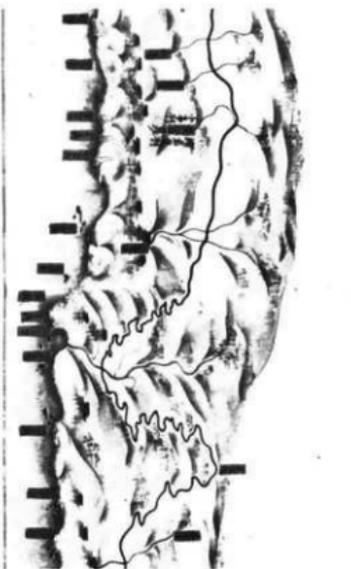
23 田老町 田老と乙部



24 田老町 梁の神付近(一里塚の印あり)



25 岩泉町 小本から中野へ



26 田野畑村 横木沢坂



27 田野畑村 松前沢



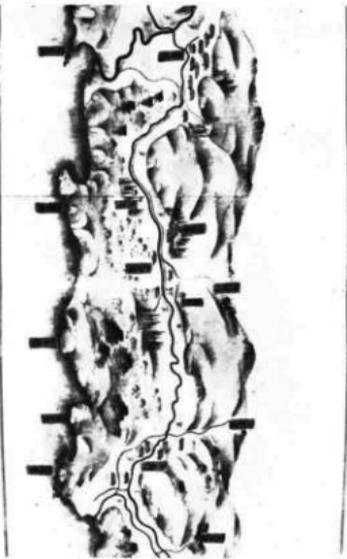
28 田野畑村 松前沢より平波沢まで



29 田野畑村 霧賀から机へ



30 善代村 本田名部坂



31 善代村 善代から力持へ



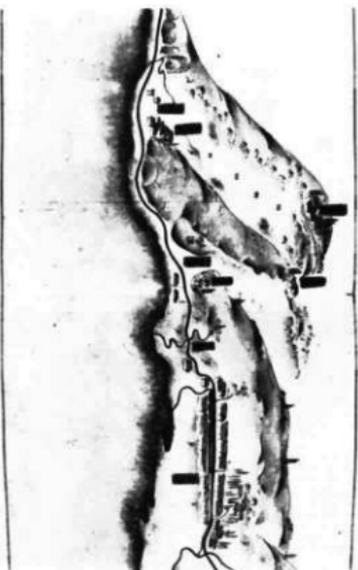
32 善代村 野田村境から下安東



33 野田村 鎮神の一里塚



34 野田村 玉川の西行屋敷

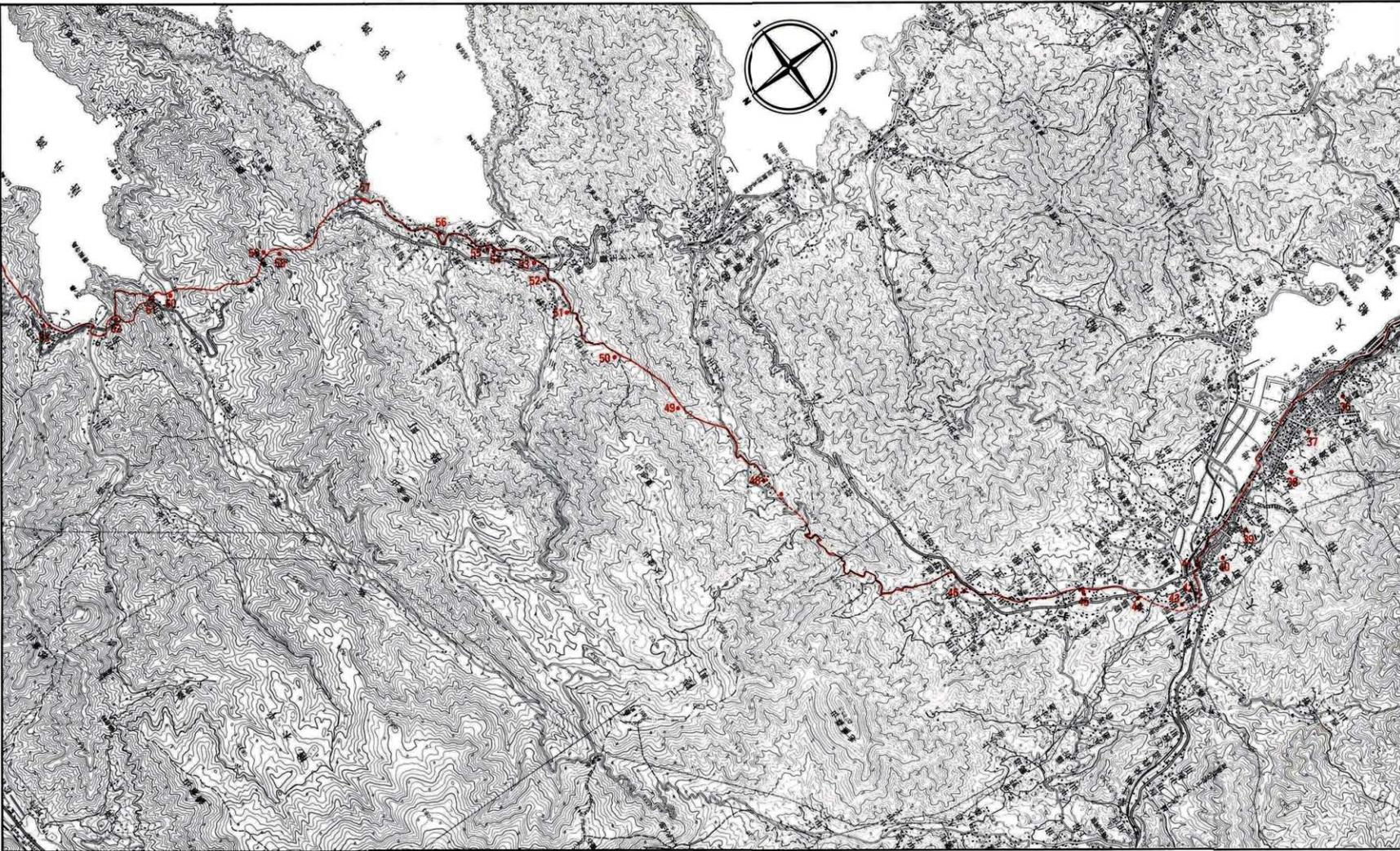


35 野田村 十指が瀬から城内へ

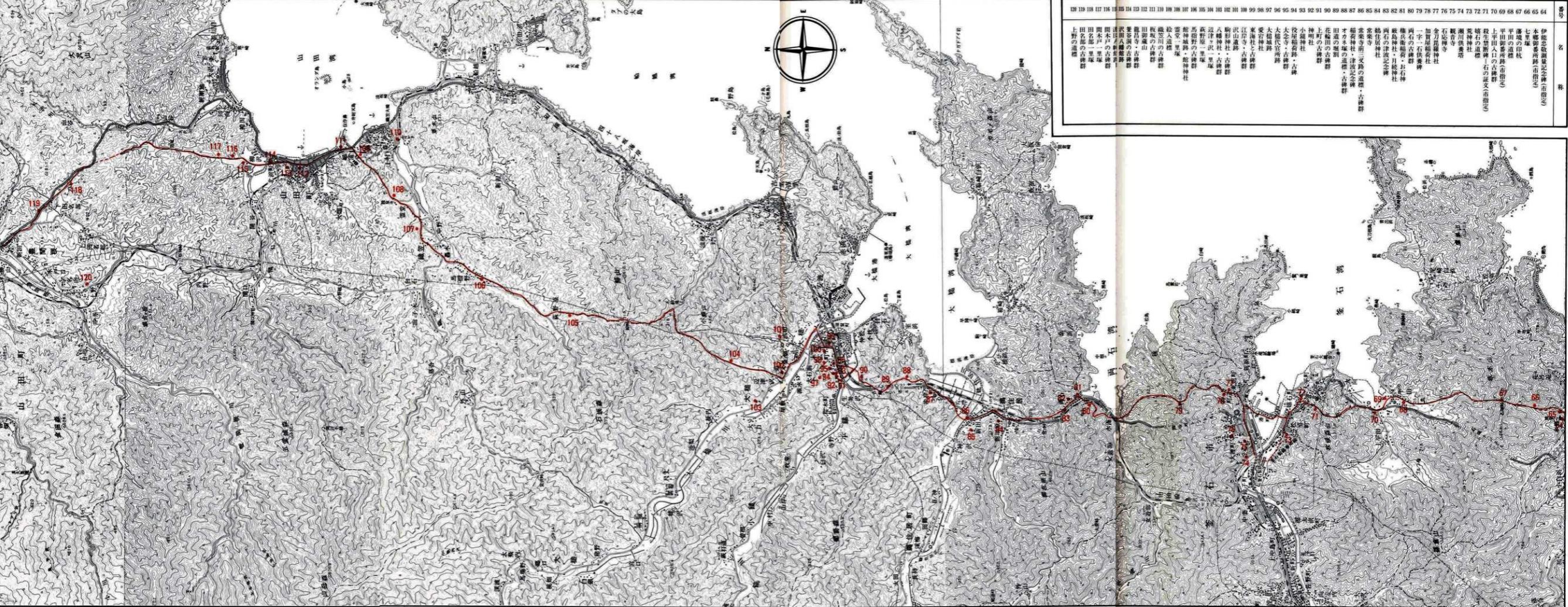


36 野田村 久遠市場から久重へ

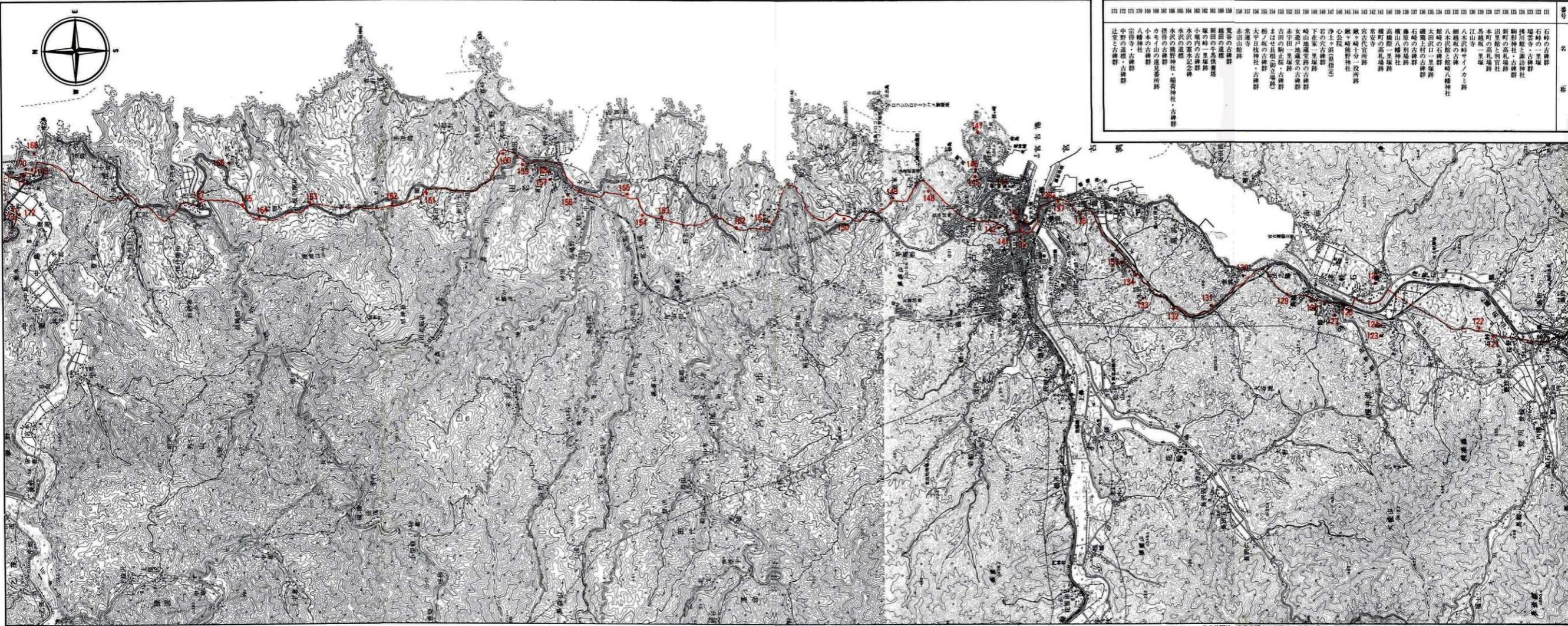
番号	名	種
63	松の坂の地蔵	
62	サイノ神の地蔵	
61	水上の道祖	
60	牧田の金尾羅大権現碑	
59	月山坂登り口の古碑群	
58	月山神社	
57	長岡寺の道祖・古碑群	
56	二百石の道祖・古碑群	
55	鹿島神社	
54	鹿島神社	
53	鹿島神社	
52	鹿島神社	
51	鹿島神社	
50	鹿島神社	
49	鹿島神社	
48	鹿島神社	
47	鹿島神社	
46	鹿島神社	
45	鹿島神社	
44	鹿島神社	
43	鹿島神社	
42	鹿島神社	
41	鹿島神社	
40	鹿島神社	
39	鹿島神社	
38	鹿島神社	
37	鹿島神社	
36	鹿島神社	
35	鹿島神社	
34	鹿島神社	
33	鹿島神社	
32	鹿島神社	
31	鹿島神社	
30	鹿島神社	
29	鹿島神社	
28	鹿島神社	
27	鹿島神社	
26	鹿島神社	
25	鹿島神社	
24	鹿島神社	
23	鹿島神社	
22	鹿島神社	
21	鹿島神社	
20	鹿島神社	
19	鹿島神社	
18	鹿島神社	
17	鹿島神社	
16	鹿島神社	
15	鹿島神社	
14	鹿島神社	
13	鹿島神社	
12	鹿島神社	
11	鹿島神社	
10	鹿島神社	
9	鹿島神社	
8	鹿島神社	
7	鹿島神社	
6	鹿島神社	
5	鹿島神社	
4	鹿島神社	
3	鹿島神社	
2	鹿島神社	
1	鹿島神社	



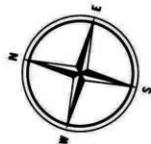
番号	名 称
120	伊能忠敬測量記念古井指(区)
119	七郎蔵所蔵古井指(区)
118	藤岡の印杭
117	平田の道標
116	上平田所蔵古井指(区)
115	上平田入口の古井指
114	殺生堂跡碑・石の証文(市指)
113	碓石の道標
112	碓石神社
111	碓石寺
110	観川寺塔
109	石心寺
108	金刀比羅神社
107	一字一石供養碑
106	両石の古井指
105	碓石の古井指
104	碓石神社・月読神社
103	碓石津波記念碑
102	常楽寺
101	常楽寺前・又路の道標
100	古井指
99	細野神社・津波記念碑
98	オカキ塚の道標・土井群
97	旧道の地割
96	花輪田の古井指
95	神門の古井指
94	神明社
93	投石塚跡・古井
92	大念寺・古井群
91	大徳院
90	大徳院跡
89	愛宕神社
88	東海社と古井群
87	江岸寺・古井群
86	沢山遺跡・古井群
85	駒形神社・古井群
84	八幡神社・古井群
83	馬折野一里塚
82	馬折野の古井群
81	船神社跡・船神社
80	碓石一里塚
79	碓石の古井群
78	碓石の古井群
77	碓石の古井群
76	碓石の古井群
75	碓石の古井群
74	碓石の古井群
73	碓石の古井群
72	碓石の古井群
71	碓石の古井群
70	碓石の古井群
69	碓石の古井群
68	碓石の古井群
67	碓石の古井群
66	碓石の古井群
65	碓石の古井群
64	碓石の古井群



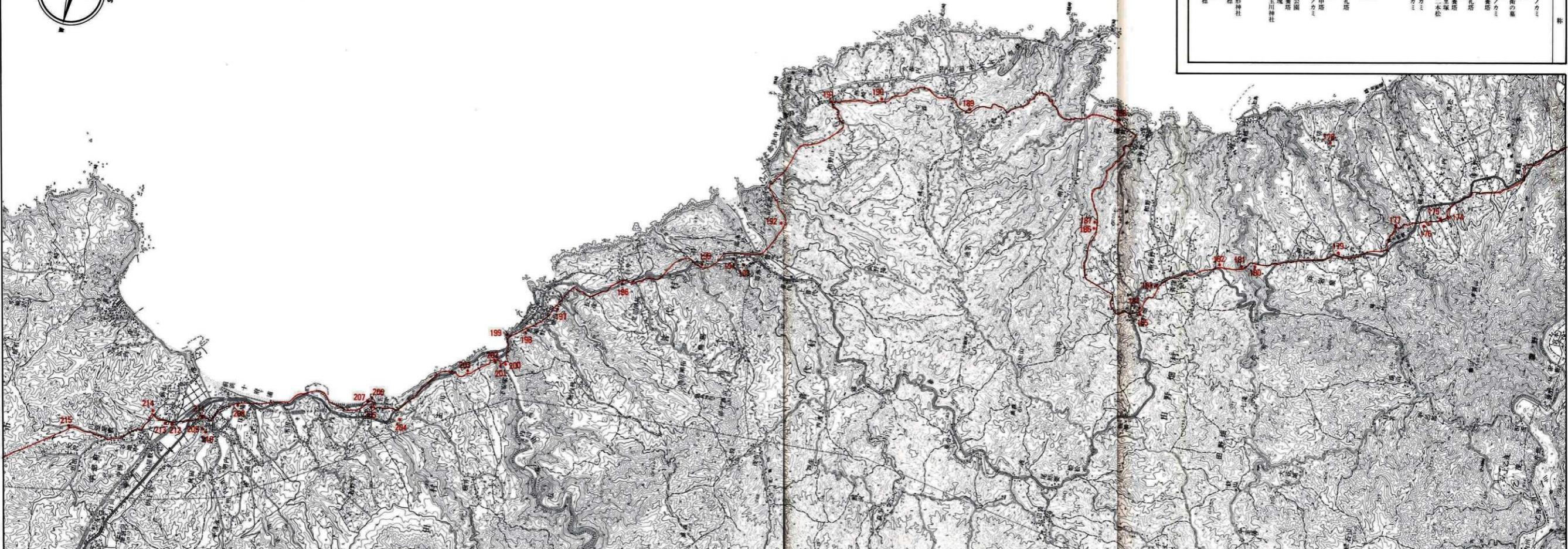
この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭57家 授、第84号



番号	名
121	石神の古群
122	石神の一里塚
123	瑞雲寺・古群
124	横川殿・三浦神社
125	駒形神社・古群
126	沼野の高札場
127	沼野と四宮社
128	本町の高札場
129	江山寺
130	八木沢村サイカシの跡
131	細越の古群
132	八木沢村と館崎八幡神社
133	館崎の石群
134	太田沢口一里塚
135	石崎の古群
136	横山八幡神社
137	高橋の一里塚
138	横町の高札場
139	宮古代官所跡
140	磯ヶ崎十分段所跡
141	磯ヶ崎神社
142	浄土院
143	若の穴古群
144	下在家一里塚
145	崎山通風堂跡の古群
146	女遊戸藏家の古群
147	赤宇田一里塚
148	吉田の駒止版・古群
149	まは七段所跡
150	太早神社古群
151	常楽寺
152	志沼山古群
153	寛谷の古群
154	越田の遺跡
155	新田の牛馬供養塔
156	坂の町一里塚
157	小塚の古群
158	水沢の遺跡
159	水沢の修野神社・船形神社・古群
160	持持の古群
161	カモイ山の遊覧客所跡
162	小木の古群
163	八幡神社
164	中野の古群
165	社堂の古群



番号	名称
175	弥波の古神
176	横沢の古神
177	切子・弥波の古神
178	大正の古神
179	弥波の古神
180	弥波の古神
181	弥波の古神
182	弥波の古神
183	弥波の古神
184	弥波の古神
185	弥波の古神
186	弥波の古神
187	弥波の古神
188	弥波の古神
189	弥波の古神
190	弥波の古神
191	弥波の古神
192	弥波の古神
193	弥波の古神
194	弥波の古神
195	弥波の古神
196	弥波の古神
197	弥波の古神
198	弥波の古神
199	弥波の古神
200	弥波の古神
201	弥波の古神
202	弥波の古神
203	弥波の古神
204	弥波の古神
205	弥波の古神
206	弥波の古神
207	弥波の古神
208	弥波の古神
209	弥波の古神
210	弥波の古神
211	弥波の古神
212	弥波の古神
213	弥波の古神
214	弥波の古神





番号	名称
235	下長内の庚申塔
236	諏訪神社
237	龍野神社
238	別山神社
239	長福寺
240	大徳宮
241	寺家の道標
242	吉田の庚申塔
243	長泉寺の大菩薩像(指定)
244	平山神社
245	若宮の庚申塔
246	金刀比羅神社
247	駒形神社と霊院塔
248	体み庵
249	北野球場跡
250	北野の庚申塔
251	北谷の八幡宮
252	御多所跡
253	龍野神社
254	中野の庚申塔
255	有家の庚申塔
256	玉川の大神・古神
257	鹿島の道標
258	板橋の庚申塔
259	ジャマトリの一里塚
260	種市城跡
261	八幡宮
262	田原街道の庚申塔



この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭57年 複、第84号

岩手県文化財調査報告書 第七十六集

浜 街 道

昭和五十七年三月三十一日 発行

編 纂 岩手県教育委員会事務局文化課

発 行 岩手県教育委員会

印 刷 杜陵高速印刷株式会社